

Z32-B88

金の星



国立国会
8. 3. 26
図書館

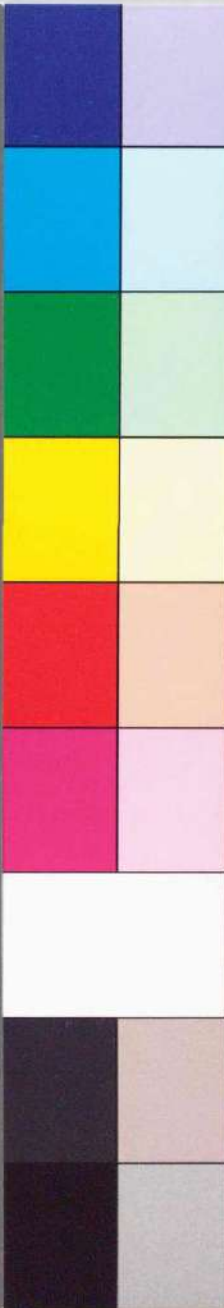
第六卷 第六号 第六號

行發日一月六年三十五大 本納期日九月五年三十五大 (行發日一回一月每) 可認物能轉種三第日三十月六年一十五大

inches
cm
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 8

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak



高級
繪雜誌

「ミソラ」六月(第二卷)

- △たらのひ舟 (表紙).....寺内 萬治郎
- △夕の星 (童話).....野口 雨情作
- △花ぞの (聖書童話).....清水 良雄畫
- △坊やが大きくなつた (童話).....沖野若三郎作
- △畫の夢 (童話).....寺内 萬治郎畫
- △お陽さま (童話).....賀川 豊彦作
- △女王の首 (童話).....寺内 萬治郎畫
- △鳩の家 (童話).....鈴木 淳
- △はつ夏 (童話).....鈴木 淳
- △白馬 (童話).....鈴木 淳
- △象の真似 (童話).....鈴木 淳
- △螢のお使ひ (童話).....鈴木 淳
- △救主の話 (聖書童話).....鈴木 淳
- △九官鳥 (童話).....鈴木 淳
- △降りだした (表紙).....鈴木 淳
- 童話作曲.....鈴木 淳
- 童謡作曲.....鈴木 淳

一冊定價四十錢 郵税壹錢五厘

大阪西區土佐三番 社ラソミ 振替六二九一 大番一

カルピス

色
香
味
キキ



野口雨情先生著 ■ 挿畫
 落谷虹兒畫伯
 寺内萬治郎畫伯
 武井武雄畫伯

童謡集 青眼の人形

總絹表紙特製天金、紙數約二百三十頁、定價壹圓八拾錢、郵送料十五錢

雨情先生の童謡中特に傑作のみ八十篇を撰んで一冊となした
 もの、しかも、目もさめるばかり美しい装幀に飾られた本書は、
 童謡界最初の模範的出版であります。賣切れぬ内御購下さい。

東京市外田端三五
 金の星社
 振替東京五九九六番
 電話小石川五三八七番

武井武雄先生著並畫
 四六判箱入美本 定價金壹圓六拾錢
 本文約三百頁、送料金十五錢

繪入ブウ太郎鍛冶屋 童話集

(目次)
 ブウ太郎鍛冶屋
 蜂のの着物
 竹の着物
 化けマンダリン
 陸軍の大將
 お軍の玉
 流れの星
 眼のれ
 不朽の花
 世に取つたよ
 又取つたよ
 木塊の靴
 其他の靴

武井武雄先生くらの面白い畫とお話を書く方がありますま
 い。こんな特色のある畫とお話を作る作家は、廣い世界を探
 し廻つても先づ無いでせう。全く日本の童話界の大きな誇り
 す。その武井先生の最初の繪入童話集ですから、全くすばら
 しい本です。お話しも面白く面白く面白く面白く面白く面白く
 いもの揃です。箱入のそれはくきれいな本で、お話しの外に
 美しい繪が澤山に入つてゐます。武井先生の畫とお話の好き
 なお方には是非読んでいたゞきたい本です。

東 京 市 外 田 端 三 五
 一 五 三
 東 京 市 外 田 端 三 五
 一 五 三
 振 替 東 京 五 九 九 六 番
 電 話 小 石 川 五 三 八 七 番
 振 替 東 京 五 九 九 六 番
 電 話 小 石 川 五 三 八 七 番

長尾豊著・外山彦平・中山晋彦・小田島樹人・海野厚編

教室劇

| | | |
|------------|------------|-----------|
| ▲教室劇 | ▲草川信童謡曲集 | ▲子供達の歌 |
| 第一編 小公子と熊部 | 第一編 白うさぎと風 | 第一集 赤い鉛筆 |
| 第二編 アルカス | 第二編 日と | 第二集 七色の鉛筆 |
| 第三編 小公子と熊部 | 第三編 白うさぎと風 | 第三集 赤い鉛筆 |
| 第四編 アルカス | 第四編 日と | 第四集 七色の鉛筆 |
| 送各料四十錢 | 送各料四十錢 | 送各料四十錢 |

歌集

東京市外白眉出版社 振替東八 九四四八

ナポレオン物語

◇世界少年少女名著大系◇金の星社編

忽三版

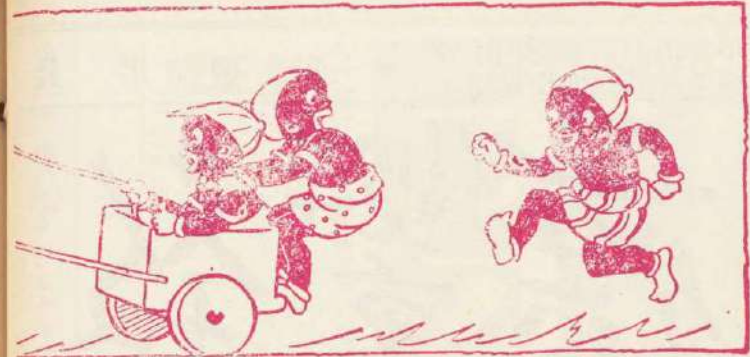
寺内萬治郎先生装畫・四六判箱入美本・挿畫三色版外敷葉・本文百六十頁・定價金九十錢・送料十五錢

「ナポレオン物語」は即ちナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた一少年ボナパルトが、ナポレオン大帝と稱せられて歐洲を征服する榮華の時代から、遂に南大西洋の孤島セント・ヘルナで淋しい死を遂げるまでの變化極まりない物語りを、わかり易く、面白く書いたものです。一代の英雄ナポレオンの面影は、必ずや讀者に大きな反響を與へるでせう。

第一編・ロビンソン漂流記 (近刊) 定價金九十錢 送料十五錢

第二編・ドン・キホーテ物語 (近刊) 定價金九十錢 送料十五錢

金の星社 振替東八 九四四八



目次 (第六卷・第六號)

虹の橋かけ た(表紙・原色版)……………寺内萬治郎
 小人國へ行ったガリバー(口繪・三色版)……………泰西童話名畫
 籟の下の道……………(一)野口雨情
 同作曲……………(二)本居長世
 決死の使者……………(六)西條八十
 どろ坊學校……………(四)小島政二郎
 虎になつた學者……………(三)安成二郎
 耳無し法市……………(二)三宅房子
 十五少年漂流物語(長篇)……………(四)霜田史光
 ホシローヒルム(鳥捕りの巻(漫畫))……………(五)寺内萬治郎
 櫻川……………(英)茅野雅子
 さみだれ……………(各)達崎龍

湖水の女王……………(空)森川一郎
 三太郎と筍……………(次)松平三千夫
 化けの皮を賣る人……………(夫)柳井正夫
 どんと風吹けよ……………(空)若山喜志子
 きやツきやツ物語……………(各)久米 絃一
 ラム王の一生……………(英)武井武雄
 雀のお宿……………(三)野口雨情選
 か……………(三)若山秋水選
 景……………(三)山 本 鼎 選
 南小樽まで(綴方)……………(三)齋藤佐次郎選
 (附 録)
 誌上どちらが偉い?……………(九)沖野岩三郎
 長篇童話 猿になつた王子の話……………(一〇)中島孤島
 挿 畫……………(一〇)寺内萬治郎
 武井武雄 水島附保 布 雄





小人國へ行ったガリバー
(泰西童話名畫その四)

(スピアスト作「ガリバー旅行記」より)

▼落谷虹兒先生著

〇四六版上製箱入總羽二重頗る美本
 〇定價金二一圓也 送料金十五錢

愈發賣

虹兒
 画譜

悲しき微笑

原色版入挿畫のみ
 にて實に三十餘枚
 本文用紙全舶來上
 質紙空前の美本と
 して忽ち一大好評

▼待ちに待ち明かされたる本書は茲に眞如の月の如き氣高さと懐しさを以て生れ出でたのである。全畫悉く新たに描きたる麗筆は今や吾國に其技の及ぶ者もとてなからむ。天才獨歩の叡知は其一線一彩、何人も驚異と感激の境に恍惚たらしむるものと謂ふべし。

葉我

野口雨情
 先生著

童謡作方問答

童謡詩人の第一人者たる先生が
 誰人にも判り易く説明する
 定價金一圓 送料金十三錢

渡櫻

西條八十
 先生著

靜かなる眉

著者の處女詩集にして若き日の
 思ひ出を歌へる多情有縁の詩集
 定價金九十錢 送料金十一錢

風も

水谷まさ
 先生著

寶石の夢

語るに由もなき女學生諸嬢の胸
 を一管の麗筆に托して歌へるもの
 定價金九十錢 送料金十一錢

もとい

下田惟直
 先生著

胸より胸に

少女畫報の主筆として名聲高き
 著者の第一詩集である
 定價金一圓卅錢 送料十三錢

しよとい

水谷まさ
 先生著

少女詩の作り方

詩や小曲を初めて作らうと思ふ
 人は是非本書を讀まねばならぬ
 定價金八十錢 送料十一錢

交蘭社

東京 東區 神田 區 二丁目 南座七
 保東九 町京番

◇ 書叢題問育教の院書アデイ ◇

版四十忽

自由教育論

主成城小學校 小原國芳著

教育問題叢書 第一編

頁〇八二版六四
錢十八圓一價定
錢八料送

「自由教育」の主張は現代の日本教育を救ふべき何物かを必ず有してゐる。ソツクオでも、エレンケイでも、ニーチェでも、グルツトでも、モンテッッソリーでも、實に貴いものをもつてゐた。何時までも、何時までも、古い狭苦しい教育論に沈澱してゐては子供達がホントに可哀さうでたまりませぬ。世の父兄の方々、そして學校の先生方へ本書を心からおすすめていたします。

野口雨情著

教育問題叢書 第五篇

版九忽

童謡と兒童の教育

頁廿百二版六四
錢十五圓一價定
錢八料送

童謡は郷土に生れたもの
童謡は子供のもの
童謡は教育の指導
童謡は詩人の心を
童謡は詩人の心を
童謡は詩人の心を
童謡は詩人の心を

兒童圖書館叢書

書館のない學校は眼玉の無い學校ほどつまらない
學校です。子達に山ほどの良書を興へて下さい。
秀才教育に絕對に必要なものは本と暗示である……オストロルド

| | | | | |
|------------|------------------|------------|-------------|-------------|
| 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 物語 | 物語 | 童話 | 物語 | 童話 |
| 西遊記 | 黄金島 | 飴子チョコの天使 | 弓張月 | 星の國 |
| 吉田助治編 (新刊) | スナゲンソン著 赤坂清七編 六版 | 小川未明著 (六版) | 吉澤馬助著 (六版) | 赤坂清七著 (六版) |
| 送定二〇〇八〇 | 送定一〇八〇 | 送定二〇〇八〇 | 送定一〇八〇 | 送定二〇〇八〇 |
| 10 | 9 | 8 | 7 | 6 |
| 童話 | 童話 | 童話 | 童話 | 童話 |
| おたまじやくし | 黒船物語 | 木の葉の使ひ | マツチの兵隊 | 鈴 |
| 齊田喬著 (近刊) | 沖野岩三郎著 (近刊) | 野口雨情著 (近刊) | 水谷まさる著 (新刊) | 河野伊三郎著 (新刊) |
| 送定一〇八〇 | 送定一〇八〇 | 送定二〇〇八〇 | 送定一〇八〇 | 送定一〇八〇 |

刊新最

藝術の理解

アクション 神原泰著
同 四六版二百廿頁定價一圓八十錢
繪畫の理解—アングルのピカソ—
ヒカソの音楽—ホルネルのエビツ
—ト—未來派演習書—未來派演習中
—宣言書—裝飾の問題—ホルネ
—ス—ア—キン賞讃—マリ—ロ—ラ
—ン—サン—の藝術—立派派の紹介

◀ 版出院書アデイ ▶

座口替振院書アデイ 區込牛市京東 所行發
三二四五—京東 四一町伏山

雨情選作叢書

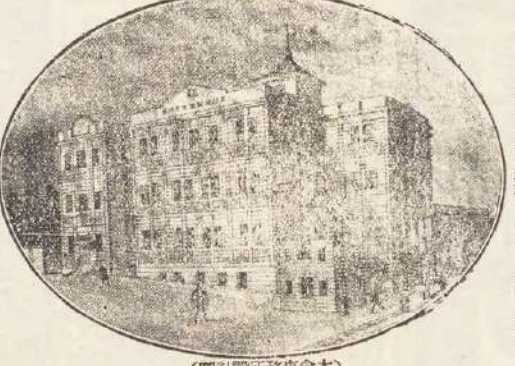
各大家の作曲入・定價各冊五十錢・送各冊二卷

- 本居長世先生作曲
◇帝都復興の歌(童謡)
(帝都復興の歌・アンデルセン)
- 中山晋平先生作曲
◇須坂小唄(民謡)
(須坂小唄・かなしい海)
- 大和田愛羅先生作曲
◇雀遊(遊技唄)
(雀遊・南風北風)
- 佐藤千夜子女史作曲
◇野の唄・海の唄(子守唄)
(野の唄・海の唄)
- 藤井清水先生作曲
◇矢車草の咲く村(民謡)
(矢車草の咲く村・機織り虫)
- 宮崎琴月先生作曲
◇二つの蝶々(童謡)
(二つの蝶々・皆さん明日また)

雨情選作叢書は野口雨情先生作の童謡民謡中より、傑作、優作の作品を選び、作曲大家の作曲を付して連続出版いたします。童謡と民謡の新しいパンフレットです。

發行所 東京東錦町一丁目 振替東京五三二九一
米本書店

天下青少年の登龍門



(本會事務所設園)

會長 尾崎行雄
正三位 山内繁雄
學監 遠藤隆吉
文學博士

中日新學期開講中
入會の最好期は今也!!
講義録見本つき會則
— 申込次第無料進呈 —

大日本國民中學會あり!!

天下の青意を強てし可也
少年諸君

諸君は學校萬端の遠慮より醒めなければならぬ、中等教育を受けるには必ずしも中學校に入るを要しない、諸君は居ながらにして中學校に屬すべきが出来るのである。大日本國民中學會の原動力をつくる團體は學校以上の學校、教師以上の教師として諸君に望むであらう。

本會二十二年の試練と經驗とは、に次の如き
独自の特色を獲得せり。

- 1. 講義の新しいこと……… 徹底的通信教授法として推廣せらる。
- 2. 會費の賤いこと……… 本會の學費一ヶ月分の遊學費にも達せず。
- 3. 學制の正しいこと……… 正論に中學校令に従ひ全く中學校と同様也。
- 4. 指導の良いいこと……… 通信教授に木き經驗を有するを以て指導懇切を極む。
- 5. 講師の善いこと……… 中等教育者として令名ある實業家を選ぶ。
- 6. 業の早いこと……… 僅か二ヶ月の短日月にて卒業の榮光を得らる。
- 7. 基礎の固いこと……… 創立以來二十二年國家の事業として一般に認めらる。
- 8. 成功の確なこと……… 本會の門より出でたる成功者の多きことを詳ふを用ひず。

東京河東 大日本國民中學會
電話 東京 四二〇〇番 電話 神田 三〇〇二番 三〇〇三番
三〇〇四番 三〇〇五番
口振 (名古屋) 四二八〇番 特設 牛込 五〇九五番

野口雨情先生著 童謡教育論

定價四十錢 送料二錢

野口雨情先生著 童謡作法講話

定價四十錢 送料二錢

西川勉先生譯 メエテルリンク童話集

定價一圓五十錢 送料十八錢

四六版挿入・挿畫數葉本文三百三十頁
世界に有名な童話作家ありすがメエテルリンクの書いたお話しは世界中に歡迎されたものはありません。あの『青い鳥』がどうして各國々の少年少女から喜ばれるのでせう。この集りの中に有名な『青い鳥』を始め日本では餘り知られて居ない、尼の身替り、犬、青熊爺さん、盲人等の面白いお話しばかりです。



通巻第五拾五号

童謡舞踊

野口雨情作曲
本居長世作曲

眞島睦美振付

菊判美装 定價金一圓
全一冊 書留送料十二錢



創造と教育、藝術と教育、新しい教育はこゝから生れて来る、
本書は著者が
兒童の教育と
藝術との境地
に立つて音楽
とその内的律
動とを綜合的
に振付けられ
た獨創の舞踊
教科書である

新しい教育と言ふ言葉が盛んに流行してゐます。今までの兒童は人間生活の第一の要素である個性の發揮だとか、創造力の培養と言ふことを全く無視して致へられて來ました。教へることはかりが教育だと思はれてゐたからです。それが遂に人眞似ばかり上手な國民を造らへて了つたのです。新しい教育の必要が叫びてゐます。そして舞踊が學校や家庭で非常に重要な意義を持つやうになりました。本書は十五夜お月さん、七つの子、歸る燕、の三つの童謡を採つて藝術品としての本領を忘れない様に振付けた童謡舞踊であります。どこまでも往來の遊戯と言ふ幼稚な氣分を離れて眞實の藝術品である所に本書の偉影が讀まれます。

所業營假
區橋本日京東
二二町場茅南

大倉書店

電話六四一四

振替東京二八三番

藪の下道

本居長世作曲

軽快 =

こーしを
はーかへ

はたは かの の おか
あかに やすあ は おか
はあかに やすあ か へ

のほそみち ちかみち じゃ
のほそみち ちかみち じゃ

う
う

rit. *a tempo.*
は り な さい
は り な さい
は り な さい

rit. *a tempo*

藪の下道

野口雨情

ここを通れば雀のお宿

こここの道近道ぢや

さあさ急いで通りなさい

雀のお宿にや雀はお留守



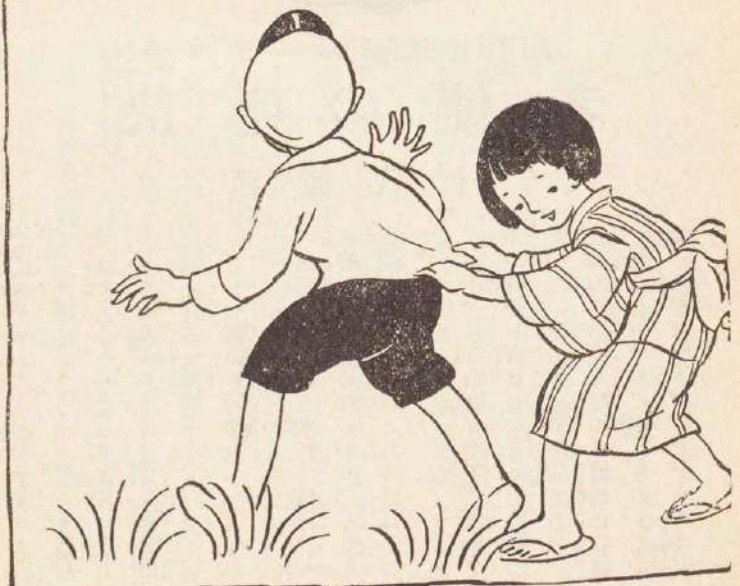
こここの道近道ぢや

さアさ急いで通りなさい

早く通らにや雀が歸る

こここの道近道ぢや

さアさ急いで通りなさい





傳勇武軍將ルーラエヂ
者使の死決
 十八條西

前號の梗概。サエヤール中尉はナゴレオン大帝の密使となつてパリへ向つて進む途中、戦友のアーベに出遇ひ敵を追拂つて市長の屋敷を占領したところ、再び敵軍の逆襲に遇ひアーベは戦死して了つた。

一 怪し人影

諸君！アーベと別れて僕は、一人客へ身を潜めたものの、とても安閑としてゐられる身ではなかつた。

アーベは今の騒ぎで手に持つてゐた蠟燭を取落したなり出て行つたので、客の中は眞暗闇である。僕は四ん這ひになつて蠟燭の在處を探したが、手に觸るものとは蠟燭の破片ばかりだ。だがその中に

やうやう或る樽の蓋で投り當てた。そこで火打箱を擦つて灯を照けようとしたが、どうしても照かない。てつきりこれは心が酒で濡れてゐるのだと思つたので僕は蠟燭の頭を軍刀でスカリちよん切つた。さうして試つて見ると、今度は造作なくバツと照火した。

だが次には何としたものか？ 頭の上には敵の奴等の叫び罵る聲が聞える。聲の様子では五六百は大丈夫居さうだ。さうかうしてゐる中に、奴等の誰かがきつと酒を飲みに客へ行かうと云ひ出すに定つてゐる。さう來ればそれが自分の最後だ。大切な役目も勳章のあても何もかもそれでおしまひだ。又も僕は故郷に歸した母親のことを想ひ、同時に皇帝陛下の御身の上を案じた。さうして眼の中が妙に熱くムツ痒くなつてゐるのを感じた。だが暫くして僕は、惨み出る涙を兩の拳でふり拂ひポンと大きく胸を殴いた。さうして云つた。

「しつかりしろ！ 佛蘭西の軍人ぢやないか！ モスコの雪の中で死ななかつたおれだ。こんな客でをめくたばつてたまるもんか！」

僕はチヨツキのかくしの例の書類に手を觸れてみた。ガサ／＼と云ふその音が僕の全身の勇氣をふるひ起たせた。まづ胸に浮んだ最初の計畫はこの家に火を放つて、手にとらへた。さうしたら混雜にまぎれて逃げ終せられるかも知れない。

その次の計畫は空樽の中へ身を隠す事であつた。格好なものと思つて、僕はあたりを見て廻つた。

と、突然隅のところに小さな扉が在るのに気がつた。あたりの壁とまつたく同じ色で塗つてあるの。僕はそれをウソとばかり押ししてみた。最初は勿論鍵が懸つてゐると信じてゐた。

ところが意外にもその扉は少しばかり中へと開いた。ちややないか！ して見ると何か重いもので裡から突

支棒がされてゐるに違ひない。

『ようし！』

と僕は思つて、今度は片足をあげて力いっぱいそれを蹴り上げた。と、その勢で扉は美事開いたが、はずみを喰つて自分の身體の方がドサリ仰向きまにうしろに倒れ、手の蠟燭は何處かへすつ飛んでしまつた。あたりはもう一べんもとの眞の闇に返つた。やがて僕は身體を摩り／＼起き上つて、その扉口から裡をのぞいてみた。

どこかに隙間か又は鐵格子でもあるのか、ぼんやりした灰色の光線がその室の中に射し込んでゐた。長つばそい大櫛が幾個も並んでゐるのがおぼろげに見られた。戸外ではもう夜が明けそめたらしい。

室の様子からして僕には、ここは市長が酒を十分熱れさせるために藏つておく特別の場處だと云ふことがわかつた。

だが、いづれにしても、外の響でまご／＼してゐ

た場處の、しかも薄暗い中でこんな思ひがけない敵に出會しては少々ギョツとせざるを得ない。

だが、その驚きはほんの一寸の間であつた。僕は自分に向つて云つた。

『しつかりしろ！ コサツク兵隊が何だ！ 貴様は皇帝陛下の天命を帯びた名譽の軍人ぢやないか！』

そこで僕は改めてキツと敵の方へ向き直ると、何の事！ 自分よりは先方が、更に更によけい、此方を怖れてゐることがわかつた。と云ふのは、その巨男先生、自分の姿を見ると、鼠のやうにその大きい軀を屈めてドサ／＼と櫛の蔭へ逃げ込んだからである。

かうなればもうべたものである。僕は今までの怖れは何處へやら、意氣昂然として、ツカ／＼と酒樽の間を、かれの方へ向つて突き進んだ。

最初僕は蠟燭を照けるのを控へた。と云ふのは自分の姿がはつきりと敵の目標になるのを怖れたからである。だが向脛を木箱にいやと云ふほど打付けた

るよりは、此處は身を隠すに更に屈辱な場處だと僕は考へたので、落ちた蠟燭をもう一べん拾ひ取つてノコ／＼入るなり、うしろの扉を閉めようとした。と、その途端、僕はギョツとして總身の血が一時に冷えわたるのを感じた。何物かが眼の前數歩のところを蠢いてゐたのである！

二 稀代の妙計

ぼんやり射してゐる灰色の朝の光線の中に、僕が認めたのは、まがひも無い一個の怪しい人影であつた。それと見た刹那、僕はハツとして、あまりの驚怖に頭をしたたか傍の櫛の角に打付けた。

が、それにもかかはらず、僕は一目でその怪しい人影が何者であるかを見とつた。それは毛深いコサツク兵の帽子を頂き、腰に長劍をさげた雲つくやうな巨男だつた。

天下の豪傑、エライエンヌ・ヂエラールもかうし

り、靴の拍車がそこらの麻布に引掛つたりするのに我慢し切れなくなつた。そこで大膽にも點火して、右手に軍刀を閃めかしながら、大股に歩み寄り、

『さあ出て来い！ 泥鼠！ 逃げようたつて到底逃がさぬぞ！ 覺悟をさだめてその素首を引きわたしたに出て来い！ くら！』と、威勢よくとなり立てた。

僕が蠟燭を高くさしあげて空の隅々々睨め廻してゐると、やがて一つの櫛の上に、人間の首がヌーッと突き出た。黒い軍帽に金モールで、士官の章の山形がついてゐる。ギョロリと眼の光つた小氣味のいい軍人面だ。

その首が流暢な佛蘭西語で、僕にかう言葉を掛けた。

『僕は神妙に降参します。しかしそれでも貴公が命を助けて下さらないとあれば、僕は最後まで貴公と戦ひます。』

『よろしい。われ／＼佛蘭西の軍人は不幸な敵に對

する情を知つてゐます。承知しました。貴公の生命は誓つて安全です。」

僕がかう答へると、かれはその軍刀を樽越しにおとなしく僕に手渡した。僕は丁寧に答禮して受取つて、さて改めて、

「僕が捕虜とした貴公の姓名は何と云はれるか。一



應伺ひたい。」

と訊ねた。

「僕はコサツク兵の大尉、ブートキン伯爵です。サンスの偵察に部下を伴つて参つたのです。ところが貴公の軍隊の影が見えないので、今度はここに宿泊することになつたのです。」

相手は包まず答へた。

「して、又貴公は如何なる理由でこんな密の奥の室に居られたのですか？」

僕は重ねて訊いた。

「いや、その理由は至つて簡單です。」

と、コサツクの士官は答へて、

「明朝夙くにここを出立しようと思ふのがわれ々の豫定でした。そこでそろつて寢床に就いたのですが、何分喉が乾くので飲料をと思つてここへ参つたのです。で、あちこちと探し廻つてゐるうちに、突然貴公の軍隊が押寄せて來られ、僕があわてて階段



を駆け上る暇もなく、この家は全部貴公等によつて占領されてしまつたのです。で僕としてはもはや自分一人の命を助けるよりはかに方法が無く、いろいろ工夫した末、この密の奥室に身を隠したのでした。そこへ貴公がやつて來られたと云ふ譯です。」

僕は今の今まで自分の傍にゐた戦友ブーベが、この士官と全く同じ運命に陥入つて空しく命を落したことを想ひ、話を聴きながら又しても熱い涙が眼底に湧いてくるのを覺えた。

さて次に僕はこの場の結末をどうつけたものかと思索した。

明らかにこの露西亞の伯爵は、密の奥にゐたので今の騒ぎを知らないのだ。一旦佛蘭西軍に占領されたこの家が、二度かれの味方である普露西軍の手によつて奪ひ回されたことを知らないのだ。若し知つたが最後、僕とかれとの地位は忽ち反對になるのだ。今度こそ僕が彼の捕虜となるのだ。

どうしたら、彼に何事も知らせずこの場をうまく切り抜けられようか。

僕はさんざんに脳味噌を絞つた。が、そのあげく實に自分ながら吃驚するやうな妙計を案出した。

僕はコサツクの大尉に向つて、かう云つた。

「ブートキン伯爵！僕はまつたく苦しい羽目になりましたよ。」

「どう云ふ理由ですか？」大尉は訊ねた。

「今しがた僕は貴公の生命を助けると約束しましたな？」

かう僕が云ふと、コサツクの大尉の顔色はサツと青白めた。彼は顫聲で、

「まさか貴公は約束をお取消しになるのではありませんまいな？」と、念を押した。

「勿論、佛蘭西の軍人は二枚舌は使ひません。」

と、僕はきつぱり答へて、

「だがそこが難かしいところなのです。」

「して又それは何故ですか。」

「では打明けたお話をしますが……」

と、僕は咳一咳して、

「貴公も御存知のことと思ふが、我軍の兵士、——中でも特に波蘭兵たちが、貴公等コサツク兵に對し

コサツクの士官は悲しさに訴へた。

「いやそれは最も悪い方法でせう。」

「とは又何故に？」

「と云ふと、まづ我軍の兵士たちは間もなくこの家中を隅なく家探しするに定つてゐます。さうして貴公を發見したら、かれらは八裂きにするかも知れません。それよりはやはり僕が貴公を連れて行く方が遙か安全です。だがそれとて、かれらが貴公のその軍服に眼をとめたが最後、どんな事が持上るか一寸ここでは受合はれません。」

「ではこの軍服を脱ぎませうか？」コサツクの大尉は憐愍を乞ふ生贄の羊のやうな眼つきをした。

「なるほど、それはうまい考へだ！」僕はわざと膝を打つて、

「貴公はさつそくその軍服を脱いで、その代りに僕のこの服を着られるがよい。さうすれば我軍の兵士たちに見られても一向安心です。」

て怨恨を抱いてゐることは非常なものです。で、かれらはコサツク兵の軍服を一目見てさへも、直ぐに狂人のやうになつて、それを着てゐる者がどんな人間であるかをよく糺しめせず、寄つて集つて鬪殺しにしてしまふでせう。これには上官と云へども到底制止が利かないのです。」

「フーム。」

若いコサツクの大尉は僕の話聞いて、いよ／＼その顔色を白蠟のやうにした。

「いいですか。だから若し、貴公と僕とが伴れ立つてこの窓の外へ出るとなると、僕はどれほどまで確實に貴公の生命を保護し得るか、一寸明言しにくいです。」僕はおごそかな口調で云ひ渡した。

「でも僕はこの通り貴公に降参してゐるのですから執るべき最良の道をどうぞ貴公から僕に教へて下さい。それならいつそ僕だけはこの儘此處に止まつた方がいいのぢやないでせうか？」

「御親切有難う！ 有難う！」

すつかり怖えたつたコサツクの大尉は、僕の申出に手を合さんばかり喜んだが、

「して貴公は？ 貴公は何を召されますかな？」

と氣遣はしさに訊いた。

「僕はもちろん貴公の脱いだ服を着ます。」

「だがそのため貴公の御身に危難が掛るやうなことはありませんかな。」

「危険を冒すのが僕の義務です。だがそんなことを僕は一向に恐れませんが。僕は貴公の軍服を着て平然と出かけて行きます。たぶん數百の軍刀が僕に向つて閃くでせう。併しその軍刀の雨の下で僕は大聲で「止めろ！おれはブリガディエラールだ！」とどなります。さうすれば一同は僕の顔を見てびつくりするでせう。いいですか。さうして一同の勇氣が挫けたところを見て、僕は貴公の話をしませう。さうすれば貴公の身は全く以て安全です。」(つづく)

どろ坊學校

小島政二郎



第一課

昔、盗坊の大先生がありました。盗坊仲間では、先生のことを親分と云ふさうです。或生徒が、「親分、盗坊といふ學問はむづかしいものだと思ひました。親分の教へて下さつた通り昨夜やつて見ましたが、やりそくなつてしまひました。」

「どうしてやりそくなつた？」
「なんでも盗坊は忍足でそつと行くのが肝腎だと教へて下さいましたから、一生懸命で忍足をして行つたのです。すると、向うへ着いたら夜が明けてしまひました。」
「一體どこから忍足をして行つたんだ？」
「家を出るとすぐやりました。」

「さうして先の家までどの位あるんだ？」

「一里半ばかりあります。」

「馬鹿野郎。一里半の間忍足をして行けば夜が明けると極まつてゐる。お前のやうな奴にはとても立派な盗坊になれる見込みはないから止め。」

「そんなことを云はないで、親分、教へて下さいな。私に出来さうな極やさしい奴を教へて下さいな。」

「盗坊にやさしいと云ふのはない。しかし、まあ、それ程まで云ふのなら、今日は俺が一つ連れて行つてやらう。」

「親分と一緒に行って下さいれば安心だ。」

そこで二人は夜になるのを待つて、支度をして家を出ました。

「親分。」

「なんだ。」

「盗坊して捕るとどうなりませうね。」

「極つてゐるぢやないか。懲役に行くのさ。」

「懲役に行く」と云ふと、あの赤い着物を着るんですね。」

「さうさ。」

「つらいでせうね。」

「そりやアつらいとも。この世の地獄と云ふからな。」

「盗坊をして懲役に行かない工夫はありますまいか。」

「そんな工夫があつてたまるもんか。盗坊しても牢へぶち込まれずに済めば、真面目に働く人間なんか一人もゐなくなつてしまふ。」

「盗坊はいゝが、懲役は厭だなあ。——時に親分、どこです、これから盗坊に這入る家と云ふのは：」

「こゝだ。」

「だつて、扉があつて嚴重に締りが附いてゐますせ。」

「塀があつたつて、締りが附いてゐたつて、這入れ
ないことはない。俺のすることを見てゐろ。」
親分は懐から篋のやうなものを出して、造作な
く塀を一枚割してしまひました。それを見た乾兒は
「成程、うまいもんですね。こゝから這入るんです
か。」

「さうだ。お前はそこに立つて番をしてゐろ。若し
人が來たら、俺に知らせてくれ、いゝか。それから
俺が金目のものを盗み出して來るから、そこにゐて
旨く受け取つてくれ。」

「へエ、よろしうございます。それぢやア行つて入
らつしやいまし。」

「静かにしてゐろよ。」

親分はかう云ひつけて置いて、塀の中へ這入つて
行きました。すると、まだ二足か三足しか行かない
うちに

「親分、親分。」

「なんだ？」

「來ました、來ました。」

「何が來た？」

「向うから按摩が來ました。」

「按摩なんか來たつて構ふもんか。目が見えないん
だから、お前さへ静かにしてゐれば分りはしない。」

「あ、さうですか、按摩はいゝんですか。それを聞
いて置かなかつたので、いゝ心配をしました。今度
は按摩が來ても知らせませんよ。さあ、改めて行つ
て入らつしやい。」

で、また親分が中へ這入ると、

「親分、いけません。」

「なんだ？」

「犬が來ました。」

「馬鹿、犬なんぞ吠えなきやアいゝや。黙つてゐろ。」

「へえ、犬もいゝんですか。」

「いゝんだとも。それよりも大きな聲をするな。」

「やあ、親分は臺所
へ這入つて行つたぞ。
臺所などには何も取
るものはあるまい
になあ。しか
し、こゝの家
は寢坊だ
な。盗



坊の這入つたのも知らずに寝てゐる。今に何か取られるんだ。思へば、氣の毒だな。」

そんな一人言を云つてゐるところへ、

「ああ、受け取つてくれ。」

「おや、もう取つて來たんですか。なんですね。」

「いゝか、重いぞ。」

「ドッコイショと。これは重いぞ。親分お釜ですね。」

「……………」

「今度は茶釜ですか。こりやみんな臺所道具だ。まだありますか。」

「オット、土瓶に鐵瓶。」

片方が素人ですから、受け取る時は一々聲を立てます。ところが、この家の主人といふのが、もう年寄で、鼠ガガタリとしても目がさめます。忽ち氣がついて起き出して様子を窺ふと、外に立つてゐる方が、
「今度はバケツと……。どうもかういふ風にどしど

いか。」

「空巢狙ひと云ひますと？」

「明いてゐる處を狙つて這入るんだ。」

「それぢやア空家へ這入るんですね。そんなら私にも出來ます。」

「馬鹿だな。空家へ這入つたつて何も盗む物がないぢやないか。人の住まつてゐる家で留守のことが幾らもあるだらう。そこへ這入るんだ。」

「しかし、それが分りませうか。」

「分らないから、一々聞いて歩くんだ。」

「ぢやア、こちら様はお留守ですかと聞いて歩くんですか。」

「馬鹿なことを云ふな。まづかうするんだ。どこでもいゝから露路へ這入つて行つて、留守だと思ふ家があつたら「御免下さい」と云ふんだ。」

「成程。」

「その時、はい、お出でなさい」とか、「どなた？」

し取れると盜坊といふ商賣は面白いな。」と大きな聲で物を云つてゐるのが聞えました。主人は

「こいつ素人だな。よし、一つ嚇してやらう。」と考へて禿頭に鉢巻をすると、長押にあつた槍を取つて、庭へヒラリと飛びおり、忍足をして塀の破れてゐる處まで來て、いきなり頭をニユツと出すと、

「親分、今度は藥罐ですか。」

觸つて見て

「わツ親分、大變だ。逃げろ、逃げろ。」と、折角盜んだものをそこへ抛り出したまゝ、どん／＼とどん／＼逃げ出しました。

第一課

いゝ鹽梅に、二人とも捕まらずに逃げて來ることが出來ましたが、

「あゝ、驚いた驚いた。お前のやうな馬鹿にはとても盜坊は出來まい。どうだ、空巢狙ひをやつて見な

とか答があれば、人がゐるんだ。」

「成程。」

「むたら仕様がな。歸るのに困るから、無さうな名前を聞いて見ろ。さうさなア、まづ世の中に提灯屋のブラ右衛門なんといふ名前はなからう。この裏に提灯屋のブラ右衛門さんといふ方は入らつしやいませんか」と聞くんた。」

「成程。」

「さふいふ人はありませんと云つたら、また外の露路へ這入るんだ。度々やつてゐるうちに、留守の家に逢ふ。その代り、手早く仕事をやらないと、捕まるぞ。お湯に行つてゐるとか、ちよつと買物に出

たとかいふその留守の間にやるんだから……」
「成程、それなら私にも出來さうです。商賣々々で旨いことを考へるもんですね。ぢやあ親分、早速行つてまいります。」

「さうか。ぢやあ、せい／＼旨くやつて來い。」

親分の家をとび出すと、一生懸命に露路を探して、とうとう軒の家の前に立ちました。

「少々伺ひます。」

「はい、どなた？」

「おや、人がゐらア。」

「いえ、その、この裏に……。」

「この裏に、その、提灯屋ですがな……。」

「提灯屋がどうしました。」

「ナニ、その、提灯屋のブラ右衛門といふ人がありますまいか。」

「提灯屋のブラ右衛門？ ハテネ、そんな人は聞いたことがありませんね。」

「さうでございますか。左様なら、いけないく、どうしても人がゐらア。物騒だといふのでなかく留守にしないや。——え、少々伺ひます。」

「なんですか。」

「おや、またゐらア。エー、提灯屋のブラ右衛門さんといふ人がこの裏にをりますまいか。」

「提灯屋のブラ右衛門？ そんな人はゐませんよ。」

向う裏ぢやありませんか。」

「さうでございますか。左様なら、ゐられて溜るものか。わざ／＼無名を聞いてゐるんだ。——お頼み申します。——御免下さい。をりませんか。締めたぞ。少々伺ひます。（小さな聲で）御免下さい。」

そオツと格子へ手をかけたときに、

「誰だ。」

「あ、臆を潰した。へえ、少々伺ひたいので……。」

「なんだ？——」

「この裏がどうしたんだ。」

「チヨ、チヨ、提灯屋の、ブ、ブ、ブラ右衛門さんといふ人は、ア、ア、ありませんか。」

「提灯屋のブラ右衛門は俺だよ。」

「エツ。左様なら。——あ、驚いた。留守の家には出くはさないで、提灯屋のブラ右衛門に出くはしてしまつた。悪い時には仕方のないものだ。今度は名前を取り替へて見よう。——え、御免下さい。」

「はい、お出でなさい。」

「左様なら。名前を聞くまでもない。すぐに逃げ出す方が早い。この裏はどうだらう。御免下さい。」

「はい、入らつしやい。」

「左様なら。——御免下さい。——どなた？」

「左様なら、——かうして根氣よくやつてゐるうちには、いつか留守の處へ出くはずだらう。——おやおや、ひどく穢い露路へ這入つて来たぞ。——御免下さい。お頼み申します。どなたもゐませんか。ゐなければ明けますよ。私は盗坊ですよ。もし、お留守ですか。ちやア明けますよ。」

かう云ひながら戸に手をかけると、難なくガラガラと明いたので、大喜びで中へ這入つて、

「まづ一安心だ。とう／＼留守の家に出くはしたぞ。なんでも盗坊は度胸が据つてゐなければいけない。若し追つかけて逃げる時に、お腹が減つてゐては駆けられない。一つ御飯を御馳走になつてやらう。」

——こゝにお鉢がある。——おや、御飯が一粒もない。——選りに選つて貧乏な家に這入つたものだ。——しかし、折角這入つたのだから、何か盗んで行きたいな。——が、何も盗むやうなものはない。まづ／＼してゐるうちに、ガラツと戸が明いて、此家の主が歸つて来ました。ところが、此家は一方しか口が明いてゐないので、盗坊先生逃げる事が出来なくなつてしまひました。で、咄嗟の智慧で、

「入らつしやい。何か御用ですか。」と空トボけると主はめんくらつて

「これは失禮。一軒家を間違へました。」

そゝつかしいぢやありませんか。間違もしないのに、自分の家を盗坊に明け渡して出て行きました。

その際に、盗坊先生スタコラこゝを逃げ出しました。

この盗坊の通信簿を見たら、『落第』と書いてありましたとさ。（をばり）



虎になつた學者

安成 二郎

一
關西といふところに李徴といふ人があつた。子供の時分からさまざまの本を讀み、文章も上手に書き、大きくなつて立派な役人になりましたが、自分はいらい學者だと思ふ心があるので、とかく仲間の人達を見下したりして皆んなに嫌はれました。
大勢の會合などに出てお酒に酔ふと、きつと、
「僕は一段も二段も君達より上の人間だ。君達なん

か僕の足許にも及ぶもんか」などと言つて威張りました。
到頭間も無く、李徴は役人をやめて村に歸りましたが、一年ばかりもすると、元々あまり金持では無かつたから、衣食にも困るやうになりました。そこで今度は吳の國に出かけて、ある縣の知事に頼んでまた役人になりました。すると其の縣の人達は、李徴がいらい學者だといふ評判を聞いてゐたので、盛

んな歓迎會を開き、澤山の贈り物をしました。さうして一年たらず其處にゐる間に李徴は可なりのお金が出来ましたので、一度故郷に歸らうと思つて、一人の下僕を連れて旅路に上つたが、その途中、汝墳といふところの宿屋で俄かに發狂して、夜中にどことなく出て行つてしまひました。下僕は大變おどろいて李徴の行方を探しましたが、一と月経つてもまるで分らないので、下僕はたうとう李徴の馬に乗り、お金や荷物を持つて逃げてしまひました。

二

その翌る年のことです。陳郡の人で袁修といふ朝廷の大臣が、天子の詔を奉じて嶺南に行き、途中に南於といふ町に泊りました。そして翌朝、袁修が早く出發しようとする時町役人がこれをとめて、
「この道には虎が出て人を食ひます。この道を旅する人は皆な晝になつてから行きます。こんなに朝早くお出かけになるのは危険千萬ですから、もつと日

が高く昇つてからお立ちになるのが宜しうございませ」と注意しました。
すると、袁修は怒つて、
「私は天子のお使ひで、供の者が澤山ついてゐる。獸類などが害をするものか」
さう言つて、到頭出かけましたが、僅か十町も行かないうちに、果して一匹の虎が草の中から躍り出したのを見て、袁修も供廻りの者も聲も出ない程びつくりしました。
ところが、一旦出た虎は直ぐ又た草の中に隠れて、
「あゝ、危なく昔の友達に傷をつけるところであつた」と人聲で物を言ひました。
その聲を聞いて、袁修はどんなに驚いたでせう。確かにそれは李徴の聲でした。袁修と李徴は昔若い時に一緒に役人の試験に及第して、非常に仲好しの友達でしたが、もう長いこと逢はずにゐたのです。そして今、この山の中で虎が李徴の聲を言ふの

を聞いて、何とも不思議な気がしましたが、たうとう思ひ切つて問ひかけました。

「君は誰れですか。ことによつたら、隴西の李徴君ではありませんか。」

さういふと、虎は悲しげな聲で二三度叫びましたが、やがて、

「さうです、私は李徴です」と言ひました。

そこで、袁修は馬から下りて、虎の隠れてゐる草原の方に向きながら、

「ほんとに李徴君だつたのか、どうして斯ういふことになつたのです。君と私とは十年も一緒に机を並べて勉強した親友の仲でしたが、その後お互ひに役人になつてから別れ／＼になつて、私はいつも君を忘れたことは無いのです。幸ひに今、天子の使ひで此處を通つて君に會ふことが出来ましたが、君は何故草の中に隠れてしまつたのですか。昔の友達に遠慮はいらないぢやありませんか。」



と袁修は訊ねました。

三

虎は嘆息して話し出しました。

「私は前年まで呉の國に役人をしてゐたのですが、

二四

虎はそれを聞いても、やはり草の中から出ずに言ひました

「私は今は獸なのです。もし私を見たら君はきつと私を怖れて惡むでせう。昔のことを思はないのでは無いけれど、君に惡まれるのが、辛いのです。たゞ、私はこのまゝで、暫く君と話をしたいことがあるのですが、少しここにゐてくれることが出来ますか」

「私は君を兄と思つてゐるので。どうして話もせず別れることが出来ませう」

袁修がさう言ひますと、虎はさも安堵したやうに靜かに話し出しました。

「君と別れて久しくなるが、君が大變立身をされたのは何れ嬉しい。さつき君は天子の使ひだと言はれたが、定めし大臣になられたのでせう」

「さうです、幸ひに近頃大臣になつて、今は嶺南に行く途中です。それにしても、君はどうして斯ういふことになつたのです。詳しく話して呉れませんか」

故郷へ歸る途中、汝憤の宿屋で病氣に罹つて發狂しました。夜中に誰か外から私の名を呼ぶので、その聲に引かれて出て、山や谷の間を走り、覺えず左右の手で地を攫んで歩きました。その後、心が次第に猛くなり、力も強くなつたやうに感じて、肱や脾を見ると毛が生へてゐるので、不思議なこともあるものだと思つて、溪水に自分の影を映して見ると、もう私は虎になつてゐたのです。私はどんなに泣き悲しんだか知れませんが、それでも私は生きた物を取つて食ふのは忍びなかつたのですが、餘り飢えてはそれも我慢し切れず、遂ひに山中の鹿や兎を取つて食ひ始めたのです。するとやがて、さういふ獸は私を恐れて遠く逃げてしまつて、私は食ひ物が無く非常に飢えてゐると、ある日一人の婦人が山を通りました。どんなに飢えても人を食ふことはしたくないと思つたのですが、烈しく飢えてゐたので、我を忘れてその婦人を食つたところ、獸よりもすつと

二五



美味かつたので、それ以来、この山の獸や鳥は元より、通りかゝる人を容赦なく取つて食ひました。故郷に残してある妻や子供のことを思はないわけではないが、こんな獸になつては故郷にも歸れません。形が變つて心の覺めてるだけに、苦しみに堪えないのです。近頃この山を通る人が無く、久しく飢えてゐたので、君を驚かし何とも愧ぢ入るわけです」
 袁慘は話を聞いて氣の毒で堪らず、殊に今飢えてゐると言はれて、
 「それでは、私に餘計な馬が一头あるから、君の食べ物に贈ることにしませう」と言ひました。
 「それはいけません」と虎は草の中から答へました。
 「友達のを食ふのは、友達を傷つけるやうなものですから」
 「では、荷物の中に羊の肉がありますから、それをも上げることにしませう」と袁慘が言ひました。
 「有りがたう。それは頂きませう。然し今君の前で

二六
 食べるのは厭やだから、話が終つて別れる時置いて行つて下さい」と虎は言つて、それから言葉を変へて言ひました。
 「袁慘君、私は一つ昔馴染の君にお願ひしたいことがあるのですが、承知して貰へるでせうか、どうでせう」
 虎は思ひ入つた容子で袁慘に言ひました。
 四
 袁慘は、ここで別れたら、もう二度と虎の李敵に會ふこともあるまい、どんなことか、頼みを聞届けやらうと考へて、
 「私に出来ることなら何でもしませう。どんなことか打明けてお話をなさい」と真心から言ひました。
 虎は大變喜んで、
 「初め私が、發狂して山に走ると、私の下僕が私の馬や荷物を皆持つて逃げたのです。それで、私の妻子は故郷にゐて、私が獸となつたことも知らずに私



さて時間が経つて、袁彦は虎に別れを告げました。「いつか又た人間に復る日が来るかも知れません。身體を大事にしておいでなさい。お頼みの方は必ず御心配に及びません」

「君に逢つて昔話もしましたし、妻子のこともお頼みしたので私はもう何も心残りがありません」と虎はいかにも安心したやうに言ひました。

「天子の使を長く引止めて申譯がありませんでした君も身を大事にしていよく榮えるやうに祈つてをります。それから、君は嶺南から歸る時には、この

の歸るのを待つてゐることでせうが、荷物も金も下僕が持つて行つたので、さぞ暮しにも困つてゐるだらうと思ひます。で、君にお頼みしたいのは、嶺南から歸つたら、私の故郷へ手紙をやつて、今日のことは言はずに、たと私が死んだと言つてやつて欲しいのです。それから、私の子供はまだ一人前になつてゐないので、昔の私と君の友情で、どうぞ子供を見てやつて貰ひたいのです。生活をも助けて、道路に飢え倒れることの無いようにして下されば、決して恩を忘れません」

さう言つて、虎は聲を出して泣きました。袁彦も涙を流して泣いて言ひました。

「君と私は兄弟の仲です。君の子供は私の子供も同じです。君の頼みは確かに承知しました。心配することはありません」

虎は泣きやめて、又た「もう一つお願があるのです。私は昔作つた文章が

数十篇あります。それも書いたものは無くなりませんが、世間には傳へる程のものでないにしても、子供には見せたいと思ひます。今、私がその昔作つた文章を読みますから、書きとめて頂きたいのです」

そこで、袁彦は供の者をよんで、虎が讀む文章を書き取らせましたが、數は二十篇ばかりで、何れも筋の立派な、氣品の高い文章で、袁彦は今更ら、李徽の才を惜みました。

それにしても、どうして李徽が虎になつたのか、どんなわけがあるのか、袁彦はいかにも不思議なことに思ひ、

「君の立派な文章は昔から私は感服してゐました。その君が今このやうになつたのは、何か君に思ひ當るわけがあるのですか」とききました。

虎はさう言はれて、暫らく黙つてゐましたが、「成る程、一つ思ひ當ることがあります。私が昔、

山を通らずに、別の道をとつて下さい。私は今日は心が覺めてゐるも、一旦又た狂へば、君を見別けることも出来ないから、君が此の山を通るとき噛み碎いて仕舞ふかも知れないのです。今、これから行つて、向うの小山に登つたら、こつちの方を振り向いて御覽なさい。私の姿が見えるでせう。別にそれは私の姿を君に見たいのではないのです。たゞ、君が私を見て、今度は此處を通らないやうにさせたいからなのです。それではお別れませう。ただどうぞ、私の友人や妻子に逢つても、今日のことを言はないで下さい」

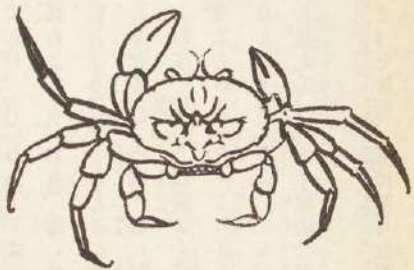
長々と別れの言葉を述べて、虎は頻りに別れを惜みました。袁慘が馬に乗つて歩き出すと、虎は堪らないやうに哭き悲しむのでした。袁慘も可哀さうな友達を思つて涙がとまりませんでした。一里程行つて、袁慘は小山の上から、振り返ると

一匹の大きな虎が林の中から躍り出して、山も谷も震ふやうな烈しい聲で咆哮しました。

一と月ばかりの後、別の道をとつて、袁慘は都に歸りました。

そしてすぐ、手紙を書いて、李徴が死んだことを李徴の故郷にゐる子供へ知らせてやり、李徴の作つた文章も送つてやりました。すると、やがて李徴の子が袁慘を訪ねて来て、死んだ父の墓はどこにあるかと聞きましたので、袁慘は已むを得ず、詳しく山中で李徴に逢つた話をして歎き悲しむ子供を慰め、李徴の妻子を自分の俸給で養ひました。

この李徴の子は大きくなつて、立派な學者になりました。虎になつた李徴は、その後どうなつたか、誰れにも分りませんでした(をばり)



耳無し法市

三宅房子

下の關の海岸には平家蟹といふ不思議な蟹がゐます。この蟹の甲には奇妙な凸凹ができてゐて、それが不思議にも歪んだ人間の顔に似てゐます。綺麗に乾して磨いた二種の大小の蟹は、何時でも下の關の店に賣つてゐますが、この蟹は皆壇の浦で獲れたものです。さて、この奇妙な恰好の蟹を平家蟹といふ譯は、

壇の浦で溺れて死んだ平家の侍達の魂が、蟹に化けたのだと昔からいひ傳へられてゐるためです。そして死ぬ時の無念と苦しみの形相が、蟹の甲の面に現はれてゐるのだといはれてゐます。平家蟹の中でも、小さい方のはただ平家蟹と呼ばれてゐて、この方には平家方の普通の侍の魂が入つてゐるのだといはれ、大きな方のは大將蟹といつて、この蟹には平家の大將達の魂が入つてゐるのだといはれてゐます。

また、この海岸ではその外、ろ／＼の不思議な事が起ります。暗い夜には靈火が、幾干となく現はれて、海邊を徘徊いたり、波の上を飛んだりします。漁夫達はこの青白い光を「鬼火」といつてゐます。そして風が強く吹く晩など、沖の方から恰度戦争でもしてゐるやうな八釜しい聲が聞えて来るさうです。

昔は、この平家の亡者が今程おとなしくしてゐませんでした。夜になると、幽霊が船の邊に現はれて船を沈めようとしたり、海に泳ぐ者があると、海へ曳きすり込まうとしました。そこで平家の靈を慰めるために、赤間ヶ關に阿彌陀寺といふお寺が建てられて、溺れた幼帝とその御家來達のために墓石も建てられました。これから後は幽霊の出ることが少なくなりましたが、でも、まだ魂が安まり切れぬと見えて、時々不思議な事が起りました。

さて、その頃、赤間關に琵琶の名人として知られ

或る夏の夜、住職は檀家に死人が出來たので、小僧を連れ、寺には法市一人を残して出かけました。その晩は蒸暑い晩でしたから、盲者の法市は、お寺の庭に向つた縁先に出て涼みながら、住職の歸りを待つてゐましたが、あまり退屈したので琵琶を弾きはじめたのです。

夜半過ぎになりました。でも、住職は歸つて來ませんでした。併し、暑くてなか／＼眠れさうでありませんでしたから、法市は縁先に坐つてゐました。と、俄かに裏門の方から人の入つて來る足音を聞きました。その足音は庭を通つて、縁先にゐる法市の前で止まりました。しかし、それは住職ではありませんでした。と、不意に太い聲で、恰度侍が目下の者と呼ぶやうな横柄な調子で、

「法市！」と呼びました。

法市は驚きの餘り黙つてゐました。するとその聲

てゐる法市といふ盲者が住んでゐました。法市は極く小さい時分から琵琶を弾くことと、琵琶歌を歌ふことを教へ込まれましたが、子供の時に、もう師匠よりもうまいといはれた程でした。法市は大きくなつて琵琶法師となりましたが、法市がそんなにも有名になつたのは、重に源氏平家の戦ひを上手に詠つたためでした。法市が壇の浦の合戦を詠ふ時には、鬼神も泣くといはれました。

法市は大層貧乏でしたが、歌や音楽が好きでしたので、阿彌陀寺の住職が法市をひいきにしてくれました。阿彌陀寺の住職は、法市の不思議な程旨い琵琶に大層心を動かされて、法市に是非自分の寺へ來て住まないかと申しました。法市は住職の親切な言葉をありがたく思つて、阿彌陀寺へ來て住むことになりました。法市はお寺の一室を借りました。その代りそのお禮として、住職に時折琵琶を弾いて聞かせました。

は、命令するやうな調子でまた、

「法市！」と申しました。

「ハイ！ 私は盲者で御座いますが、お呼びになるのは何様ですか。」と今度は法市が答へました。

するとその聲は少し優しくなつて、「恐れるには及ばぬ。私はこの寺の近くに滞在してゐる者だが、お前に言傳があつて來たのだ。尊い御位にある我君が、只今大勢の家來と一しよに赤間關に御滞在になつてゐるのだ。わが君は壇の浦の合戦の跡を葬ひにお出になられたのだが、其方がなかなか上手に壇の浦の合戦を詠ふ由聞き及ばれ、是非其方の琵琶を聞きたいとの思召だ。さ、直ぐに琵琶を持つて私と一しよに來るがよい。其方をわが君の御前へ連れて行つてやるから」と、いひました。

この時分には、武士の命令には背くことが出來ませんでしたから、法市は琵琶を持って、その案内人の侍に従いて行きました。法市はひどく早く歩か

せられました。自分を引つ張つて行く武士の手は、
鐵のやうに冷くありました。案内人が歩くことに具
足がガチャ／＼と鳴りましたから、法市はこれは鐵
兜の侍で、多分どつかの御殿の番をする侍だら
うと考へました。

初め吃驚した法市も今はすっかり落ちついてしま
つて、これはいゝ運が向いて來たのだと考へ出しま
した。法市は自分の琵琶を聴きたいといふその尊い
方といふのは、偉い大名に違ひないと思ひました。
すると間もなく、案内の侍は大きな門の前で立
ち止まりましたが、法市にはこれが不思議でなりま
せんでした。といふのは、法市にはこの邊にこんな
大きな門構があることを覺えなかつたからです。

「開門！」
と侍が呼びました。
すると、門を外す音や、大門がギイ／＼と開く音が
聞えました。二人は門から中に入つて、大きな庭を

通つて、今度は家の入口に立ち止まりました。すると
侍はまた大聲で叫びました。

「皆さん、法市を連れて参りました。」
すると急がしさうに歩く足音や、襖を開ける音や、
女達が話し合つてゐる聲が聞えました。女達の使
つてゐる言葉で法市はその女達は御殿の召使だと分
りました。併し、法市は自分が何所へ連れて來られ
たのか、少しも見當がつきませんでした。が、かれこ
れ考へてゐる暇もなく、法市は一人の女に助けられ
て幾段もある石段を登つて、何度も／＼角をまがつ
て大層長い廊下を通り、それからお座敷をいくつと
なく通り過ぎて、たうとう大廣間の真中に連れて來
られました。盲者の法市にも大廣間には澤山の人が
集つてゐることが直ぐに分りました。

といふのは、絹のすれ合ふ音が森の中の木の葉のや
うに聞えましたし、御殿で使ふ言葉で極く低い聲で
したが、話し合つてゐる澤山の人聲が聞えたからで

す。
法市は早速琵琶を弾くやうにいひつけられました。
から、琵琶を取り上げて調子を合はせると、老女

と申しました。
しかし、平家が起つてから遂に亡びるまでの物語



らしい聲で、
「琵琶に合はせて平家物語を語れとの御意で御座い

を語るには、幾晩もかゝる譯ですから、法市は、哀
れの深い壇の浦の合戦の場を語りました。權を潰ぐ

音、船が海を進んで行く音、矢の高鳴る響、人の叫び、走る足音、兜に斬り込む刀の音、斬られて海の中に落ちる水音——これらの音が琵琶の糸につれ鮮かに響きました。

法市は琵琶の音の合間々に、自分を褒める言葉を聞きました。

「實に偉い！」

「全く天下第一品だ！」

「法市程の琵琶法師はまたとあるまい。」

法市は今夜ほど自分の藝をよく分つてくれる聴者の前で今まで琵琶を弾いたことがありませんでしたから、いよゝ調子に乗つて、今までになかったほど旨く語りました。大廣間は水を打つたやうにシーンと静まりました。併し、物語がか弱い姫君達の不運な最後や、女や子供の哀れな死様、二位の尼が幻帝を抱いて海に飛び込む悲しい末路のところに来ますと、聴者は一時に何ともいへない物凄い聲で叫び出

しました。一同は長い間大聲で泣いたり喚いたりしてゐるので、法市の方では自分の藝がこれ程までに人の心を動かしたかと思ふと、反つて氣味悪く思つた程でありました。併し、その悲しい聲らだん／＼と消えて行き、大廣間はまた死んだやうに静かになりました。

すると先きの老女の聲で法市に向つて、

「私共はかねてから貴方の琵琶の上手なこと、その歌の並びないことも噂で聞いてゐましたが、これ程までにお上手だとは夢にも思ひませんでした。御前様も大層お喜びになつて、あなたに御褒美を遣はせとの御意でございます。併し、御前様は引き續いて六晩の間、貴方の琵琶を聴きたいとの御所望で御座います。ですから、明晩も今晩と同じ時に此所にお出で下さい。今晚案内したあの侍が、またお迎ひに出ますから。併し、貴方に申して置かねばならぬことがたつた一つあります。御前様がお忍びの旅でこ

の赤間關にお留まりになつてゐる間、貴方は決して——此所へ來ることを誰にも話してはなりません。さ、これでもう貴方は御寺へお歸りなつてよろしいのです。」

と申しました。

法市がお禮の言葉を述べると、一人の女が入口まで法市を連れて行きました。そこには先きの侍が待つてゐました。侍は法市を先きの御寺の縁先まで連れて行つて、そこで別れを告げて歸つて行きました。

法市が御寺へ歸つたのはもう夜明け方でしたが、誰も法市が寺から出て行つたことを知りませんでした。その夜遅く歸つた住職も、もう法市は眠つたのだらうと思つてゐました。法市も無論、この晩の不思議な出來事を、誰にも話しませんでした。

次の夜も、前の晩と同じ時刻に、同じ侍がやつて來て、法市を例の大廣間に案内しました。法市の琵琶

はまた成功しましたが、併し、今度は法市が夜遅く寺を脱げ出した事が、寺に知れてしまひました。法市がその朝寺に歸つて來ると、住職は優しい言葉ではあります、嚴しい調子で、

「法市、私達は大層心配してゐたのだが、眼の悪いのに夜中にたつた一人で出かけるのは危いよ。何故、黙つて出かけたのかね？それならそれといへば供でも附けてやるのに。一體何所へ行つて來たのだね。」と申しました。

すると法市は、

「和尚様、どうかお赦下さい。私は少し秘密の用がありまして出て行つたのですが、その用といふのは夜でなければいけないかつたので御座います。」といひ抜けして後は黙つてゐました。

住職は何時になく法市が黙つてゐるので、變に思つて、法市は狐にでも化かされたのか、或は何か魔物にでもつかれたのではなからうかと心配しまし

た。そこで住職はこの上法市に何も訊ねませんでした。だが、こつそり寺男を呼んで、「法市の様子によく氣をつけてくれ。そしてもし法

と、申しました。

三晩ばかり経つてから法市は、寺を出るところを見つげられました。寺男達は提灯をつけて、法市の



市が夜になって寺を出たら、その後を蹤けて行つてくれ。」

後を追ひました。その夜は雨の降る暗い晩でしたが寺男達が街道に出た時には、もう法市の姿は見えま

せんでした。法市はひどく足早に歩いたらしいので、併し、盲者がこの悪い道をそんなに早く歩くとはいかにも不思議です。そこで寺男達は町を廻つて、法市が平常出入する家を彼所此所と訊ね歩きましました。併し、法市の姿は何所にも見つかりませんでした。たうとう寺男達は海岸に沿うてお寺の方へ歸つて來ましたが、驚いたことには、阿彌陀寺の墓場から琵琶の音が聞えて來たのです。あたりは眞暗でありましたけれども寺男達は墓場の方へ急ぎました。ところが、寺男達は提灯の光で、雨の降る中に、安徳天皇の墓所の前で、法市がきちんと坐つて、琵琶を激しく掻き鳴らしながら、大聲で『壇の浦』を謡つてゐるのを見つめました。

「法市さん！ 法市さん！ 貴方は魅かされたのですよ。魔物につかれたのですよ。法市さん！」と、寺男達は呶鳴りました。併し、法市は耳にもかけず、益々強く琵琶を弾き鳴らして、いよ／＼激しく歌を謡ひました。で、たうとう寺男達は、法市を掴まへて耳に口を當て、「法市さん！ 私達と一しよにお出で！」と、叫びました。すると、法市はキツとなつて、「何をする！ お前さん達は、この尊い方々の前で私の邪魔をするのか。」と、叱りつけました。これを聞いた寺男達は、氣味が悪いながらも、思はず聲を立て、笑ひました。寺男達は法市がいよいよ魅かされたのだと分ると、無理やりに法市を引つ張つてお寺に歸つて來ました。寺に戻つて來ると、住職は何も彼も残らずこの不思議な出來事の譯を話

すやうにと法市に申しました。

しかし、法市は最初なかく話しませんでした。併し、自分のやつた事が、人の善い住職を驚かせて、ひどく心配をさせたのだとわかつて、遂に、侍が来た時からの出来事を残らず話しました。

すると、住職は、

『法市、お前さんは災難に罹つてゐるぞ。お前さんは何故もつと早くこの事を私に話さなかつたかね？ つまりお前さんは我が身の上な醫で禍害を招いたのだ。お前さんの行つたといふその大廣間といふのは、家でも何でもなく、平家の墓場だつたのぢや。男達はお前さんが今夜、安徳天皇の御墓で雨の中に坐つてゐるのを連れて來たのぢや。お前さんの見には皆な幻なのだ。死人がお前さんを招いたことだけは確かだ。一度そのいひつけに従つたお前さんは、もう亡者の手の中に入つてゐるのだから、この次ぎ亡者のいふことを聞くと、お前さんは生きてゐ

り、音を立てたりすると身體を八ツ裂きにされますぞ。だが、恐れてはならない。聲を立て、助けを呼んでも役に立たないのぢや。この私の命令をよく守れば、災難から脱れることが出来る。すれば、もうお前さんは恐がることなくなるのぢや。』
といひました。

暗くなつて住職と小僧が出て行くと、法市は住職のいひつけ通り縁先に坐りました。法市は傍に琵琶を置き、座禪の形に靜かに坐り、咳もせず、大きな息を吐かず、ちつとしてゐました。法市はかうして長い間、坐つてゐました。

すると、街道の方から足音が聞えて來たと思ふ間もなく、その足音が門を通り、庭を越え縁先に近づきました。

『法市！』

と、その聲が呼びました。

併し、法市は息を殺して、ちつとしてゐました。

られないぞ。その身體がすたく／＼に引き裂かれるぞ。お前さんはお終ひに生命を取られるところだつた。が、私はあすの晩は、お前さんと一しよに居ることが出来ない。私は、法事に行かにやならんのだが、行く前に、私はお經の文字をお前さんの身體に書いて、災難から通れるやうにして上げよう。』
と、住職が親切にいひました。

翌日は、日の暮れない中に、住職と小僧が二人がかりで法市を裸體にし、筆でもつて法市の顔、頭、頸、胸、背中、手、腕、脛、足、足の裏まで、身體中一面にとろ雑はす般若經の文句を書きました。

これが濟むと住職は法市に向つて、
『今夜、私が外へ出たら、お前さんは縁先で坐つて待つてゐなさい。名を呼ばれても黙つて答へもせず、何んな事があつても動いてはいけない。座禪をしてゐるやうに黙つて坐つてゐるのぢや。身動きをした

『法市！』
とまたその聲が怒つて申しました。

『法市！』
と、三度目に呼んだその聲は、荒々しく響きました。

法市は木像のやうに黙つてゐました。

『答へがない！ これはいけぬ！ 一體、法市は何所にゐるのだらうか？』

かうその聲がいつたかと思ふと、縁側に上る重い足音が聞え、次にその足がそろ／＼と此方に近づいて來て法市の側に立ち止まりました。この間、法市は心臟をどき／＼させながら死んだやうに黙つてゐました。

と、その氣味の悪い聲が法市の耳の側で吹きま

『はて！ こゝに琵琶はあるが、琵琶法師の耳だけしか見えない。口がないのだから答へをしなかつた

のも道理だ。残つてゐるのは法市の耳だけなのだから、せめてこの耳だけでも持つて歸つて、お命令を守つた證據にしよう。」

この言葉が終ると、法市の耳が鐵の指で掴まれたかと思ふと、やがて二ツの耳はもぎ取られてしまひました。痛さは堪へられない程でしたが、でも法市は、我慢してちつと黙つてゐました。するとその重い足音は、縁側を歩いて次第に遠くなり庭へ下りて街道の方へと消えて行きました。併し、法市は動かさずに坐つてゐました。法市は頭の兩方から血がだら／＼と流れるのを覺えましたが、手を舉げずにちつとしてゐました。

住職は歸ると急いで縁先へ行きました。と、何か知らねば／＼する物を足で踏みましたので、吃驚して思はず聲をたてましたが、よく見ると、それは血でした。住職は、法市が傷口から血を流しながらも、座禪

してゐる姿を見ました。

「法市！ どうしたといふのだ？ 怪我をしたな？」
驚いて住職が叫ぶと、法市はやつと安心して、泣きながらその晩の様子を話しました。

すると住職は、
「法市！ かうなつたのは私の罪だつた。お經の文句をお前の身體中に書いたつもりだつたが、耳だけ除かしたのちや。私は小僧にいひつけて耳にも書かせた積りだつたが——小僧が忘れたのだ！ 全く濟まないことをしてしまつた。併し、もう今となつては仕方がない。早く手當てをして傷を癒すことにしよう。氣を確かに持つてくれ、生命があればまた面白いこともある。もう災難は行つてしまつた。幽霊がお前さんを苦しめることはもうないから、安心したがいゝ。」
といつて法市を慰めました。

その後、法市の耳の傷は良い醫者にかゝつて、間もなく癒りました。

た。そして、そのために遠い所からも位の高い人々が赤間關へ来て、法市の琵琶を聴やうになりました。



しかし、法市が出逢つたこの不思議な話が、遠方まで擴がつた爲めに、法市の名は益々有名になりました。

法市は「耳無し法市」といふ石で廣く世間に知れ互るやうになりました。

(をばり)



十五少年漂流物語

霜田史光

一、樹の皮に妙な文字

探検に向つた四人の少年は、天気もよいしまた食べ物も二分位ありますので、いふ場所を探さうと進んで行きました。東の方へ行くよりは、南の方がスロー號に少しも近づいたことなるので、その方の湖を探り歩きました。また徒紅があつたり、小舎があつたりしたことから考へて見て、ひよつとすると今でも人間が棲んでゐるかも知れないといふ望みは、少年達の心にあります。

四人が湖の岸邊に歩いてゆくのも、森の中と同じやうに樂ではありませんでした。四里も歩きましたけれども、煙も見えなければ人の足跡らしいものさへ見ませんでした。時時、森の中で大きな鳥が少年達を見て驚いて逃げてゆくばかりでした。

あひました。この川は湖から流れ出てゐるものです。恰度日も暮れて川を渉るのは危いかと云ふので、四人は川のほとりに露營することにしました。

た所なかう名付けました(の上に、屏風のやうに立つてゐる岩壁の續きではないかと思ひました。キルコクスはその時驚きの叫び聲をあげました。

「や、や、あれを見給へ。」
三人はキルコクスの指す方を見ると、舟をつける爲め積み上げた石が、今は半分以上も崩れてゐますが、でもそのあととよくわかります。

「この邊に人が住んでゐたと云ふことは間違ひないね。」とアリアンが云へば、
「まつたくだ。」とドノバンも元氣づいて云ひました。

舟着き場のそばの草原には、いろんな木片が落ちてゐました。それは船の破れたものだと思ふことはすぐわかります。それに木片の一つには鐵の環がついてゐました。少年達はそれ等を見て、この舟着き場をこしらへた人が、今にも眼の前に出て來ばしなないかと思ふ位でした。

四人はあたりを見廻りながら黙つて立つてゐましたが、四方はごく静かで、人どころか物音一つしないで、小川の水がたゞゆるやかに

に流れてゐるばかりでした。舟がこゝに流れてから、もうよほどの年月がたつたものと見えて、木片には音が生えてゐるし、鐵の環には赤錆がついてゐました。昔この舟に乗つ



て來た人も、自分達と同じやうに流れついたものでせうか。そして今何處にあるのでせう。それよりもその人は生きてゐるか、死んでしまつたか、そして何處の國の人だらうか――

それらの事は少年達が知りたと思つたことでした。

F B 1807

その時、犬のフアンは地べたへ鼻をすりつけては、しきりに何か臭ひを嗅いでゐましたが、やがて頭を上げて一寸あたりを見廻して

の六字が書いてありました。ほて、何んと云ふ人の名の略字なんだらうと少年達が不思議さうに見てゐる時、フアンは岩壁の右の方を廻つてまた駈け出しました。

つたからです。とも角も行って見ようと思ふ事になつて、四人は勇氣を出してフハンの吠える方に行つて見ました。その途中ドノバンは一つの銅を拾ひ上げました。それはもうひどく錆つて居るもので、アメリカかヨーロッパ人の作つたものらしく思はれます。そして畑を作つた跡らしい溝も出来てゐて、其處には今も荷草が所々に繁つてゐました。

前の方でフハンはまた哀しうに叫びました。そして急に四人の前に駆け戻つて来て、その顔を見て何か云ひたげでありました。そしてまた自分が先に立つて駈けて行つたり戻つたりして、まるで後へ隨いて来いと云はぬばかりです。

フハンは岩壁の所で止まりました。少年達はそこを割裂や雜草を分けてその中を覗いて見ますと、岩壁の面にふつと現はれたのは、洞の口と思はれるものです。アリアンは用心にも枯草に火をつけて洞の中へ差し込んで見ましたが、少しも消えませんでした。「これなら煙氣も悪くない。はひつて見よう」

と云つて、また松の皮で松明を作つてそれに火をつけてそれを前に差し出したが、アリアンは先に四人はさる／＼と中にはひつて行きました。

二、山毛櫛の下に白骨

洞の入口は高さが五尺ばかりに幅が二尺ばかりのもので、中へはひると、すつと廣くなつて、十六疊敷位の大きになつてゐます。地の上には、一面に綺麗な砂を敷いてあつてまるで毛絨を踏むやうな氣持です。右手の方に粗末なテールがあるらしく、その上には土で作つた木差しと、水を飲む爲めらしい器具が幾つか、それに少し折れたオノフが青錆でゐます。また釣りの道具や錫のヨツバ盛きはにはあら木製の匣があつて、その中には着物の切れ／＼になつたのが、少しばかりはひつてゐました。

洞の中に人が住んでゐたことは間違ひもないことですが、それはどんな人で、そしていつ頃住んでゐたのでせうか。尙も奥の方へ進んでゆきますと、もう破れてひどくなつた藁ぶとんがありました。その上には色のまない救ひを待つてゐるうちに、たうとうこんなことになつてしまつたのでせうか。そしてこゝにある道具は本船からこゝまでやつと持つて来たものでせうか。

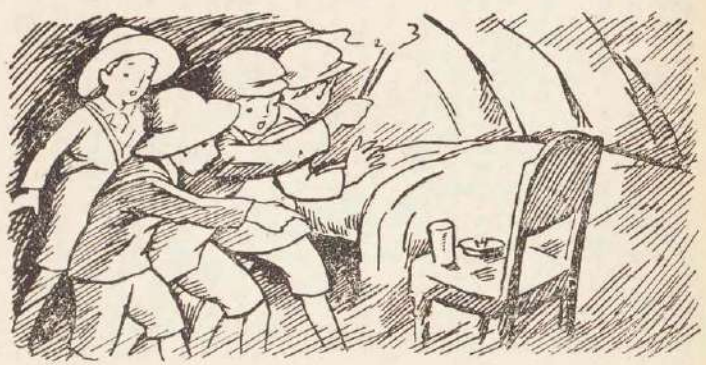
少年達はまた考へました。この地が大陸の曠きだしたら、何故この昔の人は内地の人のある方に逃げて行かなかつたのでせう。それとも餘り遠くでそれがむづかしいので、用意をしてゐる間に死んでしまつたのでせうか。この人が出来なかつたことを、自分達少年がどうして出来るのでせうか。矢ッ張りの地は大洋のたゞ中の無人島ぢやないのだから。四人はまた洞の中へはひりました。すると今度は別な所の一つの袋があるのを見つけて見ました。その袋の中には、獸の脂肪で作つた燭燭が五六本ありました。サービスがそれを燃燭を立てて立て、火を點けると、古くなつた燭燭はやつとの事燃え始めました。その光で洞中を捜す探しまつと、斧、鋤、料理の道具、繩、網などがありました。またすつと奥の方には、懐中ナイフ、磁石、湯わかし、鐵鍋、索つき針などがありました。この時キルコクスが、

「これは何んだらう。」と云つて三人の前へ出した物を見ますと、それは二つの丸い石を一つかりと索で括りあはせてあるもので、これは南アメリカの黒人達が走つてゐる歌に投げつけて十度のうち一處も失敗しないと云ふ投げ石であります。きつこの洞の人はこれを作つて歌なつたものでせう。

三、確かに佛蘭西人

キルコクスは、また壁にかけてあつた一つの懐中時計を見つけて見ました。それは銀とも白金の上のもの、普通水夫などが持つてゐるやうな安物ではありません。蓋は錆びついてゐて、なか／＼開かないのをやつとこら開けて見ますと、その時計は正に三時二十七分を指して止まつてゐます。「さうだ、この蓋の裏には時計を造つた人の名が書いてあるだらう。それを見れば何處の國の人だかわかるよ」とドノバンは氣がついて申しました。「ほんとだ。開けて見よう」とアリアンも云つて、裏を返して見ますと、

De Fleuch, Saint Malo.





十五少年の流れ着いた所はもう疑ふことも
 出来ない大洋の中の離れ島だったので。今
 は助け船の来るまで、例へそれがどんな永い
 間でも待つてゐなければなりませんので、十
 五少年は相談の末に、ホルドキンの住んで
 になつてしまひました。
 はて、困つたことになつた、と四人が途方
 に暮れてゐました時に、低い空に一筋の光が
 閃きのぼるのが見えました。
 「おや、あれはなんだろう」とササビヒスが叫
 びました。
 「多分流れ星だらうよ」とホルコグスが云ひ
 ました。その時プリアンは、
 「いや、狼火だよ。スロウ號からあがる狼火
 だよ」と云へば、ドノバンも、
 「さうだ、ホルドキン君が僕達に知らせる爲め
 にあつてゐるんだ」と嬉しうに云ひました
 そしてドノバンは合圖の鐵砲を一發ドンと打
 ち放して、眞先に駆け出しました。それに續
 いて三人も夢我夢中で林の中を駆けて、やつ
 との事スロウ號に歸り着くことが出来ました

四、佛人洞に移る

したつたものでせう。
 離れ島ときまつては、少年達もいつ来るか
 わかぬ助け船でも、どんな永い間にしろ待つ
 てゐなければなりませんので、スロウ號のや
 うな、風や浪に破れさうな危うな所にあつた
 このフランス人が住んだ洞に移るのが一番よ
 いことだと四人の心に決まりました。
 そこで、四人はホルドキンがその頭文字
 を刻みつけた山毛櫛の下にその白骨を埋めて
 洞の中には眠るぞが遣入らない様に寒いで置
 いて、川の流に沿つて下つてゆきました。と
 云ふのはホルドキンが作つた地圖によると
 この川はスロウ海に流れ込んでゐるからであ
 ります。
 四時頃になつて、大きな沼澤のある所に出
 ましたので、止むなく北西の方に廻つて雑木
 林の中を行きましたが、人の足の跡み入れた
 ことのない森の中は、樹や草が生え繁つてゐ
 る中々歩くのに苦しみました。六時になり七
 時になりましたと、空もどうやら暗くなつて森
 は益々深くなるばかりで、四人は一生懸命
 急ぎましたけれども、八時になつた頃はすつ
 かり暗くなつて、もう歩くことも出来ない位
 暗な洞に移り住むことに決りました。
 スロウ號は浪や風の爲めに、日に日に破れ
 場が多くなりなりましたので、もう一度大きな暴
 風雨が来れば木々葉微塵に碎けてしまふこと
 はわかりきつてゐます。今のうちに船の中の
 物を陸に上げてしまはないと、いつ暴風雨の
 爲めに持つて行かれるかも知れません。
 それにしても船の中の物を皆、あの佛人洞
 へ運ぶことは中々手数のかゝることで、一日
 や二日で出来る事ではありません。そこで、
 ホルドキンの考へつた方法によつて、十五少年
 はその翌日から川のほとりに假小屋を立て
 始めました。十五人の少年がそこに一先づ住
 む爲めと、それから船から持ち出す深山の荷
 物を入れて置く爲めとであります。そして少
 年達はやがて筏を組んで、その川をのぼつて
 行かうと云ふ考へです。
 十五人が力を合せてやりましたので、假小
 屋はぐきに出来上りました。山毛櫛と帆心と
 で屋根も壁も出来てしまひました。さう
 してから、少年達は毎日一生懸命になつて、
 船の中から種々な荷物や材木等まで持ち出し
 ました。そしてお終ひに、船腹に張つてある

と判んであります。
 「や、フランス人だ。僕と同じ國の人だ。」と
 プリアンは叫びました。
 この死んだ人がフランス人だと云ふことは
 ドノバンが毛布の下から見つけ出した手帳に
 よつても本當だと云ふことが確かめられました
 た。手帳の紙は長い年月がたつてゐますので、
 今は黄ばんで書いてある字も読めませんけれ
 ども、所々その間に「フランツァ、ホルド
 キン」と云ふ字のあるのは、多分この人の名
 らしく、樹の幹に刻んだあつた「F. B」の略
 字と思ひ當りますので、最早疑ふことが出来
 ませんでした。
 プリアンはまた手帳の中に「チエゲール・ト
 ルイン」の一語を読み出しましたが、これは
 多分ホルドキンが乗つて来た船の名でせう
 千八百七年と云へば、この人が上陸してから
 五十三年もたつてゐるのです。
 手帳の中には一枚の紙が巻んであつて、開
 けて見ると、それは一枚の地圖でした。これ
 はホルドキンが自分で書いたものらしく、
 それは此地の地圖らしく、少年達が探險して
 来た處も、スロウ海も、その上の岩盤も細か



に書いてありました。そしてその周囲を取り
 巻いてゐるのは海だつたのであります。
 あゝ、矢ッ張り、こゝは大洋の中の離れ島
 でした。プリアンが始め思つた通り、十五人

鋼板まで丁寧に削ぎ取りました。何しろ少年達の仕事としては、この百噸もある船の鋼板を削ぎ取るのは中々骨が折れることでしたが皆が力を合せてやれば何事でも出来るものだからとうとうこれも仕遂げてしまひました。

四月の二十五日になると、その夜急に大風が吹き出しました。そして夜明まで海は大荒れに荒れてゐましたが、翌る朝少年達が瀬に出て見た時は、スロー・スローの一晩のうちに碎かれてしまつて、昔の姿はありませぬ。そして木片が幾つも浪打際に轉がつてゐるばかりでした。

少年達は自分等が危なかつたことを知りました。幸にも大抵の荷物は持ち出してしまつた後なので、却つて都合がよかつたのです。と云ふのは、破れた船の材木は少年達が今度住む洞へ持つて行かれるからであります。かやうにして十五人の少年は幾日も骨折折し仕事をやつた揚句、たうとうその目的を達して、袋を組んで佛人洞に荷物を持ち運んでしまひました。

き潮になつた時はどうすることも出来ないでそのまゝ一夜を明かし、翌る日の満ち潮の時を待つた位でした。袋がやつとの事佛人洞の前へ着いた時、年の、センキンス、イバトソン、ドイル、コスターなどは、まるで故郷へでも着いたやうに嬉しがつて、飛んだり跳ねたりして遊びました。我の上からこれを見てゐたブリアンは「ジャック、お前も早くお上り。」と云つて、弟に面白く遊ばせようと思つた。「いゝえ、兄さん、僕は此處にゐる方がいゝんです。」とジャックは、平常に割合はず云ひました。

そしてブリアンもすぐ機織の上から上つて皆の者と一緒にはり上げたり、新たに住む洞の中を掃除するやら、飾りつけをするやらまた食事の用意などもして、その夜は十五人とも、新しい喜びで、ブノパンなどが撃つて来た鳥の肉を焼いて晩飯をお美味く食べました。

した。「こリア、罌を捕る落し穴に違ひないよ。」「さうらしいね。おや、この穴には罌の骨らしいものがあるよ。」

「屹度ホールドキンを人が掘たものだらう。」四人がさう話したやうに、これはホールドキンを掘るために作つた落し穴でした。やがて四人はその日の獵も終つたので、これから歸らうとしますと、ひょうきんなキルコックスは、

「どうだい、この穴の上をもう一遍見えないやうに樹の枝で塞いで置かうぢやないか。さうすりア罌が捕れるかも知れないよ。」「さうだ、それならば妙案だ。」と云つて四人はすつかり樹の枝で見えないやうに塞いで、その上を薄く土などをかけて置きました。

五、勇ましいフハン

十五少年は佛人洞にきて、先その住居は立派に出来たと云ふものゝ材木その他船から持つて来た荷物が澤山あるので、洞の中は可成狭いものでした。で、もう一つ何處かに物置

にするやうな洞があればいゝと話し合つてゐました。五月十七日のこと、ブリアン始め五六人の少年達は外の洞を探しに出かけました。もし



見つからなかつたら、新しく掘らうと云ふのです。そして此の方の森の中へはびつた時先日ブノパン達が落し穴を見つけた所に出ました。その時一つの穴の中から妙な鳴き聲が

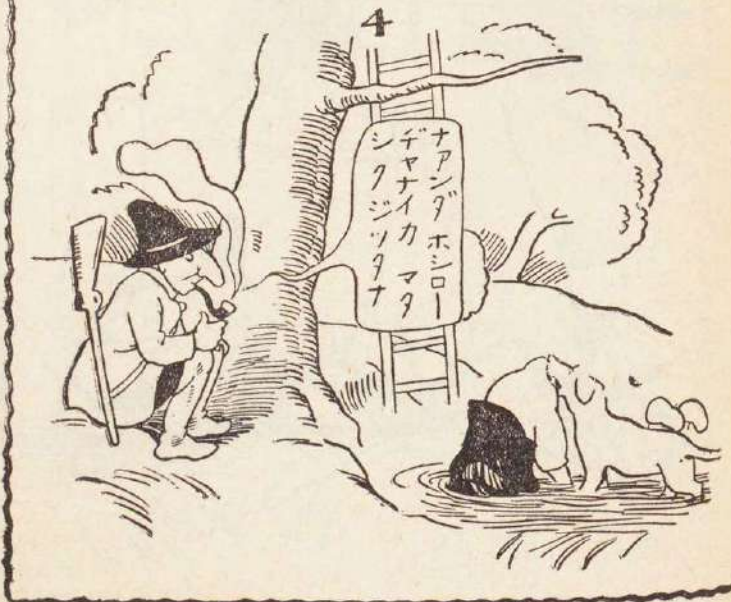
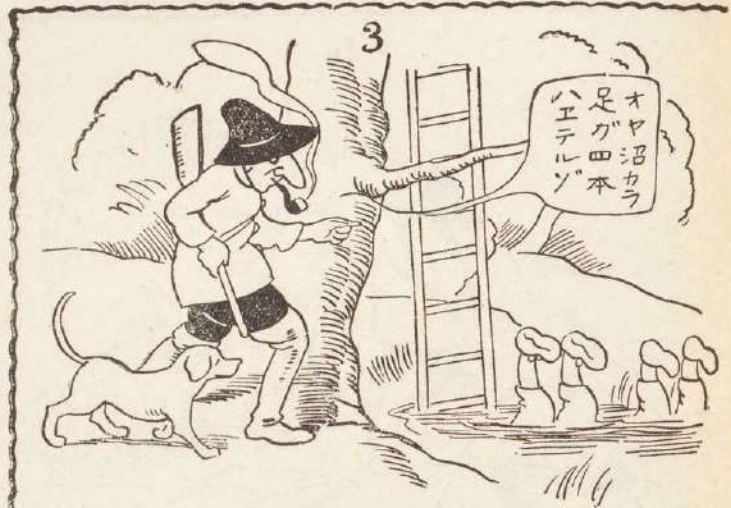
聞えました。ブリアンは最先に、ブノパンを呼ばそれに倣いて、聲する方へ駆けて行つて見ますと、その穴の上の土は散らばり、破れてあつた樹の枝は折れて、何か中に陥ら込んでゐる様子です。けれども少年達はそれがどんな恐ろしい獸かわかりませぬので、急に中にはひることも出来ないで穴の周囲を取り巻いて見てゐました。

「フハン、此處へ来い、フハン。」と誰かが大を呼ぶと、フハンは走つて来て穴の中を一瞥覗いて見ましたが、恐るゝこともなくすぐ様穴の中に飛び込みました。

「何だ、少年達が云つてゐる時、中を覗いて見たブリアンは、

「おや、二足だ、鹿鳥だよ。」と叫びました。「生捕つてしまはう。」と冒險好きのサーピスは忽ち身を躍らして中へ飛び込みました。そしてフハンと共に鹿鳥にかかりましたが、二三度はその大きな嘴でツツ突かれましたが、たうとうそれを拵りにしてしまひました。

(次號をお待ち下さい)

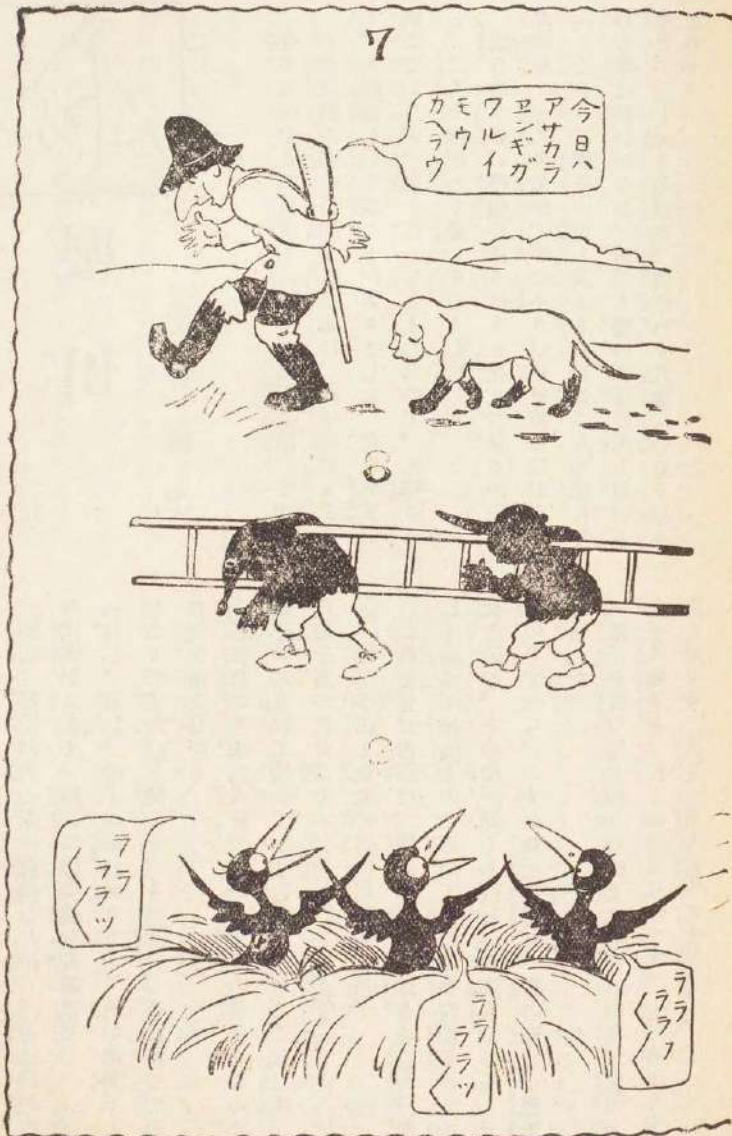


四三

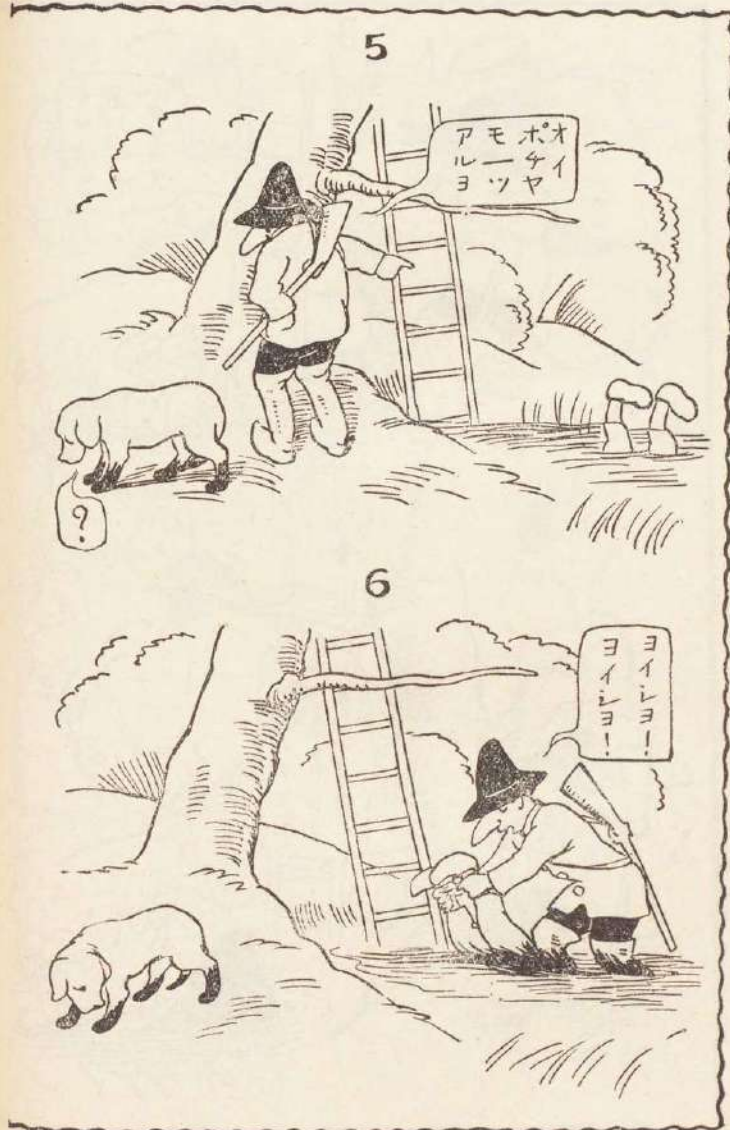


五二

7



5





櫻川

茅野雅子

今の九州をまだ筑紫と云つてゐた昔の話です。その筑紫の國の日向と云ふ處に、櫻子の君と云つて、大變優しい立派な子がありません。父は名高い武士でしたが、早く亡くなりましたので、お母さんと、二人で侘びしく暮してゐました。或日の夕暮、腰鬚のぼうぼうと生えた見るからに品の悪い一人の男が、手に小さい包を持ちながら、「ここいらに櫻子の君と云ふ人のお母さんの住んでゐる家は無いかなあ。何でも櫻の馬場の西と聞いて来たが」と大きな聲で、道を行く人達に尋ねてゐるのです。

恰度、櫻子の君の家の前でしたから、母は仕かけの仕事を其まま、傾いた門の扉を押開けて、「若し、若し、櫻子の家は此方です。何か御用もおありですか。」と聞くと、その男は、手に持つてゐた包を解きながら、「私は都から来た人買ですが、櫻子の君からこの手紙をたのまれて持つて来ました。そしてこれは櫻子の君を買つたお金です。たしかにお受取り下さい。」と、結び手紙と金包を前に出しました。これを見た母親は、眞青になつて驚きました。今にも歸つて来るものと思つて待つてゐた櫻子からの使と云ひ、その使が聞くも恐しい人商人であると云ふのですから、さすが氣丈な母も、聲の出ない程驚きました。「櫻子を買つたと仰しやじますか。あのう、私の一人子の櫻子を、何とお云ひなです。」とつめよつて聞くのです。人買の男も困つたと見えて、

「まあ、そんなに腹を立てないで、この手紙をみて下さい。わしが何も無理に買ふと云つたのではないのだ。」

と云ひわけらしく云ふのです。

櫻子の君の母は驚きながらも、とにかく手紙を披けてみました。見馳れた凍涼しい手で「お母様」とかかれてあるのを見ただけで、もう涙がぼたぼたとこぼれてきて、どうしやうもありません。

「私は人買に買はれて、この船で東へゆきます。」と讀んでは、また字も見えないやうに涙が出るのです。「どうぞこのお金で一日でもお樂にお暮の出来ませうやうに、私はお母様とお別れすることを考へますとはんたうにつらうございますが、この頃のお母様の



お心づかひを見てゐますと、私はじつとしてはあられないのでございます。」などともかかれてゐるので、其終ひに「どうぞおゆるし下さいまし。悲しさで何も書けなくなりました。」と讀んで、母は土の上に倒れて、氣も狂はんばかりに泣くのでした。

この有様を見てゐた人買は、折角買つた子供を取返されては大變だとも思つたのでせう、消えるやうに一目散に逃げていつてしまひました。

櫻子の母は、やつと氣がついて顔を上げてみると、もう、人買の男もありません。今はどうしやうもなく、なつて、手紙をしかと胸におしあて、「櫻子よ、私のたつた一人の櫻子よ、私はすぐお前を迎にゆきます。どうぞお神様もお助け下さいまし。」

氏神の木華咲耶姫にお願ひして生まれた櫻子をどうして人頁になどやるのですか。どうぞ神様も、櫻子をお取返し下さいまし。」と神様を祈つたり、身を嘆いたり、とりとめもなく泣きながら、たうとう家を出て行方知れなくなつて了ひました。

二

常陸の國の櫻川と云ふ處は、櫻の花が澤山ある上に、美しく咲くので大變名高い處でした。

今は春の盛りで、眼のとどく限り花と花とが咲垂り、恰度花の幕を張つたやうな美しさでした。

この美しい櫻川のとりに、木華咲耶姫をおまつりした磯部寺と云ふのがありました。

その寺の住寺も澤山なお供をつれてお花見に来てゐましたが、其の澤山な供人の中に、はるばる東の方からこの住寺をたのんで来て來たと云ふ、それは可愛い、そして伶俐さうな一人の稚兒も混つてゐました。一人の供の男は、住寺に何か話しをしてゐ

まし、後に、

「この櫻川の岸に氣の狂つた女がをりますが、御存じですか。毎日々々美しい拘網でこの櫻川の水に浮いてゐる花を掬つてをります。それは面白い氣狂ひですよ。」とさも面白さうに話すので、住寺も何の氣なしに「どんな人ですか。」と云ふのを聞いた供の男は「ここへ呼びませう。」と云つて伴れて來ました。

美しい拘網をもつた氣狂ひ女は獨語のやうに、

「櫻子よ、いとしい櫻子よ、お前の名と同じこの櫻川、ほんたうに一目でもお前を見たい。」と云ひながら、眞白に散つた花の上を歩いて來ました。

着物などは、餘り見苦しくない上に、何處となく上品な女でしたから、住寺も一層氣の毒に思つて、いたはつた上の上などを聞くのでした。其の親切な心が氣狂ひの心にも通つたのでせうか、非常に落ついて、いろいろ話をしました。「私はたつた一人の櫻子、申す子に生別れをいたしました。夫はさる

つきの稚兒に向つていひました。

「さあ、遠慮はない、早うお母様に逢つておあげ。」住寺のこの親切な言葉に稚兒は飛び上るほど喜びました。やつれてゐても、姿は變つてゐても、片時

忘れたことのない懐しい母に三年目に巡會つた喜びは譬へやうもありません。

氣の狂つた母も、抱きつく稚兒の顔を見て「あら、お前は櫻子ではないか。」と二人は嬉し泣きに泣きました

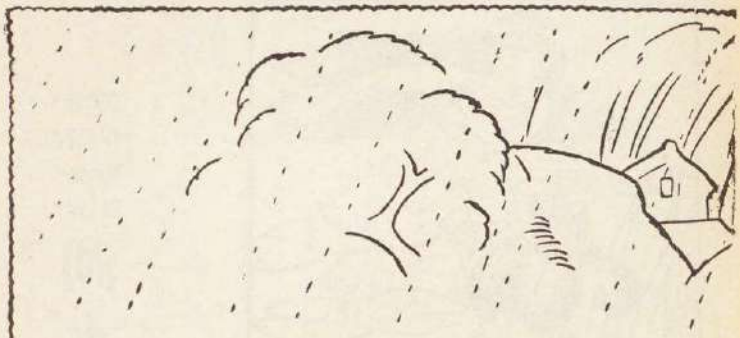


自分のある武士でしたが早く亡くなりまして、唯この櫻子一人を命と思つて育ててをりますうちに、思ひもよらぬ人買に買はれて、東へ行つたと云ふことですが行方がわからないのでございます。」と云ひながら泣くのです。

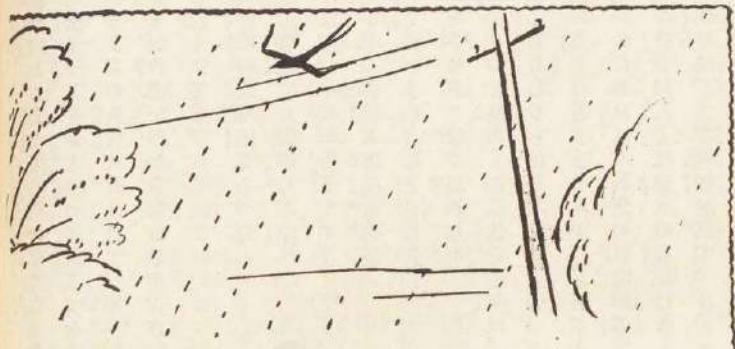
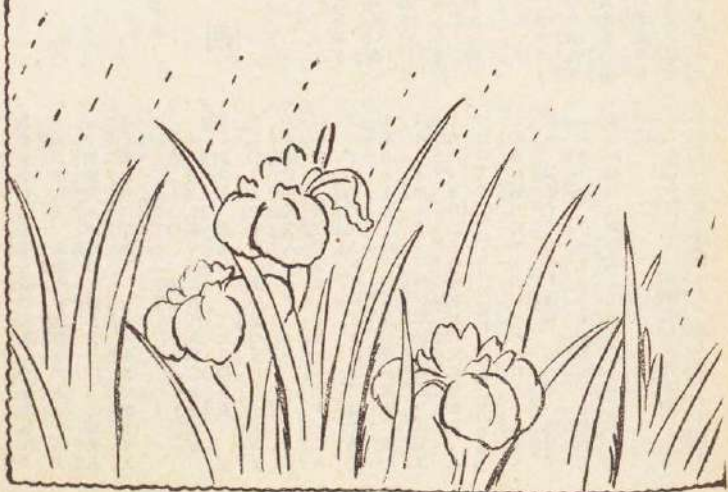
「故郷の氏神様であつた木華咲耶姫にお願申して生れたたつた一人の櫻子です。どうぞ、神様も佛様も御助け下さいまし。」などと云つてさめざめ泣く哀れな有様をじつと眺めてゐた住寺の僧は、何か思ひあたることでもあるらしく、「若しや、あなたは筑紫の日向の方ではありませんか。」と云ひますと、

「いかに私は、筑紫の日向の者でございます。」と氣の狂つた人とは思へぬ程はつきりと答へるのです。住寺は、この有様を見て、ひとり考込んでゐたさ

親を思ふ心のあつい櫻子の君を神様も可哀想にお思ひになつたのでせう。母の狂つた心もすつかりよくなつたばかりでなく、大きくなつてから、常陸下總の兩國の國司相馬兵衛將家と云ふ立派な人になつたと云ふことです。(をばり)



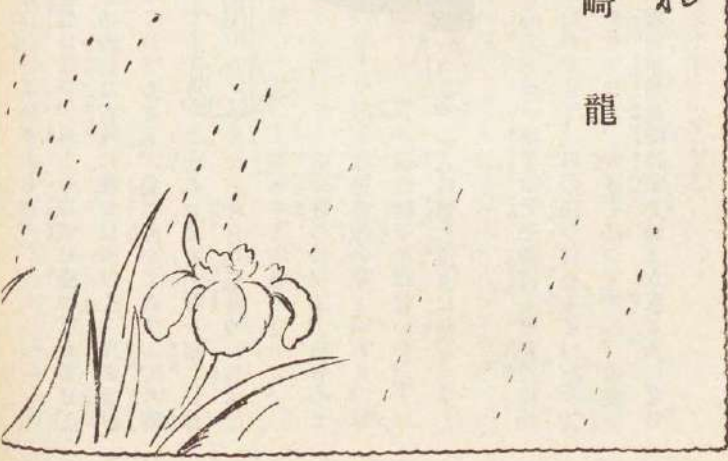
濡れました
脊戸の 千日
花菖蒲
雨の降る日に
咲きました
海から山から
さみだれの
雨がサンサン
降りました



青い 田甫の
五月雨は
百日九日
降りました
軒端の 雨だれ
軒雀
電信柱も

さみだれ

達崎 龍



名作物語 湖水の女王

アナトール・フランス

森川 一朗



フランスの海岸から二三哩沖へ出ますと、波のない穏やかな日には、舟の上から、深い海の底に、大きな樹が海山茂つてゐるのが見えます。これは何万年と云ふ大昔にこの海が陸であつた證據です。それがいつか海と變つてしまつたのです。

人の小さなお姫様と寂しく暮してゐました。或日のこと、夫人のお友達のアランシュランド伯爵夫人が訪れて参りました。この夫人も伯爵に死に別れて、一人の小さな幼ちやんと寂しく暮してゐたのです。

けました。その日の中にユウリは公爵夫人のお城に届けられました。伯爵夫人は翌朝はもう亡き人の影も入つて居りました。

も、あの不思議に美しい湖のことを恐れることが出来ませんでした。或日、二人はお城の塔へのぼつて、その窓から遙かに遠い湖を眺めました。そして青く澄み渡る水の色を見ては、二人は行つて見たい氣がしてななかつたのです。

は時々疲れて足が痛くなつたり、息が切れたりしました。そのうちにアペイユ姫の靴が片方破れてしまひました。困つたことになつたと思つて、ひよいと後か振り返つて見ますとお城の塔は遠くの方に小さく見えました。

来たので、ユウリは来る途中で毒を見たからと云つて、アメイユ姫を待たせて置いてそれを取りに行きました。ユウリが大きな葉の上に毒を一杯取つて歸つて来ますと、アメイユ姫は疲れたものと見えて、いつの間にか柔らかな昔の床の上に凭りかゝつて眠つてゐました。ユウリは起すのも可哀さうだと思つて、その間に自分ばしつとよくこの美しい湖を見て歩かうと、銀色の杖を垂れてゐる柳の木の方へぶらぶらと歩いて行きました。

その時月の光がさして来て、湖の上に薄い霧がかゝりますと、見る間に妖女の口のやうな不思議な美しい景色になりました。すると、霧の中から、長い緑色の髪をした美しい女がまるで風を流れるやうに、ふわ／＼とユウリの方に両手を差し出しながら近づいて来ました。ユウリは気が付いて逃げ出さうとしましたけれど、それも間に合はないで、その美しい魔女に連れられて行つてしまひました。アメイユ姫の方は、ふと眼を覺まして見ま

す、白い顔と膝の邊まで長くした小人達が澤山自分な輪のやうにしてとり巻いてゐるの別にアメイユ姫に對して悪いことをしやうもありませんでしたから、アメイユ姫もやつと安心して、種々なことを話しかけました。そして小人達が持つて来て呉れたお乳や蜂蜜やそれから土の下の窟で出来る大變美味しいパンを食へましたから、すつ／＼嬉しくなつてしまひました。それでもユウリのことや家の母さまのことが心配になりましたので、母さまの所へ連れて行つて来ておくれ、と申しましたけれど、小人達は私達にはそんなことは出来ないと云ひました。そして小人達は地の底の國の面白く話を話して、これからお前さんを連れて行つて上げよう云ひました。アメイユ姫は其話が餘り面白さうなので、アメイユ姫は母さまへの土産話にしようとして、連れて行つて貰ふことになりました。そして木の枝で出来た乗物に横になつて、澤山の小人達に擔がれて、だん／＼高い山を登つてゆ

きました。そして、いつの間にか洞穴のやうな所へ進入つて行つたと思ふと、暫らくしてアメイユ姫は地の底の王様の前に下されました。王様と云つても矢張り小人ですが、身にはヒカ／＼する立派な着物を着て、頭の上には大きなダイヤモンドの幾つもついた王冠を冠つてゐました。そして手には槍を持つてゐました。

ロクと云ふこの王様は、家來の小人達が、美しいアメイユ姫を連れて来たのを見て、大層喜びました。そしてアメイユ姫にお望みのものは何んでも上げると云ひました。そこでアメイユ姫は靴が欲しいと云ひましたので、ロクの王様はすぐに、魔法の槍で地べたを突いて、美しい銀の靴を出してくれました。それを見てアメイユ姫は吃驚してしまひました。そんな美しい銀の靴よりか、木の靴を穿いて、お母さんの所へ歸りたかつたのです。アメイユ姫がそのことをお願ひしても、ロクの王様は首を振るばかりでした。仕方がないのでアメイユ姫は、この地の底の國で暮すことになりました。

併し、ロクの王様は、毎晩夢の中でだけ、お母様に逢つたり、お話ししたりすることを前して呉れましたので、アメイユ姫は毎晩お母さまの夢を見る事が出来ました。お城にゐるお母さまも亦、毎晩夢中でだけアメイユ姫に逢ふことが出来たのです。

夜間は昔んな小人達が来て、一生懸命アメイユ姫の機織を取つたり、面白く遊ばせて呉れたりしましたが、アメイユ姫は矢張り地の上のことばかり思ひ續けて、時々岩の隙れ目から、一寸だけ青空の見える所へ行つては上の方を覗いて見て、地の上に憶れてゐました。

三

或朝アメイユ姫が金の琴に合せ、歌をうたつてゐると、メロと云ふ小人が一人来て王様がお呼びですから来て下さいと申しました。アメイユ姫が改まつて何の御用か知らずと思つて行つて見ますと、王様はアメイユ姫の姿を見すと、すぐに一間へ案内しました。そこは寶物のほひつてゐる部屋で、目もくら

しやうな金銀や寶石や織物が一杯つまつてありました。

王様はこの中でどれでも好きなものをアメイユ姫にやると申しましたので、アメイユ姫



は喜んで手を出しかけると、その時ふいと上の方に岩の隙れ目があつて、そこから青空が見えましたので、急に密に歸りたくなりまし

た。そこで寶物を取らうとした手を急に引こめて。

「小さいロクの王様、どうぞ私をもう一度地の上に戻して下さい」と申しました。けれども王様は何んとも答へないで、家來に目くばせして、寶石のぎつしりつまつた箱をアメイユ姫の眼の前で開いて見せて、「好きなものを取れ」と申しました。けれどもアメイユ姫は首を振つて、「タラリド家の花園の中の一しづくの露だつて、私はこの中の一香結構なダイヤモンドより美しいと思ひます。この青い寶石だつてユウリの眼の方がよっぽど美しいやうです。」この言葉を聞くと、王様はいやな顔をしました。それはアメイユ姫がユウリを大層好いてゐるらしいからです。

「さア、そんなことを云はずにこの王冠をお冠りなさい、今日からはこの國の王女になるのです。」と王様は嚴かに云ひました。それから三十日の間、地の底の國では新しい王女のお祝ひの支度で大騒ぎでし。その騒ぎもおしまひになつた日に、王様はアペ

イエ姫の所へ来て、この國のお妃になるやうにと申しました。けれどもアベイエ姫は、王様の御津切はよくわかつてゐますけれど、それは出来ないと断りましたので、王様はほつと溜息をつきました。

ある日ロク王様は眞黒なマントを着て出て來ました。そしてアベイエ姫にも同じやうなマントを着せ、これから地の上へ連れて行つてやると申しました。

間もなくロク王様は、小さい體にも似合はす御々とアベイエ姫を抱へて、クラリドのお城の花園へ來ました。アベイエ姫はそれと知つて胸がわく／＼する位喜びました。涼しい風や、香ばしい花の匂ひや、廣々としたあたりの景色、何一つなつかしくないものはありません。

王様はその時アベイエ姫の耳元に口をよせて、これからお母さまの所へ連れて行つて上げることを、併しお母さまとお話しなしたり、體に一寸でも觸ると、魔法の力が破れてこれから後夢の中でお母さまに逢ふことが出来なくなる、と云ひました。

お部屋に入ると、お母さまは寢臺の上で眠つてお出でになりましたが、美しいお顔もどうやら悲しみの爲めに青白くなつてゐました。お母さまはアベイエ姫が歸つて來たのを見て、嬉しさを餘り言葉も出ないで、たゞ兩手を凝めてアベイエ姫を抱かうとしたので、アベイエ姫も胸が塞がるやうになつて、お母さまの優しい手の中に飛び込んで抱かれようとした。

その時、ロク王様は引つたるやうにアベイエ姫を抱いて、また地の底の國へ歸つてしまひました。

四

ロク王様は、アベイエ姫の顔を一度だけ叶へてやりさへすれば、姫がこの國の妃になることを承知して呉れるものと思つて、アベイエ姫をお母様の所へ連れて行つたのです。併し、その後もアベイエ姫は矢つ張り沈んだ顔をしてゐましたので、王様は心配さうにその譯を訊ねますと、アベイエ姫はユウリのことを心配してゐると云ふ事がわかりました。

てしまひました。

其處へロク王様がユウリを助け、來ました。そして持つてゐた魔法の指輪を一寸本品



の箱に開けるとすぐに箱は二つにわかれて、易とユウリを助け出すことが出来ました。かうしてユウリはロク王様に助けられてお城へ歸りましたが、伯爵夫人はそれを見る

と、飛び上つて喜んで、もう決して離さない、と云ふ風に、ユウリをしっかりと抱きました。それからユウリは、一番心配だつたアベイエ姫のことを聞きまして、伯爵夫人は夢の中で始終姫に逢つてゐますから、アベイエ姫が今地の底の國でどんなことをしてゐるか、そしてどんなに悲しんでゐるか云ふことを残らず話しました。

その晩、ユウリはみんなが寝静まつてから、家合と二人で鎖帷子で身を固め兜をかぶり、短い剣を腰に下げて、馬に乘つて出かけました。云ふまでもなく、アベイエ姫を取り返しに地の底の國へと向つたのです。

地の底の國の門にゆくと、すぐに番兵に認められましたが、ユウリは勇ましく中へはひつて行きました。そして大群でアベイエ姫を取り返しに來たのだと云つて、小人の大軍と戦ひました。いくらか對手が小人でも、何しろ深山の人数が向つて來るのでありますから、流石に勇ましいユウリも腕のやうに飛んで來る矢を防ぐのは並大抵ではありませんでした。その時、ふと見ると遙か一境高い所に、王

そこで親切な王様はユウリを探しにかけました。

王様は地の底の一番深い所に住んでゐる、古く／＼小人の所へ行つて、世の中のことは何んでも見える種々な望遠鏡を借りて見ますと、やつとのこと、ユウリが湖の底の魔女のお宮で、半屋に入られてゐることがわかりました。

本當にその通りで、ユウリはいつぞやアベイエ姫と一緒に湖を見に行つた時から、七年もたつてゐましたから、ユウリもアベイエ姫と同じやうに、一人前の立派な男になつてゐました。ユウリは緑色の髪をした美しい湖の女たちに、甘やかされて暮してゐましたが或日たうと思ひ切つて、地の上へ還つて下さいとお願ひしました。すると魔の女王は、ユウリの頭を優しく撫でながら、いつまでもこの國にゐて、この國の王になつてお呉れと申しましたので、ユウリは、

『でも僕はアベイエ姫をお嫁にするんですから駄目です。』と云ひますと、女王は怒つてユウリを本品の箱に入れて、姫の中に押し込め

冠を冠つて立派な着物を着た人が坐つてゐましたが、その人はユウリを湖の底から助け出された大恩人でしたから、ユウリは冠を投げ出して、そこへ飛んで行きました。そして助け貰つたお禮を云つて、アベイエ姫を返して貰ひたいとお願ひしました。

ロク王様は心の正しい親切な人でしたからもうアベイエ姫をこの國に止め置くのは氣の毒だと思つて、アベイエ姫を連れて來させました。アベイエ姫は、ユウリの姿を見ると、嬉しさに胸がわく／＼躍つて、駈けて來ました。王様はこの様子を見て悲しさうな顔をしました。

『アベイエ姫、これがお前の夫にしたい人か』と云ひました。

『さうです、この人です。この人の外には誰もありません。』とアベイエ姫は嬉し泣きに泣きながら答へましたので、ロク王様は今これまでと思つて、アベイエ姫をユウリに渡してやりました。そこで二人、種々なめづらしいお土産物を買つて七年振りでなつかしいお城に歸ることが出来ました。(をばり)



三太郎と筍

松平三千夫

三太郎は全く無邪氣な子でした。學校でも家でも皆から可愛がられてをりました。ある日三太郎は學校で校長先生から支那の孟宗の話を聞きました。孟宗は大變親孝行な子で、お父さんが寒中筍を食べたいと云はれたので、雪の中を竹藪に行つて筍を探したと云ふことを聞いて大變感心しました。三太郎は學校から歸る途々、僕も歸つてお父さん

に筍を食べさせてあげようと思ひました。お父さんは、筍が大變好きでしたから、三太郎の家の裏には大きな竹藪がありました。で、筍の出る時分になると藪でない畑の中に筍が出たり、庭まで入り込んで來ることがありました。去年などは座敷に面した庭の真中に筍が一本出たりましたのです。三太郎はやがて座敷の下から大きな筍が生えて、ゆか板や臺を突き破つてにゆうと

座敷の真中に筍が突き出したら面白いがなア、なと思つたことがあります。三太郎はそんなことを考へ乍ら歸つて來ました。

「お母さん、只今歸りました。」さう云つて靴を机の上に置いたまゝ、早速納屋に行つて鎌を持ち出して裏の竹藪に來ました。未だ寒い時分ですから筍が出てゐる道理がありません。矢鱈にあつちこつちを掘つて見ましたが筍らしいものは一つも見つかりませんでした。

三太郎はすっかり飽きが來てもう筍を探すのは止まうと思ひました。けれどそんなことでは親孝行は出來ないと自ら思ひ返して、今度は日當りのいい處を探して探し出しました。

「三ちゃん、何を探してゐるのだい。」三太郎が何か一生懸命に土を掘りいちつてゐるので、友達隣の五郎がやつて來て尋ねました。「筍を探してゐるのだい。」

と三太郎は掘る手を休めず云ひました。「筍！ 筍が今頃あるものかね。馬鹿な、そして一體何のために筍を探してゐるのだ。」

と友達隣の五郎は云ひました。「何でもいゝのだ、黙つてゐてくれ給へ。そんなことをべら／＼喋百つて了つては、折角の親孝行の効能が薄くなるから。」

と三太郎は一人合點してゐるやうにさう云つて、五郎の相手になり乍ら矢張り筍を探してをりました。五郎は何のことだか譯が解らないので、茫然と暫く立つてをりましたが、やがて詰らなくなつて黙つて歸つて了りました。

五郎が歸るとそのあとへ近處の太郎兵衛爺さんが通りかゝりました。「これ／＼三太郎坊、そこら中掘り廻つて何をしてゐるのだい。」と三太郎を見て聲をかけました。

「お爺さんか。僕はね、孟宗のやうに筍をお父さんに食べさせてあげようと思つてね、それで筍を探してゐるのだよ。」

と三太郎は云ひました。

「ハッハッ……孟宗のやうに筍を食はせるつて、その竹は孟宗竹さ。」

とお爺さんは大笑ひしました。

「いや違ふよ、昔支那に孟宗と云ふ人があつたのだよ。その人が大變な親孝行で寒中、筍をお父さんに食べさせるために、筍を掘りに來たのだつて。それからその竹に孟宗と云ふ名がついたのだよ。」

と三太郎は大いに學者ぶつて、今日學校で校長先生から聞いて來た通り云ひました。

「ハッハ、孟宗が人の名前になつたり竹になつたり、何だかちんぷんかんぷんだ。」

お爺さんはさう云つて笑ひ乍ら行つて了ひました。三太郎はそのあとでお爺さんの言ひ草を思ひ出



して笑ひ乍ら尚筍を探してゐましたが、短い日はいつの間にもやら暮れかゝつて來ましたが、たうとう筍は一本も見つけることが出来ませんでした。

三太郎はそれにもこりず、翌日も學校から歸つて來ると又竹藪に筍を探しに出かけましたが、矢張り筍は一本半本も見つけることが出来ませんでした。そこで三太郎は考へました。

「まだ寒いだから筍は出來てゐないのに違ひない。で一つ焚火をして地面を温かめてやれば、筍のことだからすぐ大きくなるに違ひない。」

三太郎はさう思つて枯枝や落葉を集めて來て藪の傍で焚火を始めました。

「これ、三太郎、そんなところで焚火をして藪にでも火がついたら大變ぢやないかい。」

とお母さんはそれを見つけて飛んで來て云はれました。けれど胸に一物ある三太郎は、

「何大丈夫ですよ。僕がかうやつてついでゐるので

すから。」

と云つてすぐ火を消さうともしませんでした。

三太郎は地の下でぐんぐん、筍が大きくなつて、メリメリと土を破つて今にも頭を持ちあげて來るやうな氣がしてなりません。で早く灰をかき退けてその附近を掘り返して見たくて仕方ありませんでしたが、一日位では仕方がないから、二三日も火を焚いてからにしようと思ひました。

それからその次ぎの日も亦昨日の通り火を焚きました。三太郎はもう今にも筍がにゆうと出て來るやうに思はれました。そしてそんなことを考へ乍ら火にあたつてをりますと、恰度いゝ暖かさになつてうとくと居眠りを始めました。

暫くすると三太郎の身體に觸れるものがあります。何だらう？と思つてよく見ますと、ハッと驚きました。それは待ちに待つた筍です。筍がにゆうと彼の前に飛び出して來たのです。

「アッ、筥だ〜。」

と三太郎は嬉しさの餘り筥に抱きつきました。ところがどうでせう！ 三太郎が筥に抱きついた時に筥は一度に一丈餘りも伸びて了りました。そしてそれにつれて三太郎の身体は筥の先に抱きついたまま、軽々と一丈も浮いて了つたのです。

「アッ大變だ！」

と三太郎は飛び降りようとした。ところがその時はもう一丈が十丈にも二十丈にも伸びて了つし、三太郎が下を見た時は思はず目を廻しさうでした。で一生懸命に筥に抱きついて眼を閉じておりました。そして暫く氣を落つけて恐る／＼目を開いて下を見ますと、まア何と云ふ光景でせう？ 今まで頭の上で舞つてゐた筥が足の下の方に小さく／＼見えません。その向下に自分の家が小さく見えます。そして家の廻りは大きな／＼筥で一ぱいになつてをります。まるで筥の大森林が出来たやうです。さ

入りました。

「おや／＼何をしてゐるのだらう。あゝ判つた〜。あれは屹度孟宗に違ひない。病氣のお父さんに好き



な筥を食べさせてあげようと思つて筥を探してゐるに違ひない。全く親孝行な人だ。けれどあんな

三太郎はさう思つて「孟宗さん」と呼んで見ました。けれど聲は向うに達しないやうでした。で、今

うかと思ふと富士山が玩具の富士山のやうに見えま

す。おや／＼と思つてゐる中に活動寫真でも見てゐるやうに東京が見えたり、大阪が見えたり無論日本中見えます。四國も九州も臺灣も、そして廣い／＼太平洋を越えてはアメリカ大陸が見えます。それから又大西洋を越えてイギリスが見えます。それからフランス、ドイツ、イタリーなどの全體が見えます。無論アフリカも見えればロシアも見えます。それからバルカンからインド、それから支那の方ですつと見えます。さうしてゐると。

「ロシアからシベリアを除きますと、支那は世界第一の大國で、人口四億以上もあります。」と云ふ聲がどこからとなく響いて來ました。たしかにそれは地理の先生の聲です。成る程支那と云ふ國は大きい、とつく／＼三太郎は感心してゐますと、ふと一人の小男が叢の中で何か一生懸命に掘つてゐるのが目に

藪の中でいくら探したつて筥がある筈がない。一つ大きな聲を出して呼んでやらう。こゝ、來ればいくらでも筥はあるのだから。」



たりへ落ちたら大變ですから、どうぞこればかりは掘らないで下さい。」と泣き聲になつて頼みました。けれど孟宗は一向平氣で、

「いゝえ、どうしてもこれを貰ひます。外のものならどんなものでもいりません。」

さう云つてドシンと蹴を根元におち込みました。箱はその打撃にゆらゆらと大きくゆれました。その時三太郎はすつかり振り落とされたと思ふ位身體を振り廻されました。三太郎は餘り怖かつたので思はずアツと聲を立てました。

「おい、三太郎坊、そんなところで居眠りをしては風を引くぞ。」とその時三太郎の耳の傍で聲がしました。三太郎は不思議に思つてそつと目を開いて見ますと、太郎兵衛爺さんがいつの間にか傍に来て三太郎をゆすり起してゐるのでした。その時日はもう西に傾いて焚火は消えかゝつてをりました。

一度、

「そこにゐられるのは孟宗さんちやありませんか。」と呼んで見ました。するとやつとその聲が通じたのか、その小男は顔を上げました。

「私は孟宗ですが、私の名を呼ばれたのは誰です。」と孟宗は云ひました。

「僕だ。こゝだ。」

と三太郎は聲が通じたので高いところから夢中で叫びました。孟宗はあたりをキョロキョロ見廻してをりました。やつと三太郎を見つけました。そして「おや、これはまア何と云ふ大きな箱だ。」と呆れたやうに見上げたり、見下したりしてゐました。

「孟宗さん。貴方はお父さんに箱を食べさせたいと思つて探してゐられるのでせう。」

と三太郎は云ひました。

「えゝさうです。」

と孟宗は頷きました。

「それなら僕のところに行くらでも箱が出てをりますから取りにおいで下さい。」

と三太郎は云ひました。

「有難う、ちやすぐ行きます。」

と云つて小男の孟宗は「ヨコ」と走り出して舟に乗り、一二分間で海を渡つて三太郎のところへ来ました。

「さアそこにある箱をいくらでも掘り給へ。」

と三太郎は上から云ひました。

「いゝえ、私は貴方の登つてをられる一番大きな箱が欲しいのですよ。どうかこれを掘らして貰ひます。」と云つて孟宗は根元から掘りかけました。三太郎は喫驚仰天しました。

「ちよちよつと待つて下さい。それを切られた日には僕が大變です。僕は今こんな頂上にあるのですから、この箱が倒れた日にはどこに落ちるか判りません。インドや又はアフリカの人食人種のあるあ



化けの皮を
賣る人 (つゞき)

柳井正夫

フレデリック大王は御殿にまつて、毎日よいしらせのくるのを待つてゐましたが、一向に出て行つた家來は歸つてきません。

そのうちに、やうやく一人二人の家來が御殿へほんやりと歸つて來ました。

「陛下、誠に残念でございますが、化けの皮は見だせませんでした。」

「莫迦！ お前の探し方が足りないのだ！」

仕方がありませんから、家來はまたしをしをとして、方面をかへて探しに出かけました。

その次に歸つてきた家來も、叱かられた上にまた

探しに出されました。

かうして歸つて來た家來は、みんなまた探しに出されましたが、何といつても手に入らないものはどうすることもできません。

大王もしまひには尋ねあぐんで、がっかりとしてしまひました。

「私の力でも探し出されないものだから、これはきつと噂ばかりではんとは無いのかも知れない。無いとすれば、この噂を立てた奴を見つけ出して、きつと重い罪を被せてやらねばならない。」

と仰せになつて、今度は化けの皮を探すのをやめて噂の出どころをお探させになりました。

役人は血眼になつて探しましたが、これとでもどこから出てきたのかさへもわかりません。まるで煙をつかむやうなもので、役人は空しく御殿へ歸つてくるよりほか、しかたがありませんでした。

フレデリック大王は残念で残念でたまりません。

さんざお怒りになつてみましたが、全く怒り甲斐のないことなのです。そしてしまひにはもう何にも探すのをやめて、このことはそのままはふり出されておしまひになりました。



ども、どうかすると、世にも珍らしい化けの皮を、せひとも手に入りたいやうな氣になつて、人に知れないやうにしてお互ひに探しまはつてゐました。

すると或日のことフレデリック大王の御殿へ、一人の皮商人がやつて來ました。

「私は、今お探しになつてゐる化けの皮を持つて參りました。どうかこのことを陛下に申上げて下さいませ。」

門番はこれをきいて驚ろいてしまひました。

「ほんとか？」

「ほんとでございますとも。」

これこの中に入つてをります。」

商人は片手にさげ靴をボンボンとならいて見せました。

「うん、よし、待つてをれ！」

といひすて、門番は大いそぎで大王のお側の家來のところへ行つてこのことを申しました。お側の家來はすぐと大王に申し上げました。

「なに、化けの皮を持つて来たとき、よしよし早速これへ通せ！」

皮商人は家來につれられて大王の御居間へ参りました。そして、恭しく頭をさげました。

「お、よく来てくれた、もつと近くへよれ。聞けばお前は化けの皮を持つて来たさうだが、それはほんとかか？」

「陛下、なんで嘘を申し上げませう。私はいへんな苦心をして、やつと化けの皮を探し出して参つたのです。」

「うむ、實は私もたいへん苦心をして探してゐたのだが、今まで見出せないのて残念に思つてゐた所だ。そしてそれは一體熊の皮のやうなものか？」

「いえ、そんなものではございません。」

「では虎の皮のやうなものか？」

「してみると、鱧の皮のやうなものぢやな。」

「いえいえ。」

「ま、とにかく早くその品物を見せてくれ。」

「ではごらんに入れます。」

大王がせき込んで見たがつてゐるのを知つて、皮商人はゆつくりと落付きながら片手に提げて来た靴の口をひらきました。

このことをきつけた御殿中の人々は、老臣達は勿論のこと、一人残らず大王の御居間に集つて來ました。そして、この珍らしい品物をせめて一眼なりとも見たいものと、騒ぎました。

「ではごらんに入れます。」

皮商人はもう一度いつて、靴の中からづるづると一枚の皮を引き出しました。

大王はちつと見つめました。

家來達は目を見張りました。

「これが化けの皮でございます。」

皮商人は一枚の毛むくじやらな皮を、大王の眼近くぶらさげて見せました。

「うむ、これはなかなか立派な皮ぢや。だが皮商人、これは狐の皮ではないか？」

「いえ、狐の皮などではございません。たしかに化けの皮でございます。」

大王は尙ちつと見つめました、たしかに狐の皮に相違ありません。

「いや、これはたしかに狐の皮にちがひない。お前は狐の皮を化けの皮と云つて、この私の眼をごまかさうとするのか！」

大王は少しく氣色ばんで申されました。

「いえ、なんと仰せられても化けの皮に相違ございません。」

「うむ、それほどまでに申すなら、今私がほんとかうそかを調べて見やう。誰か私の椅子の側の狐の皮を持つて來い！」

と仰せられて、早速玉座の横に敷いてあつた狐の皮をおとりよせになりました。

「どうぢや、これでもお前は狐の皮でないと申すのか？」

大王は狐の皮と化けの皮とを並べて、皮商人の前につきつけました。

皮商人は、恐縮して白状するかと思ひの外ニツコリと笑つて、恭しく頭をさげました。そして静かに大王に向つて申しました。

「陛下、陛下の御明敏な御眼力によりまして、私が狐の皮を化けの皮としてごまかさうとしましたのを

見ぬかれてしまひました。これはたしかに狐の皮に相違ございません。」

「それ見る、けしからん奴だ。私の眼をごまかさうとした奴、早く縛つてしまへ！」

「ま、どうか、陛下しばらくお待ち下さいまし……」皮商人は怒る大王と、氣色ばんだ家來達とを押し



しづめながら落付いて申しました。
「私は陛下のために、つまり化けの皮をはがれてしまつたのでございます。即ちこれがほんとの化けの皮でございます。その上、元來狐といふものは御承知の通りに、よく人を化かすものでございます。ですから狐の皮は化けの皮であると申しても、決して間違ひはなからうと存じます。つまりこれがほんとの化けの皮でございます。」

これをきいたノレドリツク大王始め、一堂の家來達は、思はず笑ひ出しました。

「そして陛下……」
皮商人はいひつゞけました。

「陛下のお治めになるこのプロシヤの國に、しかも、この波風もたない太平の御代に、何で化けの皮などといふ莫迦げたものが出てきませうか。みんなこれは、奇を好む良くない人達が、根も葉もない噂を立てたのが始まりで、決してそんなものがあらう筈

ます。」

かういはれて大王始め澤山の家來達は、成程と思ひました。そして各々自分達がつまらないことに騒ぎ立つたのを、心の中で悔いて居りました

「成程まつたくお前の申す通りだ。」
と仰せになつて、大王はたいへん皮商人をお褒め

になりました。そして澤山の御褒めを、皮商人にお與へにならうとしましたが、皮商人はすつかり辭退して、またいづこともなく歸つて行つてしまひました。

この噂がすぐに御殿からベルリンの町へ、ベルリンの町からプロシヤの國中へまで傳はりましたので人々は全くその通りだと思ひました。そしていつの間にか、このはげしかった化けの皮の噂が、煙のやうにノレドリツク大王の國から消え去つてしまひました。

(をばり)



はございません。その證據には、このプロシヤの王様である陛下が力を盡してお探しになつたのにもかゝはらず、そんなものは影さへも見出されなかつたでございませぬか。これが立派な證據でござい

どんど風吹けよ

若山喜志子

雨あめこんこ やんでも

どんど風吹けよ

もつと もつと吹けよ



あつちでも

ざわ／＼

こつちでも

ざわ／＼

梅うめの實みがぼつつりこ

李りがぼつつりこ

どんど風吹け吹け

もつと もつと吹けよ





きやツき

やツ物語

(推薦)

久米 舷一

昔、興平と云ふ、それはく人のいゝお爺さんが
ありました。何でも人の顔を見たら、物が違ひたく
なると云ふ性なのです。こんな結構な話はある
ません。又興平爺さんは何時でもニコニコしてゐて
何か可笑しい事でもあると、

「きやツ、きやツ、きやツ、きやツ。」と妙な聲をた
て、笑ふのです。お爺さんのお内儀さんは又大層な
働手で、毎日息を作つたり、薪を買つたりしてお金
を儲けて來ました。所がそのお金を、興平爺さんは
惜氣もなく、乞食にやつたり、鬻にやつたりしてし

終ひにはこつちが干乾しになつてしまふぢやない
か！」

「さうかネ、干乾しになるかね。そりや大變だネ。
きやツ、きやツ、きやツ。」

これですから全く手の付けやうがありません。
或日の事、お婆さんは町へ用たしに行き、お爺さ
んが一人でお晝御飯を食べてゐました。すると表の
方で、トントンと戸を叩いて、

「お爺さん、お爺さん。」と呼ぶ者があります。

「はてな、誰だらう。」と思つて、立上つて表の戸を
開けて見ましたが、誰もをりません。可笑しな事も
あるものだ、とお爺さんは、又元の席に歸つて來ま
したが、アツと驚きました。と云ふのは、今迄自分
が御飯を食べてゐた御膳が、何時の間にか跡かたも
なく、消え失せてゐるのです。

よく見ると、板の間には何か小さな獸の足跡のや
うなものがついて居ます。



八四

まふのですから、全くお内儀さんの怒るのも無理は
ありません。

「お爺さん。お前さんのやうなわからずやはあや
しない。ほどこしなどもいゝ加減にして置かないと



「ハ、ア、これが盗んで行つたのだナ。」と、お爺さ
んは思ひましたが、例の氣性の事として、平氣の平左
で其日は寢てしまひました。ところが翌る日、お爺
さんがお晝御飯を食べて居りますと、又表の所で、
「トン、トン、お爺さん。」と呼ぶ者があります。

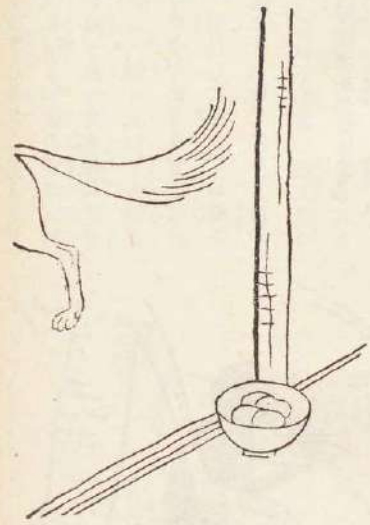
八五

お爺さんは「よし、今日こそ正體を見てやらう。」
 と思つたので、表へ出て行く振りをして、戸の蔭か
 らそつと覗いて居ました。すると裏口から、チヨコ
 チヨコと走込んで来たのは、一匹の可愛らしい小猿
 です。

小猿はキヨロ／＼四圍を見廻して居ましたが、矢
 庭にお膳を抱へて、裏の方へ逃げ出しました。

「おや／＼、これが盗むの
 か。」とお爺さんは呆れな
 がら後をついて行つて見ま
 すと小猿は裏の楓林を抜け
 て、どん／＼奥深く這入っ
 て行きます。そしてたうと
 う終ひに、山蔭の小川のそ
 ばにある洞穴の中へ影を隠
 しました。

お爺さんは、そつと近寄



つて洞穴の中を覗いて見ると、中には一匹の親猿が
 何處か病氣でもあると見え、枯葉の上に寝て居りま
 す。それに向つて今の小猿は「さア、どうぞ、お上
 り下さい。」と云はんばかりに、お膳を進めて居るの
 です。

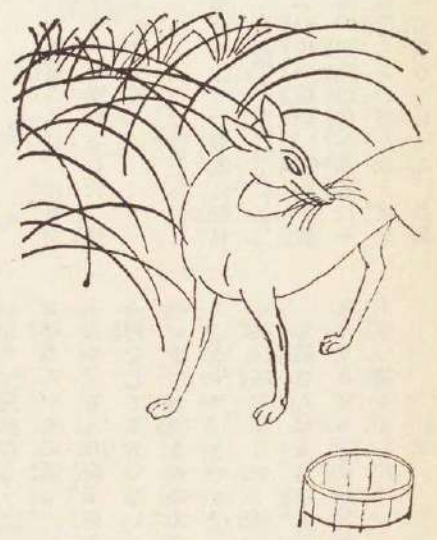
お爺さんは今更のやうに感心してしまひました。
 「何と云ふ親孝行な猿だらう。」とお爺さんは御飯を

盗まれた事など忘れてしま
 つて、思はずほろ／＼と涙
 を流したのでした。

二

やがてお爺さんは家へ歸
 りました。そして翌る日に
 なると、お婆さんが町へ出
 かけるのを待つて、お團子
 をこしらへ始めました。今
 日、小猿が来たなら、このお

團子を御馳走してやらうと
 思つたのです。ところが、
 しきりと團子の粉をこねて
 居る最中に、生憎、お婆さ
 んが歸つて来ました。
 「しまつた。」と思つて、隠
 さうとしましたが、もう駄
 目でした。
 「あれ、お爺さん。何をし
 てるの。」
 「うわーッ。」
 「うわーぢやないよ。さあ、
 誰れにやらうと思つてこしらへたの？ さア、さア。」
 「あ痛い。さう引張つちや痛いや。きやッ、きやッ、
 さやッ。」
 「笑ひ事ぢやないよ。きやッ、きやッ、なんて、猿
 みたいに。」



「あ、その猿だ、猿だ／＼。
 きやッ、きやッ。」
 お爺さんは餘りお婆さん
 が厳しく問詰めるので、たう
 とう猿の事を白状してしま
 ひました。
 「それ、そんな事をするか
 ら家は何時でも、貧乏なん
 ですよ。それに幾ら親孝行
 だつて他人の家の物を盗む
 なんて、そんな／＼、間違
 つた話があるもんですか。」

「さうかね。」
 「兎に角、今度来たらヒドイ目に遭してやるから。」
 お婆さんはぶん／＼怒つて居ました。お爺さんは
 町へ使にやられました。
 お婆さんがお團子を作つて待つて居ますと、表で

トン、トンと戸を叩く音がしました。

「そら、来たな、はい、どなた？」お婆さんは立つて行く振りをして、戸の隙から覗いて居ると、成程小猿が一匹這入つて来て、お團子の皿を取るなり、チョコ／＼と逃げ出しました。お婆さんがどん／＼追ひかけて行くと、小猿は例の通り、洞穴の中へ這入つて行つたのです。

「よし、どうするか見て居れ。」お婆さんは、松葉を澤山、洞穴の口に集めて来て、火を點けました。煙はもう／＼と穴の中に流れて行きます。

お婆さんは到頭「ごほん、ごほん。」と咳をいたしました。小猿は驚いて穴を飛び出し、一目散に樫林の仲間の所へ走つて行つて、この事を云附けました。

「さア、大變！何百といふ森中の猿が、枝から枝へ、幹から幹へと飛び傳つて、洞穴の所へ加勢にやつて来たのです。そして、お婆さんの手を取り足を取り、樫の木の一歩頂上へ引張つて行つて、其處



へ藤蔓で、ぐる／＼巻きに縛り付けてしまひました。「うわー、助けて——」お婆さんは到頭、わんわんと泣き出しました。

さてお爺さんは、町から歸つて洞穴の所へ来て見ましたが、お婆さんの姿が見えません。すると、何處からか「お爺さんや／＼。」と云ふ聲がします。「オヤ、何處だらう。」と思つて、フト上を見ると、お婆さんが木の頂上に縛られておりました。

「おや、そんな所で何をしてゐるの。」
「何をしてるぢやないよ。早く助けてお呉れ。」
「いや、お婆さんの木のばりは始めて見たよ。きやツ、きやツ、きやツ。」

「笑ひ事ぢやない。早く下ろして。」
お婆さんはもう全く閉口してゐます。お爺さんはきやツきやツと笑ひながら、お婆さんを助け下ろして家へ歸りました。

さア、お婆さんの腹立ちは容易に治りません。いろ／＼と考へた揚句、今度は、いなりずしをこしらへて、その中に辛子をうんと詰め込みました。そして、皿に入れて裏口に出して置いたのです。あの猿が食べたなら、いゝ氣味だ、と思つたのでせう。

處が物事はなんだつて、さう旨くは行きません。此の裏山に住む意地の悪い狐が、フト家の前を通りかゝつて、いなりずしを見つけたのです。

「これは旨い物がある。」と思つて、一口あんぐりやりますと、中が辛子だつたからたまりません。

「あッ辛ッ。ベツ。辛ッ。ふ——辛い。」
狐さん、眞赤になつて怒りました。

「よーし、キツと仕返しをしてやるぞ。」
狐は齒噛みしながら何處かへ姿を隠しましたが暫くして、鶏の卵程の、白い卵を持つて来て、お皿の中に入れて置いたのです。

やがて、お婆さんが町から歸つて来て見ると、お

皿のいなりずしは無くなつて、その代りに卵が載つてゐます。

「ほうう。お猿さんの奴、御禮にこんな物を呉れたナ。いやこれは難有い！」と、ほく／＼喜んで、早速、お茶碗の中に、ほん、と割つてみました。

處が中から出て来た物は、どうでせう。一匹の小さな白蛇だつたのです！

「きやッ。」蛇嫌ひのお婆さんは、後へヒツくり反つて腰を抜かしてしまひました。其處へお爺さんが歸つて来ました。

「おい、お婆さん。どうしたのかい。又何かしくじつたネ。きやッ、きやッ、きやッ。」

お婆さんが、フトお爺さんの顔を見ると、驚いた事には何時の間にか右の片眼が無くなつてゐます。

「おや、お爺さん。右の眼をどうしたの？」

「うん、眼かい。眼はお猿さんにやつたのさ。」

「え？ 猿に？ まあどうして？」

「お猿の病氣には、人間の眼が一番いゝさうだからネ。」お婆さんは呆れてしまひました。

「まあ、なんと云ふ人だらうネ。お前さんは！ 大事の眼をやつてしまふなんて。……よし、これから行つて取り返して来るから。」と出かけようとした時、裏口から、例の親猿が、もうすつかり病氣が癒つたと見え、嬉しうに小猿の手を引いて、這入つて来ました。そして、二人の前に坐つて「有難うございました。」と云はんばかりに、何度も／＼御辭儀をして見せました。

其後、與平爺さんは人に薦められるまゝに、親子の猿を連れて都へ上り、猿芝居を始めました。その頃はまた、猿芝居が珍らしい時代でしたので、大評判になつて、お金を澤山儲ける事が出来たさうです。與平爺さんは相變らず「きやッ、きやッ」と笑ひながら、一生を愉快に送りました。(をばり)



ラム王の一生 [3]

武井 武雄

ラム王は、もう空を飛ばされることには馴れてゐました。ですから矢の様な早さで飛びながらも、下を向いて森や畑や牧場をながめたり、上を向いて大空をながめながら童謡をうたつたりしてゐました。處が、そのうちに早さがグ／＼増して来て、大風の中を行く様に呼吸が苦しくなつてきましたので、いよ／＼磁石に近づいて来たことがわかりました。この時ラム王が、ふと下を向くと山の様な大磁石

が音もなく静かに廻つてゐるのが見えました。その磁石には、軍艦や銅像や汽車や鎧や、それからいろいろの金物が一杯にへばりついてゐて又その上へその上へと重なり合つてくつついてゐますので、すばらしく大きな怪物の様な形に見えました。なかでも鐵のお金をどつさり背負つた男や、鐵の首飾をつけたおかみさんなどは、その持物が惜しいばかりにいつまでももがきながら、そこにぶら下つてゐる様で

ありました。

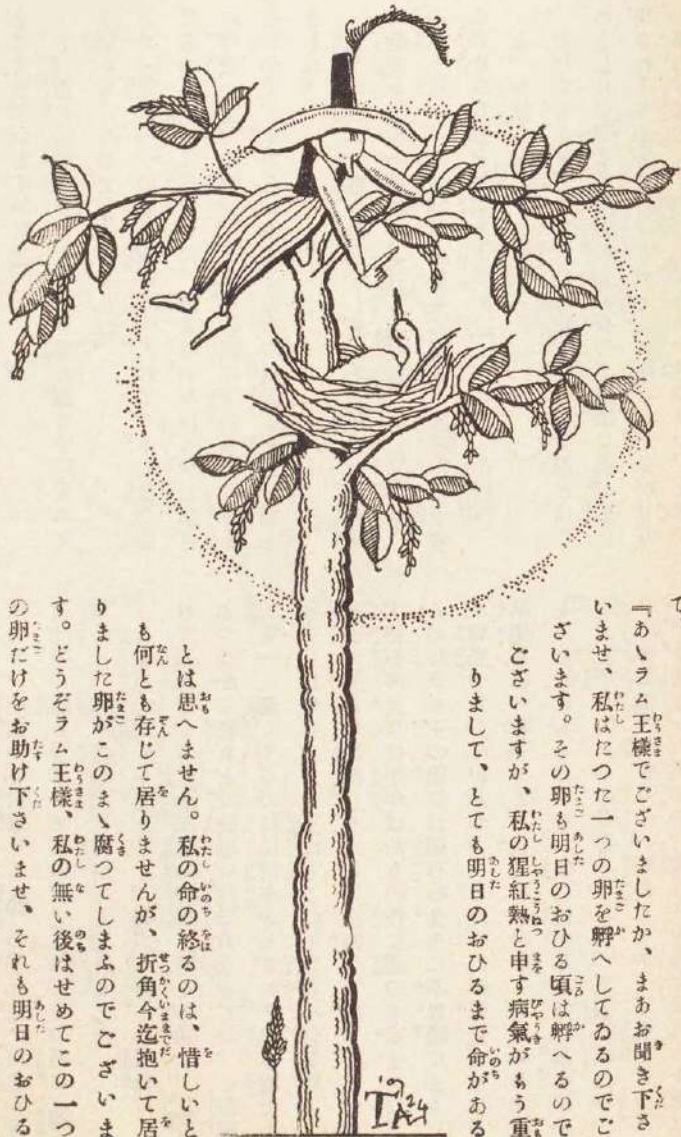
ラム王はいよいよ自分も危いと思ひましたので、すかさず帯の金具をはづしました。すると鋼鐵の劔はいきなりラム王の腰を離れて、ビーンといふ唸り聲と一緒に磁石の方向へ飛んでゆきましたが、間もなく遠くでカチンと小さい音を立て、くつついたのが見えました。ラム王は夕日の中にキラ／＼耀いてゐるこの大磁石を見返りながら、勢ひの止まるまで飛ばされてゐましたが、やがて大磁石から百五十里ばかり越えた林の中で、一段と背の高い樺の木にひつか／＼つてしまひました。ラム王は不思議にも怪我一つしませんでした。何しろ體を洗濯物の様に揉まれましたのでズキ／＼痛んでやりきれません。すぐに木からはひおりの元氣も無かつたので、枝にひつか／＼つたまゝうつら／＼と眠つてしまひました。

ラム王が眼をさますと、そこいらは只まつ暗で、

林中の木は葉はヒツソリと物凄程静まりかへつて、夜の深い眠りに落ちてゐました。この静けさの中で、只微かに耳にふれるものは、小川の流れの低い吐く音と、蝙蝠の群のかすかな羽ばたきの音だけでありました。けれどこのかすかな囁きの外に、ラム王はさつきから自分の居る枝のすぐ下に「キークキークキュー、キークキークキュー」と不思議な唸り聲を聞きつけてゐたのでありましたが、何しろ眞暗なのですから、何だらう何だらう、と思ひながらちつとしてゐました。

そのうちに遠くで鼻が鳴いて月が昇りました。ラム王は早速小枝をかきわけてすぐ下の枝を覗いて見ました。そこに大きな鳥の巢があつて、一羽の鶺鴒が青白い月の光を全身に浴びながら、その中で唸つてゐました。ラム王は何だか氣の毒になつて、

『お腹でも痛いのかい。』と訊ねてみました。鶺鴒はさびしさうな眼を向け



て、
『あゝラム王様でございましたか、まあお聞き下さいませ、私はたつた一つの卵を解へしてゐるのでございます。その卵も明日のおひる頃は解へるのでございますが、私の猩紅熱と申す病氣がもう重りまして、とても明日のおひるまで命がある

とは思へません。私の命の終るのは、惜しいとも何とも存じて居りませんが、折角今迄抱いて居りました卵がこのまゝ腐つてしまふのでございませう。どうぞラム王様、私の無い後はせめてこの一つの卵だけをお助け下さいませ、それも明日のおひる

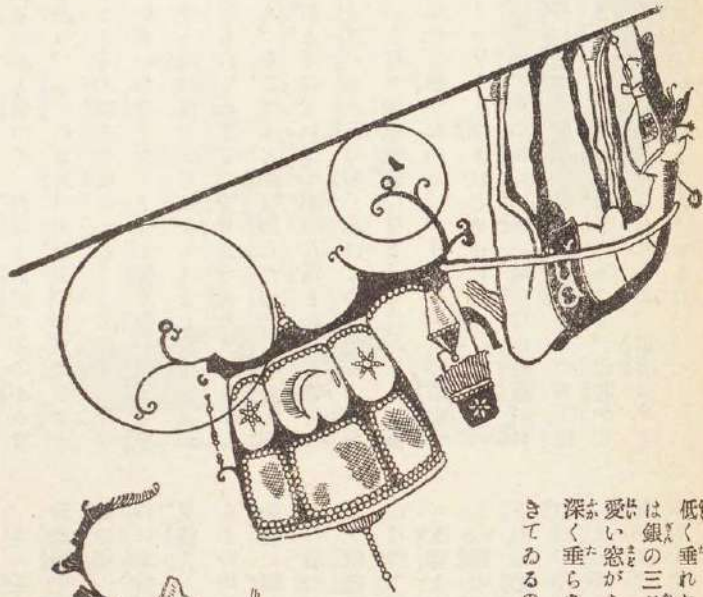
までとございますから。」

と、漸く云ひ終るともう唸り聲も出さず、そのま
ま動かなくなつてしまひました。

ラム王は一つの卵を敵の下へ入れて、木の枝の上
にちつと温めて居ました。翌る日のおひる少し過ぎ
に可愛い鶯の雛が、ラム王の腋の下から出て來ま
したので、木からおりてその木の根元に墓穴を掘り
ました。

鶯の親の死骸を埋めてしまふと、蜂には釣鐘草
の釣鐘を二十一敲かせ、自分は宵の星明に向つて、
『永く永く、この地球のあらん限り、樫の木の下の
この小さな墓をお護り下さい。』
と、お禱りをしました。

それからラム王は又日の沈む方をさして旅をはじ
めました。どうもあの大磁石の不思議な姿が思ひ
出されてなりません。きつとあの中には思ひがけな
い事件が深山にくつついてゐるに違ひない、と思つ



低く垂れたまゝちつとぶら下つてゐました。馬車に
は銀の三日月の紋が打つてあり、その紋の上には可
愛い窓があつて、翁草のぬひとりをして桃色の帳が
深く垂らされてありました。ラム王は、馬もまだ生
きてゐるのだから若しやこの中に生きてゐる人が居

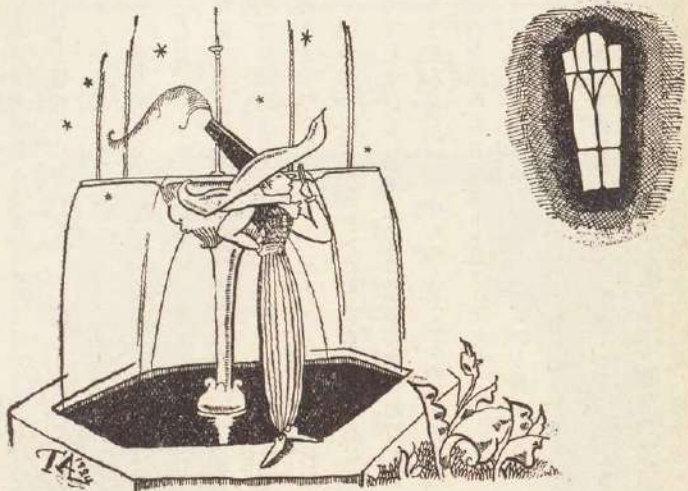
たので、中途から引返して鶯の子を抱いたまゝ、百
五十里の道を歩るいてまわりました。その間に鶯
の子は、もう親の様に育つてしまひました。

大磁石の近くへ來ますと、四方八方から吸付けら
れて飛んでくる大きな金物の風に唸る物音と、互に
ぶつつかる響きとで物凄く様でありました。この磁
石をひと廻りするのには何年かゝるかと思ふ程であ
りましたから、ラム王はそこに小さな小舎を建て、
磁石の先きの廻轉してくるのを待つて居りました。
大磁石の先きは半年ばかりの後に廻つて來ました。
この時ラム王の眼には磁石の先きに不思議にまぶし
い程光つたものがくつついてゐるのが見えました。
早速そばへ行つてよく見ると、ルビーやエメラルド
を一ばいにちらばめた本當に優美な小型の馬車が一
つぶら下つてゐるのでありました。二頭の馬は、こ
れも亦蹄鐵の爲に入つた蹄をしつかりと吸付けられ
て、身動き一つ出來ず、首はその轡を吸はれる爲に

るのではないかと思つて、自分も力限りその小さな
 玻璃窓を敲き、鷓にも外の處を突つて廻らせま
 した。するとその桃色の帳のぬひとりの蔭で、絹を
 擦る様なかすかな聲でシタ／＼と泣く音が聞えて來
 ました。ラム王は扉をあけにかゝりましたが金具が
 強く吸付けられてゐますので、とてもあきさうにも
 ありません。そこでふと思ひ出したのは、昔巨人國
 で川から引上げたといふ不思議な箱をあけた時のこ
 とであります。ラム王は暫く忘れてゐた變身の術を
 使つて、いきなり珊瑚轆轤になりました。そして金
 氣はあふないと思つたので、ダイヤモンドの錐をつ
 けて、ピー／＼と廻りはじめました。

ラム王は二頭の馬の蹄鐵をはがして、その一頭に
 お姫様を乗せ、一頭には自分と鷓とが乗つてお姫
 様の國へ向ひました。磁石を去るときラム王は、こ
 れにぶら下つてゐる澤山な人達に、早くその持物を
 見捨て、通れる様にと注告しました。けれどどうし
 たものかその中の一人の若い男だけは、いつまでも
 物凄いやつてラム王をにらめつけてゐました。お
 城へ着いた時、みんなが、この國の、今はすでに無
 い王様の一粒種の姫を救つたラム王を、氣狂ひの様
 になつて歓迎したことはいふまでもありません。ラ
 ム王はよく／＼王様に縁があると見えて、無理やり
 この國の王様にされてしまひました。お姫様はラム
 王のお妃になることを心から喜びました。お姫様の
 名は、ギニビヤといふのであります。

ラム王はある晩、宮殿の中の螢の間といふ部屋に
 眠つてゐました。夜の二時半頃、衛兵の隙をうか
 づつてこの螢の間のまはりをブラついてゐた一人の曲



者がありましたが、やがてそつと眼をあげて、ラ
 ム王の眠りを包んだ天蓋の下にしるびよりました。
 それから音のしない様に青白い劍を引抜いて、まさ
 にラム王の心臓の上に突き立て様としてゐます。ラ
 ム王は天使の様な顔をして、楽しい夢の音かと思は
 れる様な静かな呼吸の中に眠つてゐました。

恰度この時です。ラム王の寢臺の下で、けた／＼ま
 しい羽ばたきの音と一緒に、鷓の唄が聞えました。

憶病蟲のロンロンや、
 自分のかぢや王様に
 なれずに人を殺すのか、
 けもの様なロンロンや。

曲者はびつくりして一と足あとへさがりました。
 その拍子にラム王は眼をさました。曲者はすぐ
 につかまりましたが、このロンロンといふ男は、か
 つて磁石にぶら下つたまゝ睨めつけてゐたあの男で
 した。これはお姫様の別荘の番人の息子で、仕方の

金の星誌上演



どちらが偉い? (第三回)

沖野岩三郎

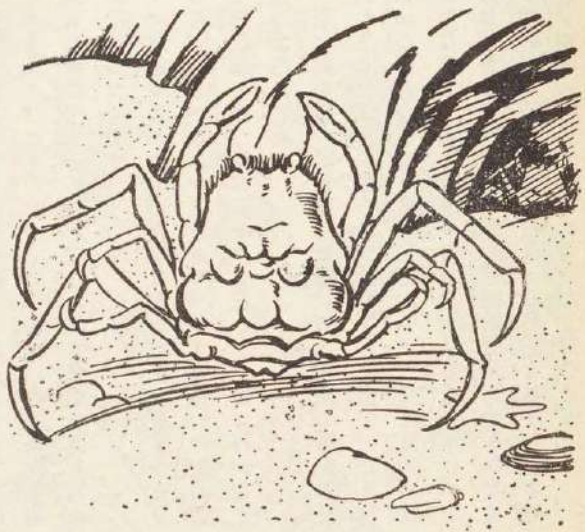
ないノクラ者であります。このノクラ者が、どうかしてお姫様を自分のものにし度いと思つて、馬車のあとから馬で追かけてくる内自分も磁石に吸付けられ、靴の拍車でやうやくにぶら下つてゐたのであります。ロンロンは死刑にされるところでありましたが、ラム王が命だけは助けてやれといふので、まづ大きな鐵砲玉を六つ吞ませられ、それから大磁石の近くまでつれて行くと、グリーンと唸つて吸付けられてゆきました。ロンロンはそのまゝ又磁石にぶら下つてしまひました。今度は拍車の機なわけにはまゐりません。胃の腑の中に吞んでゐるので、遂に磁石を離れる日はありませんでした。

ラム王はまた黒曜石の釣針の夢ばかり見ました。どうかしてこのお城を通れる方法はないかと思ひましたが、親切で優しいギニビヤの歎くのを思ふとさすがに云ひ出しかねて居ました。けれどある晩、いよ／＼心をきめて鶴に變身の術を授け、時々ラム王の姿になつてギニビヤを慰める様に、しみじみと云ひ聞かせてから、自分の身代りに鶴を御殿に残し、月の沈むのを待つてこつそり御殿を抜け出しました。

以上お話致しましたやうに、蟻にだつて蜜蜂にだつて、立派な道徳があります。人間以上の道徳があります。皆さんは毎日新聞で、どんな事をお読みになりますか。本當に悲しい淺ましい人間の行ひが書かれてゐるではありませんか。

人間の中でも、皆さんのやうな少年少女諸君は、實に美しい優しい事をお考へになつてゐられるが、三十四十になつた大人には、お話にならない詰らない人達が澤山々々あります。日本、政治を議する、あの神聖な帝國議會の有様を御覽なさい。四十五の年寄達は何をしてゐますか。まるでごろつきのやうな態度で罵り合つたり、掴み合つたりしてゐるではありませんか。

前年は傍聴人の中から議場へ蛇を投げ込んだ者がありました。今年は議員の中に、水塚を總理大臣に投げつけた人がありました。鐵道大臣の演説の原稿を引取つた人もありました。何といふ悲しい事です。



の蟹が必ず其の穴の戸口に居て、他の敵が襲つて來ると、直ぐ夫れを追つ拂ふといふ事が解つたので、

う。若し蟻や蜜蜂が此事を知つたなら、人間といふ奴、どこまで馬鹿な奴だらうと云つて、其の無秩序を笑ふに相違ありません。

進化論者として名高いダアウキンといふ學者の祖父さんに當る、エラスマス・ダアウキンといふ人は蟹に就いて研究しましたが、蟹には脱甲期といふのがあつて、あの堅い甲羅を其の時期には脱ぎ捨て、新しい甲羅にするのです。けれども新しい甲羅は、羅紗のやうに柔かです。それでエラスマス・ダアウキンは考へたのです。「あの蟹が甲羅を脱いで新しい甲羅を着てゐる時、敵に襲はれたら、直ぐ殺されて了ふ筈だが、全體どうして其の危険期を過すのだらう？」と思つてゐるうちに、面白い事を發見したのです。

蟹は甲羅を脱いで、柔かい甲羅になつた時、岩や石の穴に閉籠つて、甲羅の堅くなるまでは漫りに出歩かないでゐます。すると最う甲羅の堅くなつた他其事を發表しましたが、世間の學者は、あまり其事を信用しませんでした。所が其のエラスマス・ダアウキン博士が亡くなつた八十年の後、即ち千八百八十二年（今から四十二年前、明治十六年）にロシアの學者でクロボトキンといふ人が、ロンドンから五十マイル南にあるブライトン水族館を見に行つた時蟹の親切な動き振りを見て、始めてエラスマス・ダアウキンの説の偽でない事を確めたのでした。

其時の話は斯うなんです。クロボトキンといふ學者が、モルツク蟹といふ大きな蟹を飼つてある水桶の傍へ行くと、恰度一定の蟹が、桶の隅の方の鐵の棒の下へ、どうかした機みに仰向けに這り込んで了つて、どうしても起きる事が出来ないのです。すると底の方から二足の蟹がやつて來て、其の倒れてゐる哀れな蟹を助け起しにかゝつたのです。けれども倒れた蟹は、鐵の棒の下敷になつてゐるので、何度起されても、寝返る事が出来ないで、ばたり／＼と

元のまゝに倒れてしまひます。どうしても二疋の蟹の方では何とする事も出来ないといふので、一疋の蟹は又も二疋の蟹を誘つて来て、四疋がゝりて二時間あまりも、必死になつて其の仰向けになつた蟹の爲めに奮闘努力をしたが、なか／＼目的を達し得られなかつたのです。

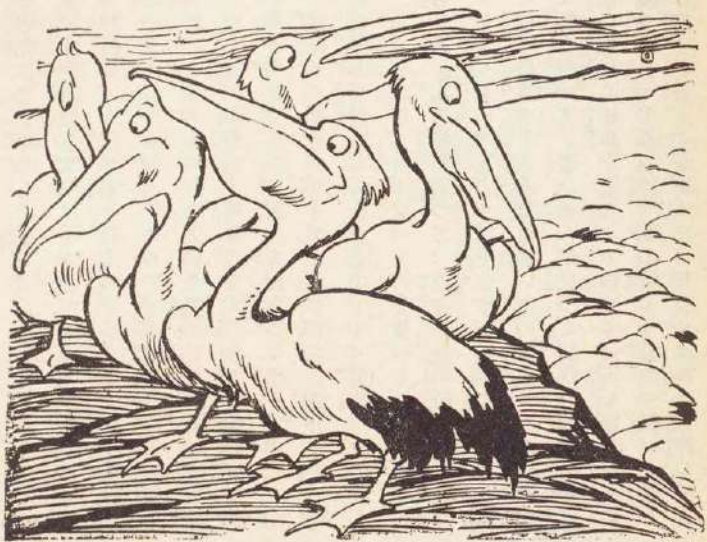
クロボトキンは其の親切な蟹の行動を見てゐるうちに、偶とエラスマス・デアウキンの言つた蟹の話の想ひ出して、其の話を信じないワケには行かなくなつたのでした。

私は此の蟹の話を読んだ時、直ぐ人間の事を思ひ出しました。あの恐ろしい恰好をした蟹が、そんな親切心をもつてゐるのかと思ふと、人間は萬物の靈長だなどと、獨りよがりな事を言ふ資格が無いのではないでせうか。蟹の國の帝國議會が開かれたならば人間の國の議會よりも、遙かに醇肅な秩序のある議會が開かれるのではなからうかと思ひます。



私は此の一月から二月へかけて、山陰から九州へ旅行をしました。そして山を越え川を渡る時、私は子供時代の事を、つく／＼想ひ出したのでした。私は子供の頃、前の川へ水泳に行つて、「鱒」といふ小魚の大群を見た事があります。何萬とも知れない一寸ばかりの小魚が、川底一面になつて、實に秩序井然として川を登つてゐるのを見ました。夫れには指揮者も大將も何にもありませんでした。けれども其の魚群は、瀬を越え瀧を登り、いろんな敵の攻撃に會ひながら、少しもひるまずに堂々と川を奥へ／＼と登つて行くのです。若し一尾だけ離れてゐると、鮭魚や鰻の餌食になるのですが、一間四方位は、眞黒い群になつて進んで行きますと、大きな川魚は皆な恐れて逃げて了ふのです。彼等には一致協力といふ力があります。人間に一番缺けてゐるのは、此の一致協力といふ事です。人間は三人寄れば、もう其所に争ひが起ります。百人よれば直ぐ其所につまら

ない喧嘩や威み合ひが起ります。本年一月の三十日に大阪の公會堂で日本の名高い人達の政談演説會がありました。そこへ集つた大人の人達の有様は、全體どんな事でしたか。演説を聞きに行つたのだから、騒ぎに行つたのだから解らないといふ有様ですが、わア／＼と喧しく騒ぎちらしたばかりか、椅子を踏碎いたり腰掛を滅茶々に押しやいだり、何といふ浅ましきでしたらう。私はあの大人の人達に、今日の日本の子供さん達の態度を見習へと言つてやりなかつたです。今の進歩した優しい日本の少年少女諸君には、學藝會の時校長さんに水壘を投げつけたり、先生のノートブックを引破いたりするやうな馬鹿者や、腰掛を何百となく踏碎くやうな亂暴者は一人だつてありませんでせう。だから今日の大人の人々の或者は、子供さんに學ぶべき點があると同時に、蟹や鱒にも頭を下げなければなりません。そんな亂暴な秩序の無い人間が、代議士だの政治家だのとい



らせるからです。一番名高いのは、ヨウロツバのル
クザンブウル公園の雀です。其所の雀は公園を自分
の國家として、何千の雀が仲よく其所で國民のやう
に協力一致して暮してゐるのです。鳥は鳥同志決し
て喧嘩を致しません。秋の味は山柿が赤く實ると何
百の鳥が集つて来て楽しく夫れを食べます。鷹は鷹
同志、鷹は鷹同志、皆な仲よくして暮してゐるので
す。

日本の諺に「怒の熊鷹股から割ける」といふ言葉
があります。夫れは或所に大きな猪が二疋寝てゐた
のを見た熊鷹といふ大きな鷹が、其の一疋だけを捕
らうとすればよいのに、一度に二疋を捕らうといふ
慾な心を起して、寝てゐる二疋の猪の頭へ、同時に
兩足の爪を打ち込んだのです。すると頭へ爪を打込
まれた猪は吃驚して、兩方へ駆け出したので、鷹の
足は兩方へ引張られて、身體が二つに割けて死んだ
といふのです。けれども夫れは、鷹といふ鳥の性質

つてゐては此國の行末が案じられてなりません。
飛んだ所へ私の話は脱線しました。で、元へ立戻
つて、鳥と人間との比較をして、どちらが偉いかと
いふ事を研究してみませう。

人間は蟻や蜂や蟹や鮓よりも、不徳義であつて、
團結心が足りなくつて、亂暴だと相場が決つたやう
だが、更に進んで人間と鳥の事を比較してみます
と、斯んな事も發見されるのです。

南アメリカに、ペリカン鳥といふ變な恰好をした
鳥が居ます。それは四萬五萬といふ大群で海岸に押
寄せて來ますが、半分が砂の上で、眠つてゐる間は
他の半分が、獵夫が來はしないか、悪い獸が襲つて
來はしないかと、嚴重に警戒してゐるのです。そし
て半分が眼を覺すと、今度は他の半分が代つて眠る
のです。双方が眼を覺すと、今度は伴れ立つて魚を
捕りに出かけます。どうして魚を取るかといふに、
五萬のペリカン鳥の群であると、夫れが二萬五千づ

つに別れて、半分は海の沖合から、半圓形になつて
水面迄く、ばた／＼と羽ばたきをします。すると海
の中の魚は網が引かれたとでも思ふのでせう。皆な
浮き上つて來て、岸の方へ一生懸命に逃げます。――
河の魚は網を投げると、底へ／＼沈んで、網の錘の
下を潜つて逃げます。海の魚は河魚と反對に、網が
おりると、水面の方へ浮上つて來ます。――すると濱
の方に居る半分の二萬五千のペリカンは、同じく半
圓形を造つて、海の方へ進んで行きます。そして二
つの半圓形が一つの圓形になつた時、彼等は一致し
て其中に包まれた魚を捕るのです。此の漁業が終る
と、もう圓形を解いて、ばら／＼になつて、濱で眠
つたり、遊んだりするのです。

ペリカン鳥ばかりではなく、皆さんが田や畑に群
がつてゐる雀を御覽なさい。彼等何十何百といつも
群をなしてゐます。夫れは何故であるかといふに、
雀は食料を見つけると、直ぐ自分の友達に夫れを知

を研究しない昔の人の話で、シイズエルツォフといふ學者の研究した所によりますと、ロシアの野に居る白鷹は、十羽が空を飛ぶ時、少くとも二十五哩四方を見下し乍ら飛んでゐるので、其の二十五哩四方の間に、食べものがあるのを見つけたら、其の見つけた鷹が一聲高く叫ぶのです。すると他の鷹は其の聲を聞きつけて、聲の方に集つて來ます。

或時シイズエルツォフは、さうして鷹が一疋の馬の屍骸を見つけたのを見たのです。其時、鷹のうち一番老年者が、先づ食べものを食べる。其間は年の若い鷹は木の枝に宿つて、獵夫や他の敵が來はしないかと、ちやアんと歩哨を張つてゐるのです。年寄が腹一杯食べると今度は若いものが代つて、御馳走に預るのです。若いものが代つて食べる間、年寄は高い所から張番をしてゐるのです。若い鷹が其の御馳走を食べてゐる時、樹の枝から鳥の一群が、頻りに何とかかんとか言つて、其の食べ振を批評してゐ

たといふ事です。

私は此の話を書物で讀んだ時、直ぐ鷹と人間の性質を比較して考へました。假令ば木曾の山奥に金鏡があるらしいといふ評判が立つと假定します。二十五哩四方の地域を十人の人が夫れを尋ねに行つたとしたなら、人間はどんな態度を取るでせう。其の十人の一人が、金鏡のある所を見つけた時、直ぐに「見付けたぞ。金山のある所を見つけたぞ。早く入らッしやい。」と云つて、他の九人を呼び集めるでせうか。私はさう思はない。人間であるなら、先づ其の山へ入つて行く時、もう十人は十種の考へて入つて行きます。そして吾こそ一番先に夫れを見つけて、自分一人、大金持にならう、成金にならうと考へるに決つてゐます。そして其のうち一人が若しも金鏡のある所を見付けたら、夫れを他の九人に見付からないやうに隠して置いて、自分一人が役所へかけつけて、其の金山の試験願を出し、許可を取

つて、自分の所有權にするに決つてゐます。そして其の人は何百萬圓の金持になつても、あとの九人に



は一萬圓も一千圓も、百圓も分けてあげようといふばかりか却つて其の人達を馬鹿扱ひにするかも知れません。私は人間といふものは、夫れ程利己主義なものだと思ひます。人間の方が、餘程鷹よりも慾深いではないでせうか。二三年前に、東京の町の真中で、どんな土でも石でも、皆な金に變化させられる法を發明したと言ひふらした人がありました。そして新聞記者を集めて、夫れを實驗して見せましたが、一人の記者に、うまく其の手品の種を見付け

れた事がありました。其の詐偽師は、土でも石でも直ぐ金に變じるといふ事を言ひふらして其の事を新

聞に書いて貰つて、其の方法を書いた書物を賣つて一儲けしようといふ企んだのでした。土や石が容易に金に變る位なら、人間がこんな貧乏をする筈もなく、又そんなに容易に金貨が何所からでも出る程なら、金といふものの相場が忽ちに安くなつて了ふ筈です。そんな事をしようといふと企らむ悪者が出るといふのも、つまり人間が皆な慾心が深いからです。

今から十五六年前に、私の知つてゐるお役人様が新聞の廣告を見て一冊の書物を買つたのを見ました其のお役人様は随分賢いえらい人でしたが、或時新聞を讀んでゐますと、其の廣告に「一時にお金持になる法。闇の夜を明るく歩く法」天へ登る法。地獄を見る法。何にも聞かず讀まず考へないで笑ふ法……」といふやうな奇抜な事がありました。お役人様は夫れを讀むと直ぐ、何圓かのお金を爲替にして書物屋へ送ると、五六日すると、薄ッぺらな鼻紙のやうな書物が配達されました。讀んでみると、

一時にお金持にならうと思ふ人は、金満家から百萬圓程貰ふがよい。
闇夜を明るく歩かうとする人は提灯を燈すがよい。
天へ登りたい人は五間四方の紙鳶を飛ばして夫れに釣つてゐれば直ぐ天まで行かれる。
地獄を見たい人は、悪い事をして死ぬがよい。
可笑しい話も聞かず、面白い書物も讀まず、奇抜

な事も考へずに笑ひたい人は、他人に腋の下をくすぐつて貰ふがよい。
といふやうな事が書いてありました。夫れは、人間といふものが、慾の深いものだといふ事を知つてゐる人が、其の慾深につけ込んで、其人を欺すのであります。

歐洲戦争の済んだ後で、日本では八時間労働といふ事が喧しく言はれました。けれども吾々人間よりも、すつと前から八時間労働といふ位では満足せず、僅か三時間労働で、規則正しく生きて來たものがあります。夫れは御承知の鶴であります。

鶴といふ鳥は一羽の鳥が、僅かに二つの卵しか産まない。夫れでも鶴は段々殖えて行きます。鶴は協同一致の心に富んでゐます。彼等の群つてゐる所を獵夫が襲ふと、皆な飛び立つて了ひますが聽て元の場所へ歸つて來る時、先づ斥候兵を出して危險の有無を調べさせ、尙ほ第二斥候兵を出していよいよ

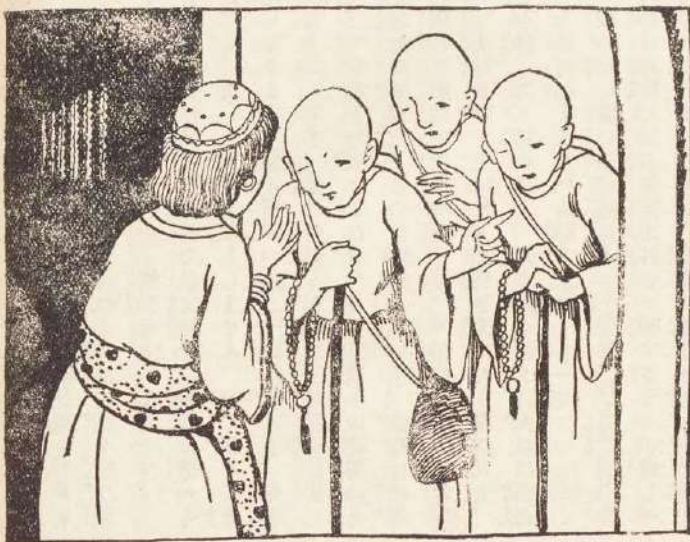
安全だといふ事を確めなければ、歸つて來ません。

鶴はそんなに用心深い、決して疑ひ深くありません。人間は用心深いと云はれる人は、往々疑ひ深いか、嫉み深いかいふ缺點をもつてゐます。けれども鶴は非常に上品で社交的で、人間に捕へられても、決して人間を敵としません。直ぐ馴れて友達になります。他の種々の鳥と一緒に居ても、親密に暮らすさうです。鶴は朝夙く起きて三時間程労働して、ちやんとお腹をこしらへると、残りの時間は全部運動時間に充てるのだといふ事です。夫れは彼等の獨特な遊戯で木片や石ころを空中に投げ上げたり、夫れを嘴で受けたり、羽を擴げたり踵つたり、首を伸したり縮めたり、走り廻つたり、夫れは面白さうに運動するといふ話です。

鶴の次に賢いのは、鳥人とも言はれる鸚鵡で、此の鳥は非常に交友同志仲よく暮らすさうで、若し一羽の友達が死んだなら、多勢の仲間が屍の上を飛び

廻つて、本當に悲しげに鳴くさうです。プレナムといふ鳥の研究者の調べた所によると、鶴と鸚鵡とは、人間以外の敵に殺される事は殆どないさうです。夫

れは彼等が賢い用心深い鳥であるばかりでなく、互ひに仲よくして協同一致して保護し合ふからです。「火を見れば火事と思へ、人を見れば盗人と思へ」といふのは、人間の言葉であります。人間は夫れだけ御互ひに、疑ひ合ひ恐れ合つてゐます。「男子圖を跨ぐれば七人の敵あり」とは支那の古人も言はれてあります。男は家の敷居を跨いで出れば、もう七人の敵があると思つて、用心しろといふのです。人間は人間仲間をこんなに敵に思つてゐますが、蟹でも鷹でも鶴でもベリカン鳥でも、雀でも鸚鵡でも、皆な仲間同志は美ましい程仲がいいのです。然るに互ひ人間同志は何といふ亂暴な喧嘩好きな事です。「あいつは禽獸のやうな奴だ。」なんて言葉を吐く資格が果して吾々にあるでせうか。(つとく)



猿にたつた王子の子の話

中 島 孤 島

(一)

むかしアラビヤ王朝の首都バグダッドに三人の婦人が住んでをりました。この三人は姉妹でしたが、三人とも獨身でしたから、廣い立派な邸に女ばかりで暮してをりました。ある晩のことでした。三人の姉妹は恰度夕飯をすまして、なにか楽しく語りあつてゐると、門の外でだれか戸をたたく音がするので、一番末の妹が立つて行つて見ると、門の外には、三人の旅僧が立つてをりました。

『わたくしどもは今晚このバグダッドへ着きましたが、はじめての土地ではあり、日が暮れてしまつて、泊

るところが見つかりませんので、かうしてお門をたきました。どうぞお慈悲に、一晩だけ泊めて下さい。雨露さへしのげは厩の隅でも差支へありません』

三人の僧はかういつてたのみました。

『まあ、待つて下さい、きいてまゐりますから。』かういつて、取次に出た妹は元の部屋へもどつて來ました。そして二人の姉に相談して見ると、『坊さんならとめてあげても差支はなからう』といふことになつたのでもう一度出て行つて、三人の旅僧を案内しました。

この家の主人である一番上の姉が、今はひつて來た三人の旅僧の様子を見ると、三人が三人とも、若い、きれいな人で、同じやうに頭も髷も眉毛もきれいに剃つて、同じやうな僧衣を着てゐるばかりでなく、不思議なことには、三人が三人とも、右の目がつぶれてゐるのです。女主人はあんまり不思議なので思はず身をのり出してかうたづねました。

『あなた方三人はご兄弟でいらつしやいますか？』

『いえ、奥さま。』との中の一人が答へました。

兄弟でもなんでもないので。わたくしはたゞ同じ宗派の托鉢僧だといふだけなのです。』

『ぢやあ、あなたは生れた時から右の目がなかつたのですか？』

と女主人が重ねてききました。

『いえ、奥さま。』と同じ僧が答へました。『わたくしどもはめい／＼に不思議な運命にあつて、偶然にも同じやうに片目をなくして、そして同じ宗派の托鉢になつて、この都をさしてまゐりましたのです。』

『不思議な運命で片目をなくしたとおつしやるのはそれはどういふわけでございます。』

女主人はききたくてたまらないやうにかうたづねました。

『はい、それをお話いたしますには、三人三様の身の上話をいたさなければなりません。しかし今晚

宿を貸していただきましたお禮に、かいつまんでわたくしどもの身の上をお話しいたしませう。それではまづわたくしの經歷をきいていただきませう。」かういつて、旅僧は次の物語をはじめました。



「奥様わたくしはある王の子に生れましたが、父の王は幼い時分からわたくしの質のよささうなのを見込んで、教育に力を入れてくれました。で、やつと読み書きが出来るやうになるとわたくしはもう聖經を、はじめからしまひまですつかり暗記してしまひました。それからわれ／＼の宗教に關係したものはじめとして、自國の歴史も調べれば、美文學や詩歌や作詩語をも習ひ、天文學や地理學やを學びました。それと同時に、王といふ身分に必要なさまざまな訓練をもゆるがせにしませんでした。併しこれらの學藝のうちでもわたくしの一番好きで、そして一番手にはひつたのは、書法でした。書法にかけてはわたくしは國中のどんな書家にむかつてもひけはとらなかつたのです。わたくしの評判は、實際以上に高くなつて、父の

(二)



領地のうちはばかりでなく、遠い國々までも、わたくしの虚名がひろがつてゆきました。そのうちに印度のある有力な王が、わたくしの評判をきいて、是非あひたいといふので、わざ／＼使節を送つて、大國

の王にふさはしい立派な贈物をとどけ、同時にわたくしを招待したいと申込んで來ました。父はいろいろの理由から、喜んでこの申込みを受け容れました。一つには、わたくしぐらゐな年頃の王子にとつては、遠い旅をして、外國の宮廷を訪問するといふことが、何よりの修養になると考へたのでせうし、又一つにはかういふ大國の王と交際を結びたいといふ考もあつたでせう。

そこで父は六艘の船を用意してくれて、先方の使節と一しよにわたくしを出立させました。けれども長い道中ではあり、仲々難儀な旅ですから、供まはりはおく僅かの人數にとどめました。

滿一ヶ月の間は海の上を行きましたが、それから船を棄てて陸へあがり、船へせて來た幾頭かの馬に跨り、印度王への贈物を負はせた十頭の駱駝を曳いていよ／＼陸上の旅をはじめました。

しかしかうして新しい旅にかゝると間もなくある

日のこと、前方に當つて、一塊の砂煙があらはれ、それが見る間にひろがつて、だん／＼とこちらへ近づいて来ると思ふうちに、その中から五六十人の荒武者が、馬をならべて殺到して来ました。わたくしは一目見て、それは怖ろしいアラビヤ馬賊の一隊だといふことをさとりました。

賊はこちらが僅かの人數で、しかも印度王への贈物を積んだ十頭の駱駝を曳いてゐるのを見ると、馬に一鞭くれながら、手に手に槍をしごいてわれ／＼の方へ駆けよりました。

わたくしはこの場合抵抗しても無駄だと思ひましたから、指をさしあげて、合圖をして、かういひました。

「われ／＼は音に聞えた印度王の使節の一行だぞ！無禮をするな。」

わたくしの考では、かういつたらどんな亂暴な奴らでも、印度王の使節といふ役目に對して、うつ

をとられてゐると見えて、追つかけて来る様子もないので、ほつと安心しました。

わたくしはかうして手傷を負つた上に、見すばらしい姿になつて、ひとりぼつちで、見ず知らずの國へひとり残されました。まるで方角もわからないくらいでしたがそれでもまた賊の手に落ちては大變だと思つたので、わざと街道の方へは戻りませんでした。幸ひに傷もさう深くはなかつたので自分で細帯をして、とぼとぼと山路を辿つて行くと、その日の暮方にとある山の麓へ着きました。恰度そこに一つの洞窟があつたので、中へはひつて、途々積み集めて来た果實で腹をこしらへ、一夜を無事に過しました。

夜が明けると、また旅をつづけて、それから幾日かの間は雨露を渡ぐ場所も見當らないやうな苦しい思ひをして、一月ばかりの後に、やう／＼一つの大きな都會へ着きました。そこは人口も多く、場所も

かり手出しはしないだらうと思つたのでした。けれどもわたくしの豫想ははずれて、馬賊らは無禮にも鼻で笑ひながら、かう答へました。

「印度王が何だ？ おれたちはそんなものゝ家來でもなければ、人民でもないんだ。」

かういひながら、もうわれ／＼を取圍んで、打ちかゝつて来ました。

見るうちに、四五人の若者はその場へ斬り倒され

その他のものは、もうちり／＼に逃げ出しました。わたくしは力限り戦つたが、とう／＼手傷を負つてしまふし、印度の使節も從者たちも、一しよに斬り倒されたのを見て、馬に鞭を當て、逃げ出しました。馬も數ヶ所の傷を負つてをりましたが、それでも全速力を出して走りましました。けれども少しゆくと疲勞と出血のために、馬はとう／＼倒れてしんでしまひました。わたくしは別に怪我もなく、馬からとびおりて、うしろをふりかへつて見ると、賊は獲物に氣

い、上に、河流が縦横に流れて、美しい花が到る所に咲き満ちてをりました。

恰度寒い冬が過ぎて、再び美しい春にめぐりあつたやうに、この氣持のいい光景を目前に眺めて、わたくしはしばらくこれまでの辛い苦しい旅の記憶を忘れてをりました。けれども氣がついて、自分の姿を見ると、顔も手足も眞黒に日に焼けたばかりか、長の旅路で、靴をはき切らして、素足になつてゐるし、着物も着きさらして、ぼろ／＼になつてをるのでした。

(三)

わたくしはとにかく、こゝはどこなのか、たづねて見ようと思つて、町へはひつて行きました。そしてある仕立屋の店をのぞいて、そこで仕事をしていた主人に言葉をかけました。仕立屋はわたくしの様子を見て外装よりも以上に見てくれたらしく、丁寧

に挨拶をかはしてわたくしを上へあげ、そしてどういふ人で、どこからなにをしに來たのか、とたづねました。

わたくしはこれまでの一伍一仕を包まず話して、自分の身分をも打明けました。仕立屋はだまつてきいてゐましたが、わたくしの話がすむと、心配さうな顔をして、かういひました。

「只今のお話は、決してだれにもおつしやつてはいけませんよ。この國の王はあなたのお父さまとは大變な仇敵ですから、もしあなたがこの町においでになることが耳へでもはひらうものなら、何をするかわかりませんかからね。」

わたくしは仕立屋から王の名を聞いて、本當に仕立屋のいふ通りだ、と思ひました。そこでわたくしは仕立屋の親切な忠告を感謝しました。

「きつとあなたのいふ通りに致しませう。あなたの御恩はいつまでも忘れません。」



「さういふものはこの國では通用しませんよ。」と仕立屋は困つたやうにいひました。「科學だの書法だの

仕立屋はわたくしの饑じさうな様子を察して、食事を命じてくれたので、わたくしは仕立屋と一しよに食事をして、日の暮れるまで、いろ／＼な話をしてをりました。それから仕立屋は、お泊りなさいといつて、店つゞきの部屋へねかしてくれました。こゝに三日ばかり逗留してゐるうちに、旅の疲れもすつかりなほりました。

さてマホメットの教を奉ずる國では、たとへ王族であつても、零落れた時の用意に、なにかの藝か職かをならつておくのがきまりになつて居りますが、仕立屋もそれを知つてゐるので、ある日わたくしに向つて、かういひました。

「あなたは何か人の厄介にならないでも食べてゆけるだけの仕事が出来ますか？」

「さうですね」とわたくしは答へました。「わたくしは法律や科學のことならよく知つて居りますし、文法や詩も出来ませんが、しかしそのうちにも得意なの

ちやアお金になりませんかからね。」
「さうですか、だが、わたくしは今言つたよりほかには何も知らないんですから。」

「ちやあかうなさい。」と仕立屋がいひました。「帯をきりつとしまして、斧と繩とをもつて、村へ出かけて行つて、薪を伐つていらつしやい。あなたは力もありさうだし、體格もいゝから、さうして町へもつて來て賣れば、大丈夫人の厄介にならなくても暮しだけのことはきつと出来ますよ。さうしてゐるうちには神様があなたの悲みを消して下さるでせう、ね、さうなさい。斧と繩はわたしが差上げますよ。だがあなたの素性はだれにも話さないやうになさい。話したらとんだ目にあひますから。」

すゝめるにも事をかいて、あんまり下等な、骨の折れる仕事をすゝめるものだとは思つたが、それでも素性をかくすためと、暮しだけのものをかせぐにはほかに何とも仕方がなかつたので、わたくしは仕

立屋のすゝめに従ひました。

するとその翌日、仕立屋は斧と縄と短い仕事着をくれて、同じ仕事をして暮してゐる貧民の仲間にくわたくしを紹介してくれたので、その仲間へはひつて一しよに林に出かけ、伐つただけの木を頭へのせて町へ運んで來ましたが、初めの日からもうこの國の金で半圓だけのかせぎになりました。全體、この林は町からはさうはなれてゐないのですがいかにも木が



二二九
すくない上に、町の人には面倒がつて、自分で伐りにゆかなかつたのです。で、わたくしはちよいとの間に、かなりのお金をまうけて、仕立屋から借りた分もみんなかへしてしまひました。

(四)

一年ばかりかうして暮してをりました。ある日、いつもの通り薪を伐らうと思つて、林の奥へはひつて行くと、こんもりと木の茂つたところへ出たので、その中へはひつて、一本の木の根元を掘つて、土を拂はうとしてみると、斧の刃がカチリと何かに當つたので、よく見ると、それは鐵の環で、その下にある鐵の揚蓋にすつかりとついてゐるのでした。そこで土をかきのけて、蓋を起こして見ると、その下に階段のおり口が見えたのでわたくしは斧をさげて、おりてゆきました。



一つの宮殿になつてをりました。その内部には、大きな燈火がともつてゐて、地上で青空の下に立つてゐるのとすこしもかはりはありません。わたくしはまづこれに度膽を抜かれながらも、廊下傳ひに進んでゆくと、その兩側には青い石の柱が並び、その柱の脚と頭には、厚い金が被せられてありました。

かうして進んで行くうちに、忽ち一人の婦人の姿が見えたので、わたくしは思はず足をとめました。その時わたくしの方へ歩いて來たその婦人のしとやかな、氣高い様子に、輝くやうな美しさに、わたくしはぼうつとしてしばらくはなにもかも忘れて立つてをりました。

ちき到我にかへると、わたくしはその婦人に足をこばせないやうに、こちらから進んで、婦人の前へ丁寧に頭をさげました。

婦人はわたくしをじつと見て、かうたづねました。

「あなたは何です……人間ですか、魔ですか？」

「人間です、奥様。」とわたくしは答へました。「魔ではありません。」

「ちやあ、どうしてこゝへいらしたの？」と云つて婦人は深い溜息をつきました。「わたくしはこゝへ來て二十五年になりますが、その間、人間にあつたのはあなたがはじめてでございます。」

かうたづねられたので、わたくしは王子と生れた身が、こんな姿になつて、こゝへ立つやうになつた一任一任を細かに話しました。

「かうしてはからずこの地下の牢獄の入口を見つけて、こゝであなたにお目にかゝるといふのは、全く神さまのお引合せにちがひないと思ひます。」

かういつたわたくしの顔を見て、またもや深い溜息をつきながら婦人はかう話し出しました。

「あゝ、王子様、この立派な宮殿は、わたくしにとつては、全く牢屋にちがひありません。わたくしの素性を申上げませうならば、印度の國境に近く、黒檀の産地として名高い黒檀島のございますことは、あなたもごぞんじでせうが、わたくしはその島の王女でございます。父の王はわたくしのために、従兄にあたるある王子を夫に選んでくれました。すると婚禮の晩に、魔があらはれてわたくしをさらつてゆきました。その時はびつくりして氣を失つてをりました。

「ただけのおもてなしは出来やうかと存じます。」
わたくしはこんなうまい話はないと思ひましたので、すぐにその言葉に従ひました。すると王女はわたくしの手をとりながら、アーチ形になつた扉をあけて、小さな浴室へ案内してくれました。そこでわたくしは着物をぬぎましたが、入浴をすすると、わたくしの着物の代りに、一かさねの立派な衣服が置いてありましたので、それに着かへました。

それから立派な織物で張つて、印度錦の蒲團を敷いた長椅子の上へ、わたくしは王女と並んですわりました。そのうちに王女はいゝ香ひのする飲料をもつて来て、わたくしに渡し、それからテーブルの上へいろ／＼な珍しい御馳走をならべて、一しよに食事しながら、長い間いろ／＼な話をしてをりました。が、しまひにかういひました。
「すこしお寝みになつたらいいでせう、大分疲れていらつしやるやうですから。」

だが、正氣にかへつて見ると、こゝへつれられて来てをりました。わたくしは永い間泣きとほしてをりました。が、それも時と必要にだまされてだん／＼と魔をそばへ寄せるやうになりました。で、先刻申上げました通り、こゝへまゐつてからもう二十五年にもなりませんが、こゝには食べる物でも、飲む物でも、使ひ道具でも、何一つ事を缺くやうなことはありませんし、又わたくしのほしいと思ふものは、衣類にしる、裝飾品にしる、少しも不自由はいたしません。魔は十日目毎にこゝへ参りますが、一日より上はをりません。けれども夜でも晝でも、用のある時にはわたくしの部屋の入口の扉に書いてある二行の文字に手を觸れさへすれば、すぐに現れて來るのです。今日は魔がまゐつてから恰度四日になりますから、この次來るまでには、まだ六日ございます。ですから、よろしければ今日から五日の間はこゝにゐらして下さい。さうすればあなたの御身分にふさはし

わたくしはいはれるまゝに一眠りして、いゝ心持にこれまでの苦勞をすっかり忘れてしまひました。目をさまして見ると、王女はそばへすわつてわたくしの足をさすつてをりました。われ／＼はまた長椅子の上へ起きなはつてしばらくの間、話してをりました。その時王女はしみ／＼とわたくしに向つてかういひました。

「この二十五年の間、話相手もなくてひとりぎりでこゝにをりましたのですからどんなに淋しかつたでせう。かうしてあなたをよこして下さつたのは、全く神さまのお慈悲だと思ひますわ！」
かういはれた時には、わたくしはもう涙がこぼれるくらゐ嬉しくなつて、胸のうちにたまつてゐた悲しみも一時に消えてしまひました。わたくしの胸にはもう王女のことより他には何もありませんでした。どんなことをしても、この王女をこの牢獄から救出さなければならぬと思ひました。

その翌日、夜が明けると、王女はまたさまたまな
珍味をならべ、上等な葡萄酒をぬいて、わたくしに
もすゝめ、自分でも一杯のみました。その葡萄酒の
味といつたら、わたくしは生れてからまだこんなう
まい酒をのんだことはありませんでした。わたく
しはもうすっかり酔つぱらつてしまつて、前後の
考もなく、王女に向つて、かういひました。

『王女様、あなたはもうこんな墓の中においでにな
ることはありません。さあわたくしと一しよにこゝ
を出て、美しい日の光の見られるところに行きませ
う。』

けれども王女はたゞ笑つて、かう答へました。

『王子様、そんなことをおつしやつてはいけません。
わたくしはもう美しい日の光も何も見たいとは思ひ
ません。』



それでもわたくしは、王女のいふことなんぞ耳へ
も入れずに、かう言ひ張りました。

『あなたは魔がこはいで、そんなことをおつしや
るのでせうが、わたくしは何とも思つてはをりませ
ん。うそなら呪文をかいてあるあの扉をぶち壊して
お目にかかせうか？ わたくしは魔を殺すべき運
命をもつて生れて来たのです。その魔を手はじめに
して、魔の眷族をのこらず退治することを、あなた
の前で誓ひます。』

酒の勢ひで、かういふ無法なことをいつて威張る
ので、王女はそんなことをされては大變だと思つて
たのむやうにして、わたくしをとめました。

『それこそ二人の身の破滅です。魔の力はわたくし
の方がよく存じてをります。』

けれども酒の氣がどこまでも手傳つてゐるのでわ
たくしはかういはれるといよゝ意地になつて、い
きなり足をあげて、呪文の記してある扉を蹴とばし

ました。

わたくしの足が呪文に觸れたか觸れないうちに、宮殿は倒れるばかりに震動して、雷のやうな怖ろしい響と共に、電光のやうな光が開を裂きました。

この怖ろしい光景を見ると、酒の酔もたちまちさめて、わたくしははじめて自分のしたことに気がつきましたが、もうとりかへしがつきませんでした。

「王女様」と、わたくしは聲をふるはして、呼びました。「どうなるのでせう？」

「魔が来たのです。」と王女はきつとした聲で答へました。「だから言はないことではありません。あなたはどうしたことをして下さいました。」

「王女様」とわたくしは、がた／＼と體をふるはしながらいひました。「どうしたらいいでせう？」

それをきくと、王女は自分のことを考へてゐる暇もないやうに、かう呼びました。「早くお逃げなさい。いそがないと命はあり

ません。」

わたくしはすぐに王女の言葉に従ひました。けれども怖ろしさに氣が轉倒してゐたので、杵と斧をおいたまゝ逃げ出しました。そして入口の階段へ足を踏みかけてから、はじめて氣がついて、うしろをふりかへつたのでした。

恰度その時でした。宮殿の床が二つに裂けて、怖ろしい姿をした魔があらはれ、王女に向つて、破鏡のやうな聲でかうたづねました。

「なにが出来たのだ、あんなにけた／＼しくおれを呼んだのは？」

「いゝえ、なんでもないのです。」と王女は、何氣なく答へました。「たゞあんまり氣が／＼まるものですが氣が暗れるやうに、お酒をほつちりいたゞいたのですが、立たうと思つたら、足がふら／＼して、扉の方へよろけて、ぶつかつちまつたのです。」

りましたが、すぐにわたくしのおき忘れた杵と斧を見つけて、怖ろしい聲でなりました。

「この嘘つきめ！あの杵と斧はどうしたんだ？だれがこゝへ来たんだ？」

「まあ、どうしたんでせう？」と王女はしらをきつて、驚いたやうにいひました。

「そんな物は今までなかつたんでございますよ！これはきつとあなたがあんまり急いでおいでになつたので、どこかでうっかりつかんでいらしたんですよ。」

「だまれ！そんなことが言譯になると思ふか？この恥しらすめ？」かういふや否や、魔はいきなり

王女の着物をはいで、柱へしぼりつけ、「さあ、隠さずに白状しろ！」といつて、折檻をはじめました。

わたくしは王女の泣き叫ぶ聲をきくともうじつとしてはゐられなくなつて、そのまゝ階段を駆けのぼ

つて、揚蓋を元の通りにおろし、その土へ土をかけたおきました。そして無我夢中で木を束ねて、それを頭へせて、町へかへつて行きました。

その途々も、わたくしは、あの美しい王女が、無慈悲な魔のためにどんな目にあつてゐるかと思ひつづけてをりました。そしてみんなそれが自分のしたことだと思ふと、この世の中に、自分ほど思も恥も知らない人間はないやうな氣がして、穴があつたらはひりたくらくに思ふのでした。

全くあの王女は、二十五年間、あそこにとちこめられてゐたのだが、それでも外へこを出られないが、あそこの中では、なに不自由なく暮してゐたのだ。それをおれのばかげた出来心から、王女の幸福をぶちこはして、あの無慈悲な怪物の手にかけるやうにしてしまつたのだ。

かう思ふと、わたくしは後悔に責められて、腸もらぎれるばかりな思ひをして、どこをどう歩いたと

も知らずに、町までかへつてまゐりました。

(六)

家主の仕立屋にわたくしの顔を見ると、大へんに喜んでくれました。

「おかへりがないので、どんなに心配しましたらう。ゆうべは一晚中眠らずに待つてゐたんですよ。あなたの御身分をうかつてをりますから、もしや誰かに見つかつたんではないかと心配してゐたんです。それでもまあ無事におかへりになつて、よかつた。」かうきいてわたくしは仕立屋の親切を感謝しました。それでも昨夜からの出来事については、一言もいはずに、こそくと自分の部屋へはひりました。すると間もなく、仕立屋がはひつて来て、かういひました。

「今知らない年寄の方が、林の中で拾つたといつてあなたの杵と斧をもつて来てくれましたよ。樵夫の

仲間からあなたのこゝにゐることを聞いて来たといつてゐます。今店にゐますから、行つて禮をいって、受取つたらいいでせう。」

これをきくと、わたくしは顔色をかへて、急にふるへ出したので、仕立屋はびつくりしてその譯をたづねました。

その時はやく、床が二つに割れて、話の老人が杵と斧をもつて、わたくしの前へあらはれました。

「おれは魔だ。魔王エブリスの娘の子だ。この斧はお前のものだらう？ この杵もさうだらう？」といふや否や、わたくしの答へも待たず、いきなりわたくしをひつつかんで、空へあがると、疾風のやうに翔つてゆきました。再び電光のやうに地にくだつて、どんと一つ足踏みをしたかと思ふと、地面が二つに裂けて、わたくしはまた地下の魔宮の中で、黒檀島の王女の前立つてをりました。

その時わたくしの前にあらはれた光景は、まゐな



んといふ痛ましい有様でせう！ 王女は着物をはがれたまゝ、血だらけになつて、死んだやうに床に横

はつてをりました。

わたくしは一目見ると、胸を裂かれるやうな思ひがして、兩眼から涙がぼろ／＼と落ちるのでした。

魔は散々に王女を責めて、白状させようとしたが、王女がどうしても口を開かないので、老人に姿をかへて、わたくしのところへやつて来たのでした。そして、わたくしをつれてかへるとすぐに王女を引きおこして、かういひました。

「この不埒者め！ それはこの男だらう？」

王女は涙の目をあげて、じつとわたくしをながめながら、悲しさうに答へました。

「知りません、見たこともないお方です。」

「なに、知らない！」と魔がいひました。「現にさうした痛い目を見るのも、こいつのためではないか、それでもまだ知らないといふのか？」

「はい、本當に見たこともない人です」と王女はいひ張るのです。「あなたはこの方を殺すために、わ

たくしにいつはりをいへとおつしやるのですか？」

「よし、それなら」といひながら、魔は劍を抜いて、王女の前へさしつけて、「本當に知らないといふならこの劍でその男の首を斬つて見せろ！」

王女は劍をもつてわたくしの前へ来て立ちましたけれどもしばらくだまつてわたくしの目を見つめてゐるうちに王女は持った劍を手から落して、かういひました。

「あゝ、どうしてそんな怖ろしいことが出来ませう？ わたくしはもう劍をふりあげる力もありませんし、又それが出来ましても、どうして何の罪もない、見ず知らずの人の生命を取ることが出来ませう？」

「出来ないのか？」と魔は王女に向つていひました。

「よし分つた！ これが何よりの證據だ！」

かういつて、今度はわたくしの方を向きました。

「さあ、お前はこの女を知つてゐるだらう？」

たくしをおすきのやうになすつて下さい、どうせあなたの手の中にあるのですから。」

「よし、分つた！」と魔は怖ろしい聲で叫びました。

「お前たちがどんなにかくしても、わしの目にはみんな分つてゐる。さあどうするか見てをれ！」

いふや否や、魔は劍をとりあげて、いきなり王女の片腕を斬り落しました。それからまた片方の腕を斬り、次に右の足を、それから左の足を、わたくしの見てる前で、手足をばらばらに切り落してしまひました。わたくしは自分もこの通りにされるのだと思つて、思はず目をふさぎました。

王女はもう聲も立てずに、死んだやうになつてをりました。わたくしが目をあいた時、わたくしの方へ最後の目くばせを送りました。魔はそれを見るとき、いきなり怖ろしい聲を立てました。

「この不埒者め！」といふや否や、王女の首を一刀に斬り落しました。かうしておして、魔は再び、わ

「なんで知りませう？ 今はじめてあふのですもの。」

「それが本當なら、この劍でこの女の首を斬つて見せろ？ さうすればお前には何の害も加へずにゆるしてやる。」かういつて、魔は王女の落した劍をひろつて、わたくしの手へ渡しました。

わたくしは劍をもつて王女の前へ立つて、じつと王女の目を見つめました。

「わたくしは、あなたのために喜んで死にませう。あなたもどうぞ一しよに死んで下さい。」かう王女の目はわたくしの心に語つてをりました。

わたくしは一足あとへさがると、そのまゝ劍を床へ落して、かういひました。

「おゝ、魔王さま。この婦人はまるで知らないばかりでなく、今見ると、今にも死にさうになつてをります。それをわたくしが手にかけるやうでしたら、わたくしはもう人間の仲間へはひれません。さあわ

たくしの方をふり向いてかういひました。

「こら人間、この女はおれをだました證據があがつたから、かうして殺したのだが、お前の方は疑はしいといふだけで、まだ確かな證據がないから、命だけは助けてやる。さあ、来いおれの魔術を見せてやるから。」といふかと思ふと、わたくしをぐつとつかんで、ひとりでに裂けた宮殿の屋根の間から、空をめがけて翔けのぼりました。そして地面がまるで小さな水盤くらゐにしか見えないほどの高さまでのぼつたかと思ふと、また電光のやうに落ちかゝつて、ある山の頂上へおりました。

そこで魔は土を一つかみ取つて、なにか分らない呪文を唱へながらわたくしにふりかけて、

「人の形を棄てて、猿になれ！」といったかと思ふと、魔の姿はふつと消えて、わたくしは百年も経たかと思はれるやうな大猿になつて、何所とも知れない異郷の空に残されてをりました。(つづく)



童謡

野口雨情選

(大人篇)

雀のお宿

八王子市 上野町 江本 三郎

知らない町の
友達を
たづねて行く日の
道でした

おてんと様がお

おなまけで
するぶん寒い
朝でした

小笹の茂つた
さゝやぶの
中にお家が
みえました

子供が二人
門にゐて
雀のお宿の
やうでした

お月さん傘

新海村 片岡 庸人

雨もふらぬにお月さま
大きくひろげた

へうきん狸も
出てをどれ
びーろろ猫鳥
笛を吹け

(子供篇)

日ぐれ

茨城縣 日立四校 大和田 俊

らくがき

京都府 舞鶴高女 松本 衣子

酒やの倉の白かべに
お馬の樂書しよんぼりと
今日もまぐさを貰はずに
赤い夕日を見てました

田草取

旅順 大柳 信子

雨が降つてる
姉ちや居ねえかと
田甫を見たが

傘さした

その夜の狸も傘さした

一本足駄で
傘さした

かじか

茨城縣 高萩町 田崎 夜雨

一本橋

渡つて
下のぞいたら

かじかが
飯事して
遊んでた

寒い晩

北山伏町 金原 五郎

1110

お山は寒いぞ
ボツボがなくぞ

先刻越えたは
トントコ館屋
來年又來よ
あばよと云つた
お山の山姥

お里へ出んな
今夜は寒いぞ
ボツボが啼くぞ

七つ星

新海村 森井 郁子

七つお星さんならんでる
七つお星さんどこへ行く
かんざしとしてピツカリ
ならんでお嫁に参ります

あかいかはして
ならんでる

横町で

山梨縣 山下部校 小野田千代

うちの隣のきよちやんが
けさ横町でないてゐた
豆腐のかごを手にもつて
一銭たらぬとないてゐた

つりがね草

東京市 成城校 村瀬 英武

木から落ちる
朝露の
銀の小人が
ぼとくと
つりがね草を
たゝいてる



詩年幼
選水牧山若

かぜ(賞)

山口縣萩町 波多野 充
明倫校尋三

かせよかせよ
すがたをみせよ
すがたかくして
なにするの

評、ときどき大きないたづらがして見たいの、と云ひました。(牧水)

山の一軒家(賞)

山梨縣北巨摩郡 小尾とめ子
林山西校尋六

リスリン
買ひにいつた一軒家
おちさん一人でさびしがる
毎日リスリン

買つてやろ

評、可愛いお客様で、おちさんはする分うらしいこととせう。(牧水)

風船賣はあさん(賞)

香川縣木田郡 溝淵ヒサエ
三溪校尋六

風船賣のおばあさん
だるまさんがころり
赤い風船がふわり
風船賣のおばあさんの
顔がいろいろにかはる
評、お花がきれいに咲いていよお天氣、よく歌つてあります。(牧水)

雨

山梨縣北巨摩郡 小宮山英子
村山西校尋六

お祭なのに雨が降る
雨よ早くやんでくれ
お祭だからやんでくれ
評、優しい祈り、必ずお天氣になりませう。
牧水

あひる

山梨縣北巨摩郡 茅野 卓雄
椋尾校尋六



自景
山梨縣東 梨里 山梨縣 大月 三英崎ケ千

一三三

綴方

齋藤佐次郎選

南小樽まで(賞)

札幌市南六條西創成校尋五

大西 淳 一

電柱が走る、家が走る、汽車は果もなく續く廣い廣い野原を走つてゐる。先程から大きく見えた蕨岩の山もだん／＼遠くなつて、炎えるやうな紅の残り葉が目についた。水たまりの處に來た。二三匹の馬を放してゐる。木の茂つてゐる處へ出た。秋の日は澄みきつた空高くかがやいてゐる。十時半頃だらう。

「錢函々々」と驛夫の呼ぶ聲に、ふと過ぎし日の水浴の樂しさを思ひ出した。さつと沖からよせて來

一三三

た磯波が岩にあたつては、銀砂の飛びちるやうに輝く。やがて波が引く。いその小石は、ころ／＼と小走りについていく。波上は日に照らされてまぶしく光る。漁師達が舟歌を歌ひながら綱をひいてゐる。と一隻の汽船が目についた。何所へ行くのだらう。外國へか。

樺太へか。僕は、なつかしい故郷の事を思ひ出して、彼の汽船が無事に目的地へ着く事を祈つた。一羽のかもめがすい／＼と飛びさつた。小島が見えた。上には一本の木が生ひ茂つてゐる。ビーと汽車は一笛を後に、トンネルの闇にかくれたが、直ぐにまた光明の世界へ出た。やがて目當の町がチラチラ見える。赤白の燈臺から防波堤が續いて、多くの浮城が横たはつてゐる。南小樽々々々」汽車は

停つた。僕はきつぷを握つて人波に押されて改札口に近づいた。

雞を殺す支那人(賞)

朝鮮仁川府樺岾小學校尋四

田邊 信 靖

「ぎやあ／＼／＼」と雞はくるし／＼さうな聲を出してたすけをよんでゐる。けれども支那人はしらん顔をして、なほも小刀を雞の首へさしこんでゐる。人々は口々に、

「よせ／＼」
「よせといつたらよさないか」
「やつぱり支那人だけあつて、なさをしらないやつだ」
と口々に悪口をいつてゐる。その中に支那人はなべをもつて來て、にはとりの血をなべに入れてしまつた。そして又ほかの雞をとり出して又これを殺しはじめた。人々は又前より一そう聲をあら／＼しくして、

「ばか者め」
「命しらすめ」
などと悪口をいひふらしてゐる。そのうちに雞を皆ころしてしまつた。人々は、
「はやくかへらなればこはいゆめを見る、やれ／＼」とい

あひるがなきながら
すにはひる
雪でも降りさうな
日になつた
群、眞實に雪でも降りさうな光景がよく表
れてゐます。大人にはながく歌へま
せんよ。(秋水)

富士

東京府豊島師範
附屬校 第五 稻葉 廣直

雲の上でさよならして
富士山がかすみにかくれた
あとにのこつた山々は
白い雪をのせてゐる
群、鮮かな夕方の景をよく寫しました。(秋水)

あわ

山梨縣北巨摩郡
峰尾校 第六 花輪 清雄

あわがながれて
わらにつかへ
流れさうで
ながれない
群、見つけどころが通者です。(秋水)

飛驒の人

岐阜市佐久間町 柴田 美緒

飛驒から来た人
ポンプをめづらしがつて
くんでゐる
ほんとにをかしい
飛驒の人だ
群、山の中から来た人をよく歌ひました
ね、感心しました。(秋水)

細い道

山梨縣北巨摩郡
泉校 第四 小池とみ子

細い道を歩いてゐたら
しまひに
島になつちやつた
群、みじかい言葉でよく歌ひましたね。
(秋水)

姉さん

山梨縣北巨摩郡
村山西校 第六 山本あやめ

姉さんお嫁に
行つた後
うちががらんと



自由山 墓のぼんた
英城川 新田 登
長澤 恒吉

つてそれぞれ自家をさしてかへつ
てゆく。その時にはすでに太やう
は西の海へ落ちかけてゐた。あゝ
支那人は命しらすなやつた。
學藝(會賞)
新潟縣西頸城郡南船生校 高一
池田 登

「私のお話しは」
と先づ口切た。
皆の目が一齊に僕の
所へ集つて来る。聲
は少しふるへてゐる
やうだ、すぐに話を
續けて「プログラム
には進化論とありま
すが、實際はそんな
難かしい議論ではな
くて、ほんとうの題は動物と人間
の先祖といふのであります。」こゝ
まで来て、もう一べん皆の方を見
廻した。僕の席の前にゐる齋藤が
僕の顔を見て、あかんべーをして
ゐる。五年生の席にゐる弟のやつ
僕の話しを聞いて舌をべろ／＼出
してゐやがる。しやくにさはるや
つた。先生方の席では岩崎先生と
受持ちの藤岡先生とがほゝゐんで

あの日

東京市外高田町
恩田 孝一

ゐられる。校長先生は向うを向い
てゐられるのでよくわからない。
外の先生方はみんな黙つてしづか
にしてゐられる。僕はすん／＼話
をつゞけた。外では吹雪がビュー
／＼／＼とものすごい音を立て、そ
のたんびに窓のガラスがガタ、ガ
タ、ガタ、ガタとゆれる。もう少
しだと思ふと元氣が出て来る。話
し終つて自分の席へ戻つてはつと

私はあの日の事を思ふと悲しく
てたまらない。それは曇つた日の
午後、私が家に歸る途中の事であ
つた。十二位の紺の着物を着て破
れたポンプをはいた少年が、きつ
とぶたれたんでせう、頭をおさへ
て「シク／＼」泣き
ながら垣根の所に立
つて居た。すぐ近く
に年はあまりとつて
ゐないだらしのない
身なりをした女が、
同じ様な女に聲高に
話をして居た。
「それがいつもなん
ですよ。使に出せば



自由山 無題
香川 木村 川上 香
川 木村 川上 香
二秀 夫

さびしくなつた
許、さぞさびしいことせう。(牧水)

けしこむ

不明 正木 陽利

けしこむ
ほんとにいたからう
からだを
すられていたからう
許、いゝえくと云ひました。(牧水)

むぎ島

千葉縣山武郡
源校尋二 今關 ころ

きれいな
むぎ島
青いしまの
むぎ島
さか分大きな
ふるしきだ
許、ほんとにふるしきのやうですれ。(牧水)

かへる

京都府女子師範
附屬校尋三 樺井 修吉

かへる
お池のかへる
けんくわをしないで
仲よくくらせ

僕のたんじやうび

東京市
富士見校尋四 木村 桐

僕のたんじやう十月の
もみちのはつばの
赤いころ
かあさんつくつた
さんとんを
おいしく食べる
うれしい日

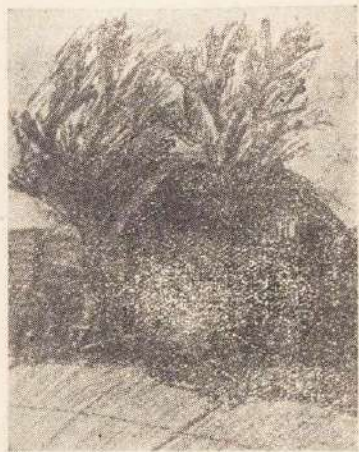
小鳥

香川縣木田郡
水田校尋五 石丸 滿行

小鳥が小松にとまつた時
小枝がカサリとゆるいでた
小鳥の體が重さうだ

稻刈り

東京府下
大泉校尋四 篠崎 大治



自由
山由
梨里
縣東
大校
月六
明吉森大
るのだ。父や母の所
を離れて来てゐるの
に、主人からつらく
しかられるのはどん
なに悲しい事だらう
私も悲しくつてたま
らなかつたので、目
をつぶつてをこを走
つて歸つた。たびた
びそこを通る時、私

さまつておそく歸るから、どうも
變だと思つてゐたら、本屋によつ
て本を見てゐるのを私が今日みつ
けてね。
女は少年の方を向いて、
「私は奉公人にね、使に行くのに
本を見てこいと云はないよ。ど
うするか今晚覺えて居るがいい。」
と云つた。
此の少年は女の所に奉公して居

命日の日
今日はお母様の御命日である。
弟の友達が三人許り来て居た。ど
めんなさい。僕はおばうさんかな
と思つてげんくわんに行つた。や
つぱりおばうさんだつた。おばう

さんはおんどろに來て佛前に坐つ
た。僕は佛様の前にお明とおせん
香を上げた。おばうさんはお香を
たいて、一つ鉦をたいて、おき
やうを讀みはじめた。おきやうの
わけはわからぬが、何だかかなし
くなつて來た。弟はおじゆうずを
僕にとつてくれた。僕は弟もやつ
ぱりかなしかつたのだらうと思
ふ。僕は手を合せて心から拜んだ。

おばうさんのおきやうの聲はます
ますかなしく聞えた。おせん香の
にはひが僕にかんじた時、僕は
あゝお母様には二度と會へないの
かと思つた。おばうさんは又鉦を
うつた。その鉦の音でさへ何とな
くさびしく思はれた。今でも僕の
目の前にはお母様の笑つていらつ
しるあのお顔が見える。どうし
て人間は死ぬのだらう。お母様が



自由
山由
梨里
縣東
大校
月六
明吉森大
今生きていらしたら
さびしくもなく、面
白くくらしして行け
るのに、なせお母様
は早く死なれたのだ
らう。あゝお母様が
すや／＼とねむつた
やうに死んで居られ
た時、僕は唯涙が出
るばかりであつた。

とうくに見える
いねかりさん
かがんだりたつたり
たつたりかがんだり
ほんとうにいそがしい
いねかりさん

おたまじやくし

長野縣上伊那郡
片桐村校尋三 齋 藤 春

ながしろたんぼに
ちよろちよろちよろ
おたまじやくしが
あそんでる
おやについて
おちよろちよろ
かはいからだで
おちよろちよろ

月

福岡縣金敷郡
東谷第一校尋四 松井 千代

東の山邊が
黄ばんだ
今にお月さんが

出るだらう

コツクキ

東京府豊島郡
範附屬校一年 稻葉 絢子

コツクキサン
コツクキサン
オマヘハイツモ
ウゴイテル
クタビレナイカ
コツクキサン

小牛と親牛の別れ

静岡縣富士郡
芝富校尋五 清 い ね

小牛を賣つたら親牛が
かあい、小牛を見送つて
メーン／＼と泣きました

すゞめ

山口縣熊毛郡
八代校尋四 鬼武ミチ子

もう少し立つと
春が来るなと
すゞめがちゆうく
ないてます

もうあの時から一年と一月許りたつてゐる。自分でももうあきらめなきや仕方がないと思ふが、どうしてもあきらめられない。前は人が死んで泣いてゐると、あきらめればよいのにと思ふが、自分の身となると中々さうはいかない。一生けんめい遊んでゐる時も、こんな事を思ひ出すと、涙がひとりでは、は、をつたつて流れる。

兎

東京市牛込區余丁町

福田 秀 治
(十四歳)

此間僕の家では兎を相澤さんの家から頂きました。皆で三匹で、二匹は白くて、眼がルビーのやうな真赤な眼をして居ります。最う一匹のは黒色で眼も黒い色をして居ります。私は此黒いのが憎らし

いので、白いのにはかり餌をやります。すると黒いのが怒つて、白いのをいぢめるので、白と黒と別々にしきりをしてしまひました。今では黒は、ひとりで淋しがつて其しきりを時々ばりばりとひつかいて居ります。近い中にもし黒が溫和しくなつたら、又一しよに入れてやるつもりです。私が毎朝戸を開ける時には、じつとして動かずに休んで居ります。又學校から歸へつて来ると、急いで餌箱の所へ来て餌を呉れるのを待遠しうにして居ります。急いで餌をやると、ポリポリ音をたてておいしそうに食べます。

酉のいち

埼玉縣埼玉師範附屬校三年
本 牛 謙 二

昨日は酉の市です。行く時は

晩の四時でした。その時、たぐさんの人がぞろ／＼かへつてきました。おひるごろ行つた人が、今かへつて来るのです。須原屋近くなると、もうにぎやかになりました。おかしやさんもあれば、古本



自由花 由花 京三 都重 府校 中尋 郡六 糸 井 美 宜

屋やほうせき屋など色々な店がならんで居ました。大がいの家では大賣出しをしてゐます。油仙では二階から小谷野君の家の松まで糸をはつて、たぐさんの國旗がつるしてありました。いよ／＼調宮へつきました。森の方に花屋しきにあつたやうなへびの見世物がありました。入りたかつたのですが、宿題のあつたことに気がついたのかへりました。どこの店でも人が黒山のやうにゐるので、道のまん中を歩いてゐたら、自動車が出来たので、びつくりしました。姉さんが居たので、「姉さん」と呼んだら、ふりかへつて「福引でふるしきが當つたよ」といひました。手ぶくろを買つてかへりました。

講演だより

茨城行き

講師 沖野岩三郎

三月十五日午後三時から茨城縣結城郡の中妻驛へ行きました。これは昨年来度々同地の有志染谷秋氏からの懇請に因るもので、たうとう無理な繰合せをして行つたのでした。六時前に同驛へ着、七時から同地の靈仙寺で、兒童諸君に對する講演會を開きました。住職小倉禪領氏や隣村五箇村の高橋徳三郎氏、水海道高等女學校の海老原教諭其他の諸君が見えました。

ました。夫れがすんで、引續いて大人の方にお話を致しました。會が果て、十二時前に、あの廣い平野の中を歩いて染谷氏のお宅へ行つた時は、滿洲の曠野を歩いてゐるやうな感じが致しました。十六日には染谷氏の邸内にある數百年の老樹とも思はれる榎の木に別れて、五箇村へ行きました。同校の羽田松雄氏と高橋氏との幹施で、三年以上の兒童に講演の後

夜の集會ではあつたが、貳百五十の兒童は皆な熱心に聞いて呉れ

で、大人にも一時間講演して四時から高橋氏と一緒に若柳小學校へ行きました。童謡で、有名な若柳小學校は、もう鵬波ノ江小學校と改名されて別に新しい學校になつてゐました。

其晩は若柳校の久保田校長と語り、栗野訓導のお宅へ泊りました。十七日の朝鵬波ノ江小學校で全校兒童五百名にお話をしました。私の頭が非常に疲れて居た爲めに一つの話を終まで話す事が出来な

人集つて呉れましたが、ヤツぱり私の思ふ事を半分も言ひ盡し得ませんでした。四月にと云はれて居たので、新しい元氣で来ればよかつたと思ひ乍ら、栗野訓導に送られて大寶驛を立つたのでした。◇四月廿日、午前九時半から、本所松倉町の、産業青年會内の、賀川豊彦氏の設立にかゝる日曜學校生徒の爲に、「イースタア童話會」を開きました。可憐な子供さん達三百餘人が、實におとなしく、そして麗はしい集りをしました。私



釜山へ上陸した野口先生 (中央の外套を着たのが野口先生)

釜山より 講師 野口 雨情 野口雨情先生は朝鮮の各地に向つて童話講演の旅に出發されました。釜山からはじめて京城、平壤、新義州の方まで行かれる事になつてまいります。(記者) 第一便。たゞ今釜山へ着きました。こちらは今櫻の花盛りです。内地で考へてゐた釜山と實際の釜山では、よい意味に於て違つてをります。これを第一便として逐次通信いたします。(釜山埠頭にて)



自由畫選評

山本 鼎

△二川秀夫君の色彩は落つきがよいが、女の兒と男の兒が面白く描けて居ます。△橋爪謙吾君の「びやしんす」落つきで描いてある。いゝ鉛筆畫ですが、パツクがいけません。線の方向などが悪いのです。△糸井美宜君の格の寫生、どつしりとした描寫ぶりがいゝです。△大森吉明君の「くらし」少しそんざいだが、大づかみに、強く現してゆかうとする處に特色があります。△長澤恒重君の「たんぼの中の霧」といふペン畫、中央の四水の立木がうまく書けて居ます。△千ヶ崎英三君の「秋の日」素直な感じの繪です。

幼年詩選評

若山 牧水

▽さて、今月の成績に就て述べると、先づあまり感心出来なかつたといふより外ない。しかし、賞に入つた作は流石に面白いものであつた。大西さんの「南小梅まで」は大層力のこもつたもので、息もつかせずに讀ませる力がある。うづり行く景色をよくとらへてゐる。▽それから、田邊さんの「鶏を殺す支那人」は非常に變つた作で、又藝術味のゆたかな作だ。夕暮れの支那町で鶏を殺してある支那人の不思議な姿が目に入る。面白い作だ。▽池田登さんの「學藝會」といふ作は、微妙な心持ちをよく寫してゐる。▽思田孝一さんの「あの日は讀んだ後で考へさせるだけの力がある。▽木平謙二さんの「西のいち」の中で、歸り途に姉さんに逢ふところが、大層よく書けてゐた。▽今月は掲載出来なかつたものゝ中になかなかいい作のあつた事をおことばりしておきたい。高田勝治さんの「涙」などいゝ作だ。ただあまり長過ぎるので掲載出来なかつたのは残念である。この外に西浦孝一さんの「イッキ」柴田英緒さんの「よいお爺さん」井關正子さんの「悪口」伊藤富士雄さんの「さちがひ」岡部とささんの「春」松木吐雨さんの「遅刻」水上正さんの「迷ひ子」など皆特にいゝ作であつた。

△幾度も幾度も見直して選をしました。矢張り、作はいつ見てもいゝやうです。かうした詩を作るといふことに、皆さんがあんまり頭をつかひ過ぎほしくないであらうか、といふ心配をする位皆よい出来になつて來ました。△諸方の學校から集まつてくるだけでも大した数です。不思議と佳い作の多い學校と、さほどでもない學校とあります。かうした事に競争するといふことの善悪は別として、可愛い兒童を出来るだけ自然に、大きく育てるといふ根本的な考察を教師の頭に置いて頂きたいと思ひます。

△次に掲げた作は、山形縣の或る學校の尋三の女生徒「劣等兒であるが童謡にのみ天分があるらしい」といふ註がついてゐました。「山のモミガ」といふ題で、
雪がフツツテ コマツタラウ
山のもみぎが チラナイワチニ
雪がフツツテ コマツタラウ
モミサニ雪がカカタラウ
次に「雪」といふ題で
クサノ雪、ユカベフツツタユキチ
ダレガサキニミツクダ
ヤネノウエノエントツダ
△これなど、立派な出来だと思ひました。劣等兒など云ふ考へをこの兒童に持たせたくない、としみじみ思ひました。△毎月の選をしてみますと、幼ない人たちの心は伸びてゆく程が恐ろしいと思はれる位豊かな力で押して進んでゐるやうです。

童謡の選後に

野口 雨情

ダルトン案の教育法と、童謡教育とは、兒童が持つて生れた天分を伸ばしてゆくこと云ふ點に一致がある。一致點はあるがダルトン案の教育法と童謡教育とは元より同一のものではない。同じ天分を伸ばすとは云ふものゝ童謡教育は童心性の教育である點に異なるところがある。童心性は、眞善美の根本とも云ふべき大切なものである。童心性は、無邪氣を意味するが、無邪氣には無遠慮を意味しない。又、放埒心も意味しない。無邪氣と無遠慮と放埒心とを同じものやうに考へてゐる小學校の先生方がゐる。それについて今私の手許に二三の通信さへ届いてゐる。無邪氣とは、櫻の花が靜に咲いてゐるやうな、至つてしとやかな邪念のない心を云ふのである。この點に、童謡教育の指導にたづさへる先生方が考へ違ひがあつてはいけない。

童謡の選後に

齋藤 佐次郎

▽毎月皆さんの苦心の作を讀むことの出来るのは、私の一つの楽しみです。十人十色の作

綴方の選後に

齋藤 佐次郎

▽この頃はいい作が少くなつたやうに思はれる。数だけは實に澤山集るが、質が悪くなつたやうだ。生き／＼とした感じを書いたのが少い。折角いゝ方に向つて來たのが、また元に戻つて、カタにはまつた死んだ綴方を書く人が多くなつた。▽例へば今月集つた中に「春」のことを書いたものが澤山あつたが、それが大抵おもしろい文句を並べてゐる。鶯のことや、梅のことや、菜の花のことや、蝶々の事はかり書いてゐる。かつたのかと、残念に思はれました。▽また、自分で本當に感じもしない事を、感じたやうにカタを書いたものも大分あつた。こんな物はニセ物だから讀めばすぐわかつてしまふ。▽それから又、本が何かで覺えた言葉をそのまま得意に使つてゐるものがある。これも困つたことで、さういふのに限つて子供らしい處のない、マセたものが多い。例へば「死のやうに靜かだ」などと書いたのがあつたが、どうも面白く讀まれない。大人びた見方や感じ方をしてゐるのは全く困つたことだ。さうなつて了つては、もう押ひることが出来ないといつて差支へないでせう。大に注意すべきだ。

風、それから苦心のあとよく見える創作と、或は各地に傳へられてゐる傳説や口碑を題材として面白く扱つてをられるのを見るのは全く愉快なことだ。

▽しかし、私はこんな事を思ひます。本誌に投稿される方々は、童謡に就て大きな抱負を持つてゐる方々なのだから、成る可く自分の創作になつた作を投稿していただきたいと思ひます。さういつたら、或は一部の寄稿家中には、そんな事をいふが、「金の星」に出てる話だつて全部創作ではないが、しかし、雑誌として編輯する「金の星」には、またいろいろの編輯上の方針があつて、さうばかり行つては行けません。皆さんが大きな意氣込みを以て童謡を作る以上は、是非創作する話風のものかと思ひます。或は題材を日本の傳説や口碑に求める場合だつたら、思ひ切り自分のものにして自由に工夫して書いていただきます。左の作を推薦作に決定します。

水の呑みたい蟻 (大人の部)

伊藤 一雅

とんだ御馳走 (子供の部)

山崎 豊

新しく出た本

◇黄金島(赤坂清七氏編)原作は英國の交際スチヴンソンの作で、ロビンソン漂流記と共に有名な話です。世界の名作として一度は讀んで置たい本です。装幀と挿畫とは武井武雄先生の苦心になつた美しいものです。(四六判二三〇頁 定價金一圓八十錢 東京牛込山伏町十四イデア書院發行)

◇極楽とんぼ(野口雨情先生著)野口先生の民謡六十一篇を集めたもの、旅人の唄「船頭小唄」など昔々唄はれてゐる民謡をばじめてみて、各篇ともつきめ情緒を持つた名篇ぞろひです。民謡に於ては獨歩の境地を有してゐる著者の民謡集として愛唱措く能はざるものです。装幀は露谷紅兒先生の手になる。(三六判二二六頁 定價金一圓五十錢 東京神田道神保町六 黒潮社發行)

◇十五夜お月さん(眞島陸美氏著)童話館を創設した最初の出版です。十五夜お月さん、外二つの童話に著者が踊りの振つめをして、それを誰が見てもすぐに踊れるやうに一々寫眞を入れて説明してあります。著者は童話館の方面で非常に有名な方です。(菊判美裝定價金壹圓日本橋大倉書店發行)

◇ナホレオン物語(金の星社編)世界少年少女名著名大木の第二編として本社から出版されたものです。くわしくは出版便りを御覽下さい。(四六判一六〇頁 定價九十錢)

自由畫掲載外佳作

- 新田 正棟(香川)
堀 正明(朝野)
木平 謙二(埼玉)
大和 茂喜(長野)
山本 金三(福島)
小宮 春野(千葉)
山口 泰信(山梨)
橋爪 隆吾(東京)
白井 富雄(香川)
佐藤 清(香川)

幼年詩掲載外佳作

- 田中 貞子(山梨)
鳥 健一(香川)
三谷 性一(香川)
木登 正一(門司)
水野 雪美(新潟)
野藤 しづゑ(大阪)
朝枝 俊輔(山口)
大久保 茂香(香川)
上原 長三郎(香川)
古田 恒雄(長野)
二川 秀雄(香川)
高橋 ナカ(山口)
鈴木 三郎(福島)
齋藤 留子(山梨)

綴方掲載外佳作

- 清水 八重子(山梨)
漆原 榮(首川)
寺本 彌市郎(兵庫)
坂本 とし(熊本)
名取カッロ(不明)
三木 義矩(香川)
有井 武定(山梨)

童話佳作

- 西浦 孝一(京都)
井關 とし(不明)
高田 龍治(北海道)
後藤 静夫(岡山)
岸澤 石郎(不明)
河内 定雄(鳥取)
山内よし子(山形)
塚原 嘉炬(熊本)
水井 ふく(埼玉)
石上 正(埼玉)
増田 三郎(香川)
瀧澤 久吉(新潟)
宮崎 明子(不明)

金の星新誌友名簿

- 高阪正英(富山)
浦井多重郎(北海道)
川井多重郎(秋田)
永井 靖(廣島)
岡本正二(愛知)
永島信吉(栃木)
丸山金吉(栃木)
丸山多吉(静岡)
中島友子(長野)
土屋銀吉(新潟)
小林哲子(新潟)
小野隆子(福岡)
松下欽子(福岡)
杉本光雄(福岡)
辻岡三郎(東京)
井口正子(東京)
河内信次郎(長野)
武川敏子(千葉)
田中智治(神戶)
藤 輝子(東京)
上村良子(東京)
高辻英子(大阪)
各川正春(山梨)
酒井俊平(臺北)
原田健子(東京)
八代英子(熊本)

童謡掲載外佳作

- 石橋まき(東京)
三須 英三(京都)
尾形 みだ(熊本)
大矢 竹雄(横濱)
小山 勇(神戸)
松本 あけみ(朝鮮)
柳 春樹(東京)
上條 玄八(長野)
木下 露草(京都)
藻司 一彌(水戸)
伊丹 沙影(長崎)
薄井益太郎(八王子)
平井 樹三(東京)

(子供篇)

- 丸茂 郎(甲府)
川元 義明(香川)
木澤 榮一(山梨)
木澤 久夫(和歌山)
佐藤 義壽(茨城)
宮野 徳松(山梨)
杉山 モン(東京)
大場須賀子(福岡)
相田 ユキ(山形)
酒井 成夫(栃木)
松本 初香(水戸)
田村 重和(和歌山)

(大人篇)

- 高田 徹(岡山)
等々力愛児(東京)
阿部喜三(男)(東京)
吉 志朗(山口)
山崎 武兵衛(長野)
月村 博光(東京)
井邊 信晴(朝鮮)
井關 春帆(東京)
勝山喜一郎(静岡)
山崎 豊三(三重)

讀者だより



▼とうとう春がまゐりました。花のまに住みながらいつも花時に見おとしてしまふ私は、今年こそ少づつ見ようと思つてあります。私の株は野口先生のことを「あめだま先生」と云つてあります。雨と云ふ字を習ひおぼえたので、自分の生活に最も近い「あめだま」に結びつけたのが面白いでは御座いませぬか。野口先生が當地へおいでにならないのが本當に淋しうございませぬ。いつかおいでになるならうと心待ちに待つてあります。何だかそんな時がくるやうな気がしてなりません。益々「金の星」のさかえることを共に祈らうございませぬか。さようなら。

(東京 三須生)

▼此頃は次々あたまかになりまして。私はこちらに居る者分居より毎日送つてもらつて愛讀して居りますから、私も愛讀者と同じわけと思つて居ります。ことに野口先生の童えつや、本居先生、沖野先生、齋藤先生等のつくづく交や童謡等を讀むと理想つき雑誌だとなび々思ひます。私は遠方ながら金の星社及先生方のごぶじを祈つて居ります。又、先生方へのやうな人になるには、どんな學校に入るのですか、御やつかいながらおしらせ下さい。御れがひいたしませぬ。山形 齋藤光雄

△どこいつて定つた學校はありませぬ。諸先生とも、めいめい進つた學校を出て居ります。どの學校でもしつかり勉強さへすればよいのです。(記者)

▼南の風がそよよと訪れて、木木の若芽も緑をまして來ました。私たちが一年進級して私ほもう女學校一年生になりました。なつかしい母校を離れてまだ一度も遊んだ事もない。見た事もないお友だちとおつき合ひする。新しい気分があふれて居ります。けれども決して母校や恩師をわすれては居りませぬ。(坂東 ヨシタ、シバタ)

一生懸命やつて下さい。さよなら

▼ある夜であつた。空には一點の雲もなく、ほんとの、晩であつた。空には金の星の星が輝いてきら／＼と光る。空一ぱい見上げたら星さまがにっこりとして居た。金の星といふ雑誌がある。

(長野縣共和村 渡邊吾朗)

▼其の後皆様方には御變りも御座いませぬか。御誌の御發展を見て羨ながら居ります。小生は今度左記へ轉任いたしました。児童文藝のために新天地を開拓したい考へです。今後は度々御社の御教授を御願ひすることと思ひます。(千葉縣印旛郡本姓小學校内 染谷秋月)

▼金の星社より「赤い猫」お送り下さいまして有難うございませぬ。三月三十一日に受取りましたから御安心下さいませ。大層立派な本です。厚くお贈り申上げます。金の星」にのつて居ります「西遊記」を名著大系にて發表して下さいませぬ。

▼此頃は次々あたまかになりまして。私はこちらに居る者分居より毎日送つてもらつて愛讀して居りますから、私も愛讀者と同じわけと思つて居ります。ことに野口先生の童えつや、本居先生、沖野先生、齋藤先生等のつくづく交や童謡等を讀むと理想つき雑誌だとなび々思ひます。私は遠方ながら金の星社及先生方のごぶじを祈つて居ります。又、先生方へのやうな人になるには、どんな學校に入るのですか、御やつかいながらおしらせ下さい。御れがひいたしませぬ。山形 齋藤光雄

ませぬ。八つの時入學して此の六年間御教訓をうけた母校恩師と六年間おつきまじくしよに遊びしよに學んだ親友も決してわすれては居りませぬ。私は女學校一年生で、弟も誌友にしてやつて下さいませ。どうぞよろしくお願ひ申します。それから今度「金の星」が奮發して十銭高くなりましたが其の分をおくりいたさなくては居りませぬか。どうぞ誌上でおしらせ下さいませ。さらば。

(横濱 金子多代)

▼お手数ながら値上げになつた金額だけおついでの節にお送り下さいませ。(記者)

▼私は拙い年々童謡を研究して居る者です。今迄餘り投書して居ましたが拙い年々毎月投書して居ます。そして今迄味はれなかつた投資家の氣持を感じ得る様になりました。同人雜誌御發行の方は一部お送り下さい。入社して頂きたいと存じます。大阪府西區市岡町八九〇番原方少國民會(西區市岡町八)

▼今日 本屋で本誌を買ひました。私はいつもこの新らしい本を見る

このことを「金の星」讀者だよりにてお答へ下さい。(鳥取 武部政一)

▼名著大系は金の星社の編輯部で作るものですから、是非その内に「西遊記」は發行いたしますが、補山先生との別なものになることと思ひます。(記者)

▼沖野先生に申上げます。先生がお書きになるお話で、私は子供が大層有益なお話ですから、私は子供たちに話して聞かせてやつて居ります。私は信州の某校教員です。科學のお話も、普通に科學の話らしくしよのでは興味がありませんが、此のやうに童話になつてありますと知らず／＼面白く讀んで、そして知らなかつた動物や鳥や蟲などのお話を聞くことが出来て、得がたい講演だと思ひました。尚先生にお願ひしたいのは、私は先生の童話の熱心な愛讀者です。先生の童話を是非また毎月面白く童話を書いていただきたく思ひます。先生の童話は立派な創作童話です。私は先生の「赤い猫」を愛讀して居ります。信州 山崎賢

▼「金の星」愛讀者のみなさま。寒い新潟の港町から青色表紙の掃火が、私等の拙い手によつて第壹輯

と、さまたけになつた童話に對する創作熱が俄に高まるのを感じます。だからそれは創作上のいゝ刺戟だと私は思つて居ります。(岡山師範寄宿舎 河田節雄)

▼此の間は美しい繪葉書を下さいまして有難う御座います。つまらぬ物をお送り致しまして、定めしお笑ひの事と思ひますが、その内すばらしいよい物を作つて先生を驚かしあげたいと思つて居ります。但しこれは、思つて居るのであります。實現するかどうかは分りませぬ。今に私も誌友になりたいと思つて居ります。十七歳ですけれど誌友になつてもかまはないでせう。私の此の望は、七月號か八月號から送られるでせう。(まき)

▼記者君。相變らず元氣ですか。久しぶりで投書をしたが、勿論あれでいゝでせう。あの童話は今日二時間位で出来上りましたが、童話など出すのは初めてです。悪い所はほとんどおつちやつて下さい。それに今日の日は急いだので大へん字がきたないですが、すみません。今月分は、僕も今月分が四月から二年になるのですが、僕の大好きな「金の星」は、やはり買

が生まれました。新潟の港は詩の町です。童謡をうんとお聞かせした。會費一部拾五錢です。「金の星」の皆さまからも見てもらひたいと思つて居ります。新潟市沼垂西區火鳥 ぼた火社 北澤龍三郎

▼四月號。表紙の素直なには腰をのこして居ました。先生の努力した事に對して感謝します。又「金の星」の文壇の淋しみに、はげしく残念です。どうか先生和歌、俳句を募集して下さいませ。誌友の皆様この事に賛成して下さいませ。まづは御願ひませぬ。(埼玉縣 腰塚多郎)

▼私は大正十二年八月からの愛讀者ですが、投書させていたゞくのはこれが初めてです。何も知らずたゞ氣まぐれに童話を書いて見ました。小學校の四年生時分と思ひます。僕等は湯川といふ先生に教へて貰つた頃です先生は「金の星」の沖野先生の作つたものを出して来て、大そう沖野先生をほめて、沖野先生は自分の友達であるといひました。それからそれからは沖野先生の作つた童話が出る度に三度でも四度でも讀んで先生を慕ひました。末筆ながら「金の星」の皆さま、幸多からん「金の星」の(和歌山 早田啓太郎)



金の星社 六月號

出版だより

ブウ太郎鍛冶屋

いよく発行

武井武雄先生の繪入童話集『ブウ太郎鍛冶屋』がいよく發賣になりました。紙數約三百頁、本文二度刷の明るく美しい本で、しかも、その間に澤山の武井先生獨特の面白い挿畫が入つてゐて、口繪には三色版のこれまた驚く程美しい繪が二枚も入つてゐます。全く童話集としてこれ程立派な本はありません。定價からいって、金の星社でなければ出来ない安價な本です。『ブウ太郎鍛冶屋』の蜂の貸問『化けマンダリン』題を聞いたばかりでも讀みたくなるものばかり十七篇も集つてゐるので『金の星』誌上で武井先生のお話と畫の面白味を知つてゐる方には、是非讀んでいただきたい本です。四六判箱入美本 定價壹圓六十錢 送料十錢

『ナポレオン物語』

忽ち三版となる!!

金の星社の編になる世界少年少女名著大系の第二編『ナポレオン物語』は、スタライイ好評を以て迎へられております。初版再版とも賣り盛くして忽ち三版を發賣するに至りました。第一編の『ロビン

ソン漂流記』第三篇の『ドンキホーテ』共に近日發行になります。

『家なき子』

第五版發行!!

三宅房子先生の苦心によつて譯された佛國文豪エクトル・マローの原作になる『家なき子』は、今や驚くべき大好評を以て迎へられております。三版、四版と版を重ねるに第五版を發行する事になりました。或讀者は、一體世の中にこんな面白い小説があつたのかと感嘆の手紙を本社に寄せられたりしたが、この本を讀んで感動されたのは敢てこの讀者ばかりではありませぬ。恐らく誰でも同じ感想を抱かれるに相違ありません。

寺内英治郎畫伯の挿畫と美しい装幀とを、これ又非常な評判になつております。お讀みにならない方があつたら、この際至急にお讀みになる事をおすすめします。尙、小島政二郎先生の譯述になる『狼少年』も此の叢書の第二編として近日發行の豫定で、目下印刷中でありませぬ。四六判箱入 定價金壹圓八十錢 送料十五錢

愛讀者通信

△金の星社のめざましい奮闘振りに驚いてゐます。自分たちの讀みたい本をどん／＼出してくれるので、金の星社の本だけを讀めば、澤山になりました。僕ももう貴社の發行書だけを讀むことに決心しました。どうかどし／＼いよ本を出して僕達を喜して下さい。(信州 山口光雄)

△私は『金の星』にのつた時代に『家なき子』を一度讀みましたが、もう一度どうしても讀みたくなって、度單行本になつて出た『家なき子』を買つて讀みました。まあ何れも美しい本でせう。書棚へ飾つたら急に書棚が明るかつたやうな感じがいたしました。そしてもう一度讀んだら、先に讀んだときより、面白くつて、私秘度か泣きまわす全くと、少年が可哀さうなものです。(東京 下村京子)

△沖野先生、私は先生の著書に熱心な愛讀者です。今度先生が『森の祈り』をお出しになる事を知りました。斯くて待つております。先生、日本の少年少女の讀物の爲

沖野岩三郎先生作・落谷虹兒畫伯裝幀挿畫

長篇 童話 森の祈り

『森の祈り』は自分の最も自信ある作だ』と著者の沖野先生はいつてなられます。全くその如く、この作程讀者に深い感動を與へる本はありませぬ。時丸といふ少年と、庚といふ少女とが悲しい境遇に育ち乍ら、光明を求めて勵んで行く姿は涙なしには讀めません。少年少女がこの物語りを讀んで、

どんなに大きな感動を受けるかはいふまでもない事です。少年少女の模範的讀物として自信を以て學校に家庭におすすめることの出来る本です。尙、裝幀と挿畫には落谷虹兒先生がお得意の作を發表されました。物語りと挿畫と相まりいよく面白さを増してなりました。

本居長世先生作曲 名所めぐり(伴奏附)

(五月三十日頃發賣)

本居先生歸朝後の最初の童話曲講集です。金の星童話曲講集の六輯として發行になりました。長柄の橋、佐渡ヶ島、辨慶の鐘、の六曲が集められてあります。早く、所めぐり童話集を出してあげたいと御希望を聞いてなりましたが、本居先生の米國各地からの歸朝を待つて、漸くこゝに發行される事となつたのです。裝幀は寺内萬治郎畫伯の苦心になる本版五度刷の美しいものです。(定價金八十錢 送料金六錢)

小松耕輔先生作曲 『夢とり』(伴奏附)

(五月十五日頃發賣)

『金の星童話曲講集』の第五輯として小松耕輔先生の『夢とり』を發行します。この譯はいづれも野口雨情先生の作語になつたもので、『おし』の機織り、十、七、七、などの六曲が集められてあります。いづれも小松先生の名曲として評判の手になつた本版五度刷の美しいものです。(定價八十錢 送料六錢)

最近の重版書

- 父戀し (第七版)
- 赤い猫 (第七版)
- 人買船 (第五版)
- 一つお星さん (第五版)
- 青い空 (第三版)

『金の星』の合本

- 第一輯 金一圓八十錢
- 第二輯 金一圓八十錢
- 第三輯 金一圓八十錢
- 第四輯 金一圓八十錢
- 第五輯 金一圓八十錢
- 第六輯 金一圓八十錢
- 第七輯 金一圓八十錢
- 第八輯 金一圓八十錢
- 第九輯 金一圓八十錢
- 第十輯 金一圓八十錢
- 第十一輯 金一圓八十錢
- 第十二輯 金一圓八十錢
- 第十三輯 金一圓八十錢
- 第十四輯 金一圓八十錢
- 第十五輯 金一圓八十錢
- 第十六輯 金一圓八十錢
- 第十七輯 金一圓八十錢
- 第十八輯 金一圓八十錢
- 第十九輯 金一圓八十錢
- 第二十輯 金一圓八十錢

懸賞創作募集

自由畫……山本鼎先生選
幼年詩……若山牧水先生選
綴方……編輯部選

〔注意〕 課題は何でもかまいません。諸君の日々見たり感じたり、したことや諸君の好きなものを、諸君の好きなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は學校や學年(または住所と年齢)とともにおさないやうにして下さい。用紙は自由畫はなるべく畫用紙に、幼年詩や綴方はなるべく原稿用紙(または半紙)に書いてください。よく出来た方には「金の星」特製の賞品を差上げます。次號(切は五月廿八日)の以後は次號(題ろ)發表は八月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地の星社。

◆一般讀者の創作◆

童謡……野口雨情先生選
話……齋藤佐次郎先生選

〔注意〕 童謡は十五行以内、童謡は二十字詰二百行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童謡には五圓、童謡には二圓づつ、特選の場合は童謡には拾圓、童謡には五圓づつ賞金として呈します。但し少女の創作童謡にして「入選」の場合は「金の星」賞を呈します。締切、發表、宛名は少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價壹冊金四拾錢 送料壹錢
三ヶ月分三冊(送料共)壹圓貳拾錢
半年分六冊(送料共)貳圓四十錢
一年分十二冊(送料共)四圓八十錢
但し新年號は特別號で五十錢です。か
い、御注文の節はこの分だけ必ず加へ
てお拂込み下さい。

振替口座東京五九五六番
〔注意〕 御注文は必ず前金で御拂込み下さい
送) 送金は振替が一番便利で御座います
の 〇切手代用は(壹錢切手)一割増しです
注) 〇何巻第何號よりと書いてください
〇住所姓名ははつきり書いてください
廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十三年五月九日印刷納本(毎月一回)
大正十三年六月一日發行(一日發行)

編輯兼發行人 齋藤 佐次郎
印刷所 東京市小石川久堅町百八番地
大橋 光吉
發行所 東京市外田端三百五十一番地
星社の星社
電話小石川五三三八七番

新刊

金の星童謡曲譜集

赤い靴

本居長世先生作曲
野口雨情先生作謠

定價 金十八錢
送料 金六錢

(目曲) 赤い靴、山彦、三ヶ月さん、
姥捨山、朝鮮飴屋、眠り龜の子

〔赤い靴〕は日本童謡の名曲として「青い目の人形」と共に並び稱せられてゐるもの。其他いづれも本居先生獨特の名曲です。

第一輯 人買船

(第五版)

(目曲)

人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、歸る燕、十五夜お月さん。

第二輯 一つお星さん

(第五版)

(目曲)

一つお星さん、七つの子、鼯と雀、鶏さん、象の鼻、四丁目の犬。

第三輯 青い空

(三版)

(目曲)

青い空、燕、雨夜の傘、でんぐ、虫、雀の酒盛り、呼ぶ子鳥。

東京市外田端三百五十一番地 金の星社 電話小石川五三三八七番

著名二の生先郎三岩野沖

版七第

童話赤い猫

沖野岩三郎先生のお話は、面白くつて、思はずクス／＼笑出してしまひます。そして又、どのお話も、深い教訓を持つたものばかりです。「赤い猫」は沖野先生の短篇傑作の中、特に讀本として最も適したものが集つてゐます。歐米の讀本が皆童話讀本であるやうに、「赤い猫」は日本最初の模範的童話讀本であります。

▽三五版箱入美本
▽本文二四一頁
▽定價金九十錢
▽送料十三錢

版七第

長篇父戀し

紀州の濱邊に伊吹子と明治といふ姉と弟がありました。二人のお父さんはある日、海に出たきり歸つて來ませんでした。二人はなげき悲しんで、母と共に諸々方々と尋ね歩いて、遂に滿洲まで行くといふ、沖野先生獨特の涙と教訓とに満ちた長篇物語りです。

▽四六判箱入美本
▽本文二百餘頁
▽定價金壹圓
▽送料十五錢

振替東京五九六番
電話小石川三五九番
五九六番

金の星社

東京市外一五番



三宅房子先生譯・寺内萬治郎畫伯裝幀・並挿畫

家なき子

・四六判箱入總クローヌ美本・本文二百八十頁・挿畫十數葉入。
◇定價 金壹圓八十錢・送料十五錢◇

▽「家なき子」は世界的の名作として、世界各國語に翻譯され、如何なる少年少女も是非一度は讀んで置かなければならない本として推薦されてゐるものです。
▽原作は佛國の文豪ユクトル・マローの作になり、一人の孤兒の生涯を書いたものです。名家の家に生れながら、不思議な運命にもてあそばされて、遂に旅役者に賣られ、村から村へ、さすらひ歩く哀れな物語りです。
▽また「家なき子」は一大教訓小説であります。主人公が悲しい身の上でありながら、一つ一つと人生を學んで行くあたり、讀者の涙をばらばらさせるだけでなく、また大きな教訓を與へます。歐米の各學校がそつせんして、本書を推薦してゐるのも、これが爲めに外なりません。
▽果せる哉、わが國に於ても、出版以來熱烈な歡迎を受け、驚くべき賣れ行きを呈してゐます。本書はまた、装幀の美しい點でも恐らく他にないといつて差支へないでせう。寺内萬治郎畫伯の苦心は美事に成功してゐます。金の星社はこれに使用するクローヌを特に外國から取寄せました。

東京市外一五番
金の星社

振替東京五九六番

ライオンねりほみがきは

いいにほがして、
使ひ心地が好く、
歯をきれいにし、
歯を丈夫にします。

